



思春期・青年期の衝動的行動の生起プロセスにおける促進要因および防御要因の検討 ―トップダウン・システムとボトムアップ・システムの発達に着目して―

松木, 太郎

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2017-03-25

(Date of Publication)

2019-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6808号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006808>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



博士論文

思春期・青年期の衝動的行動の生起プロセスにおける
促進要因および防御要因の検討
——トップダウン・システムとボトムアップ・システムの発達に着目して——

平成29年度 1月 17日

指導教員 齊藤 誠一 准教授

神戸大学大学院人間発達環境学研究科

人間発達専攻 ころ系講座

117D002D 松木 太郎

目次

第Ⅰ部 問題

第1章 先行研究の概観と本論文の問題意識

- 第1節 はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
- 第2節 衝動的行動の促進要因に関する先行研究の概観・・・・・・・・5
- 第3節 思春期・青年期において顕在化する衝動的行動傾向・・・・・・・・7
- 第4節 衝動的行動の生起プロセスにおける防御要因・・・・・・・・9

第2章 本論文の研究モデルと全体構成

- 第1節 本論文の研究モデル・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
- 第2節 本論文の全体構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

第Ⅱ部 実証研究

第3章 衝動的行動傾向が自己破壊的行動欲求に及ぼす影響の検討【研究1】

- 第1節 目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
- 第2節 方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
- 第3節 結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
- 第4節 考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25

第4章 獲得的レジリエンスの形成要因の検討【研究2】

- 第1節 目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
- 第2節 方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
- 第3節 結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
- 第4節 考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33

第5章 獲得的レジリエンスの抑制効果の検討【研究3】

- 第1節 目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
- 第2節 方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
- 第3節 結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
- 第4節 考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41

第6章 エフォートフル・コントロールの形成要因の検討【研究4】	
第1節 目的	45
第2節 方法	46
第3節 結果	48
第4節 考察	56
第7章 エフォートフル・コントロールの抑制効果の検討【研究5】	
第1節 目的	60
第2節 方法	61
第3節 結果	63
第4節 考察	71
第Ⅲ部 総括	
第8章 総合的考察	
第1節 本研究で明らかにされたこと	76
第2節 結論	78
引用文献	81
謝辞	93
付録1 本研究で使用した尺度	99
付録2 博士論文執筆に関わる業績一覧	108

第 I 部 問 題

第1章 先行研究の概観と本論文の問題意識

第1節 はじめに

文部科学省が示した「児童・生徒の暴力行為（対教師暴力，生徒間暴力，器物破損）の学年別加害者数」（文部科学省，2013；文部科学省，2014；文部科学省，2015）によると，学年別加害者数は，中学生の時期に急増している（Figure 1-1）。

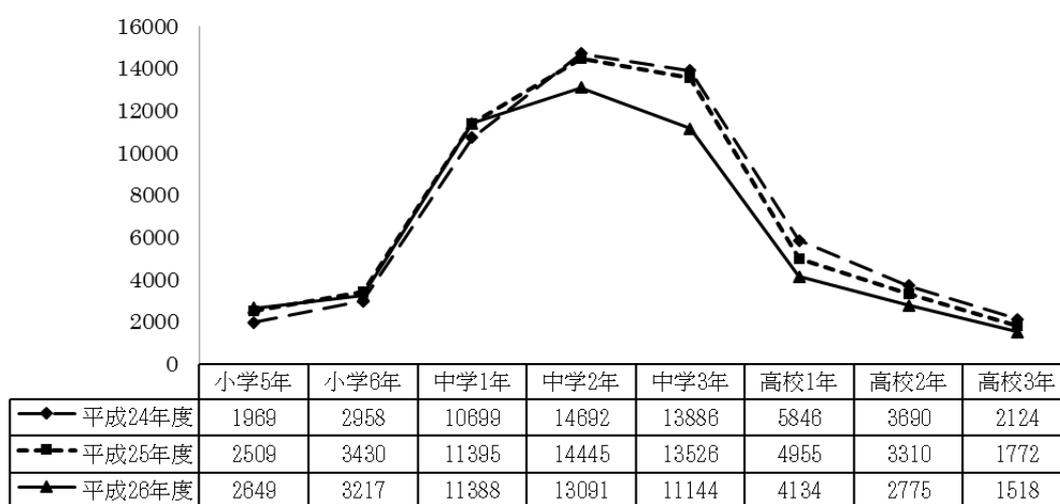


Figure 1-1. 児童・生徒の暴力行為（対教師暴力，生徒間暴力，器物破損）の学年別加害者数（平成24年度～平成26年度）。

このような傾向は少年による刑法犯においても同様にみられ，昭和59年以降，年齢層別検挙人員および人口比（触法少年は補導人員である）は，年少少年（14～15歳），中間少年（16～17歳），年長少年（18～19歳），触法少年（満14歳未満）の順に高い（法務省法務総合研究所，2012）。これらのことから，暴力行為，非行，犯罪といった問題行動は14～15歳頃にピークを迎えることがわかるが，注目すべき点は，思春期にあたる問題行動の急激な増加である。

思春期から増加する問題行動については，このような暴力行為のみならず，未成年での飲酒や喫煙，薬物の使用，性的逸脱行為，自傷行為などがあり，これらは思春期・青年期を通してみられるとされる（e.g., Hemphill et al., 2010; Steinberg, 2008）。これらの問題行動に共通して認められることは，行動によって生じるネガティブな結果について熟慮せ

ずに行われるものであるということ、すなわち、これらの行動の多くが衝動的行動 (impulsive behavior) であるということである。しかしながら、これらの衝動的行動は思春期・青年期を通して増加するにもかかわらず、なぜ思春期からこれらの行動が増加しやすいのか、また、これらの行動に対してどのような予防や介入が可能かといったことについては十分に明らかされてきたとはいえない。

なお、本論文における衝動的行動の定義は、Weiser & Reynolds (2011 山形訳 2014) の衝動的行動の定義にならい、攻撃行動、反抗的行動、自傷行為、過食、未成年の喫煙や飲酒など、「ネガティブな結果をもたらす得るという自覚があるにもかかわらず、引き起こされる行動」と定義する。たとえば、行為者が喫煙の健康上のリスクについて知っていた場合、タバコの購入および喫煙という一連の行為の中にかかなりの思慮と計画性があったとしても、喫煙という行為自体は衝動的行動とみなされるものとする (Weiser & Reynolds, 2011 山形訳 2014)。

第 2 節 衝動的行動の促進要因に関する先行研究の概観

衝動的行動の代表的な促進要因である衝動性 (impulsivity) については、唯一の普遍的に認められた定義は存在しないとされる (Weiser & Reynolds, 2011 山形訳 2014)。Lynam & Miller (2004) によると、衝動的行動の促進要因に関する研究は、それらの要因の詳細な定義について研究者間で十分なコンセンサスが得られないまま、それぞれの研究者の理論に基づいて展開されてきたといえる (Table 1-1)。

各研究にはそれぞれの衝動的行動の促進要因に関する理論や定義があるため、衝動的行動の促進要因の説明が研究者間で一致することは困難であるといえる。しかし、このような研究間の不一致は、衝動的行動研究の進展の妨げにつながるため、衝動的行動の促進要因についての共通の理解が必要であると考えられてきた (e.g., Whiteside & Lynam, 2001)。

そこで、衝動的行動の促進要因についての共通の理解を促す試みの一つとして挙げられるのが、Whiteside & Lynam (2001) の研究である。Whiteside & Lynam (2001) は、大規模なサンプルを対象に、Table 1-1 で挙げた複数の衝動的行動の促進要因を測定する尺度や、性格特性を測定する尺度である NEO-PI-R (Costa & McCrae, 1992) を用いて、先行研究間で共通する衝動的行動の促進要因の抽出を試みた。その結果、①行動を起こす

Table 1-1 衝動的行動の促進要因に関する先行研究

文献	衝動的行動の促進要因
Buss & Plomin (1975)	抑制制御 決定時間 刺激欲求 持続性
Dickman (1990)	機能的衝動性 非機能的衝動性
Patton, Stanford, & Barratt (1995)	認知的衝動性 運動的衝動性 非計画的衝動性
Cloninger, Svrakic, & Przybeck (1993)	新奇性追求 損害回避 報酬依存
Zuckerman (1994)	スリルと冒険 新奇な経験 抑制の解放 繰り返しへの嫌悪

注) Whiteside & Lynam (2001) , 国里・山口・鈴木 (2008) , Weiser & Reynolds (2011 山形訳 2014) を参考に作成。

前に, 行動の結果を予測することができる能力のなさを指す **lack of premeditation** (以下, 熟慮性のなさ), ②スリルや楽しさを追い求めたり, 目新しいことを試みたりする傾向である **sensation seeking** (以下, 刺激欲求), ③成し遂げるのが困難なことに対する集中力のなさを指す **lack of perseverance** (以下, 忍耐力のなさ), ④怒りや悲しみといった, ネガティブな情動に駆られた際に生じる衝動的行動に対する抑制のなさである **urgency** (以下, 切迫性) の4つの特性を見出した。切迫性については, 怒りや悲しみといったネガティブな情動が高まる以外に, 気分の高揚など, ポジティブな情動が高まった際においても衝動的行動に対する抑制のなさが生じるとされ, 切迫性は, **negative urgency** (以下, ネガティブな切迫性) と **positive urgency** (以下, ポジティブな切迫性) に弁別されるとした (Cyders & Smith, 2007)。

これらは, 衝動的な行動を引き起こしうる個別の心理的プロセス, すなわち衝動的行動傾向であり, それぞれの衝動的行動傾向が引き起こす衝動的行動の頻度や種類などには, 差異があることが指摘されている (Cyders & Smith, 2008; Whiteside & Lynam, 2001)。

たとえば, 計画性のなさは, アルコールの多量摂取 (Carlson, Johnson, & Jacobs, 2010 ; Lynam & Miller, 2004), アルコール依存 (Verdejo-Garcia et al., 2007) などと,

刺激欲求は、様々なりスクテイキング行動 (Steinberg, Albert, Cauffman, Banich, Graham & Woolard, 2008), 違法薬物の使用 (Carlson, Johnson & Jacobs, 2010; Horvath, Milich, Lynam, Leukefeld & Clayton, 2004), 未成年での喫煙や飲酒 (Fischer & Smith, 2008; Martin, Kelly, Rayens, Brogli, Brenzel & Smith, 2002), などと, 忍耐力のなさは, 注意力に関する問題行動 (Zapolski, Stairs, Settles, Combs & Smith, 2010) などと, ネガティブな切迫性は, 攻撃行動 (Zapolski., et al, 2010; Settles, Fischer, Cyders, Combs & Smith, 2012), 過食 (Fischer, Anderson & Smith, 2004), 自傷行為 (Glenn et al., 2010) などと, ポジティブな切迫性は, 違法薬物の使用や性的逸脱行為などとそれぞれ関連する (Cyders & Smith, 2008) ことが示されている。

以上から, 衝動的行動傾向は, 熟慮性のなさ, 刺激欲求, 忍耐力のなさ, ネガティブな切迫性, ポジティブな切迫性の 5 つに分類され, それぞれの衝動的行動傾向によって引き起こされる行動の頻度, 程度, 種類は各衝動的行動傾向によって異なるとされる。

第 3 節 思春期・青年期において顕在化する衝動的行動傾向

これらの衝動的行動傾向 (「熟慮性のなさ」「刺激欲求」「忍耐力のなさ」「ネガティブな切迫性」「ポジティブな切迫性」) の中でもとりわけ, ネガティブな切迫性, ポジティブな切迫性, 刺激欲求が思春期から高まることについては, 近年, 神経生物学的観点から明らかにされつつある (e.g., Cyders & Smith, 2008; Smith & Cyders, 2016)。

たとえば, 思春期において, 衝動の抑制に関わる前頭前皮質 (主に, 前頭前皮質背外側部, 眼窩前頭皮質, 前帯状皮質) およびセロトニン神経系よりも, 動機づけ促進作用を持つ神経伝達物質であるドパミンの神経支配を受けている側坐核や扁桃体が早くに成熟するという, 衝動的行動の制御に関わる「トップダウン・システム」と衝動的行動の促進に関わる「ボトムアップ・システム」の成熟のタイミングのギャップが生じ始めるとされている。トップダウン・システムの中心である前頭前皮質の衝動的行動への抑制の弱さは, 発達がボトムアップ・システムよりも遅れていることに加え, 発達の性質にも起因しているとされる。たとえば, 青年の前頭前皮質では, 青年期を通して, 自身の経験において不要とされる脳細胞および神経接続を選択的に除去するシナプスの刈り込みと, 神経をミエリン (髄鞘) で覆うことにより, 神経伝達の効率を高める髄鞘形成が盛んに行われている。青年の前頭全皮質で行われるこれらの再構築は, 一時的に前頭前皮質がもつ機能を低下さ

せるとされる (e.g., Weiser & Reynolds, 2011 山形訳 2014)。

また、このようなトップダウン・システムとボトムアップ・システムの発達速度の乖離に加えて思春期から認められるのが、ストレス反応に関連する視床下部-下垂体-副腎軸 (HPA 軸) の発達である。思春期から、HPA 軸の発達により心理社会的ストレスに対して敏感になり、ストレスを経験すると、トップダウン・システム機能の低下およびボトムアップ・システム機能の亢進が促されるとされる (Johnson, Dariotis & Wang, 2012; Spear, 2009; Spear, 2011 郷式訳 2014)。

以上のような、思春期・青年期におけるトップダウン・システムとボトムアップ・システムの成熟速度の乖離などの神経生物学的影響によって、ネガティブな切迫性、ポジティブな切迫性、刺激欲求が高まるとされる (Figure 1-2)。これらの衝動的行動傾向の高まりは、思春期から始まり、およそ青年期後期頃まで続くとされている (Cyders & Smith, 2008; Gunn & Smith, 2010; Spear, 2000; Steinberg, 2007; Steinberg et al., 2008; Steinberg et al., 2009)。

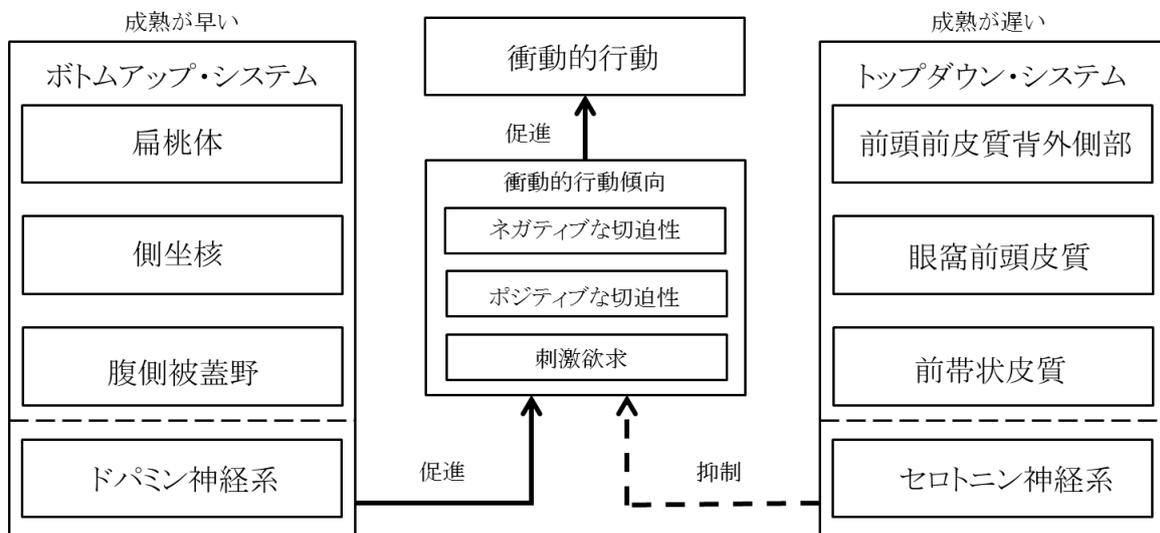


Figure 1-2. 思春期・青年期におけるトップダウン・システムとボトムアップ・システムの衝動的行動傾向および衝動的行動への影響。

ところで、これらの衝動的行動傾向 (ネガティブな切迫性, ポジティブな切迫性, 刺激欲求) の中でも、とりわけ思春期・青年期において重大な衝動的行動と関連するのが、ネガティブな切迫性である (e.g., Cyders & Smith, 2008; Settles et al., 2012)。ネガティブ

な切迫性が高い者は、不快情動を調節したりあるいは和らげたりするために、攻撃行動 (Miller, Flory, Lynam, & Leukefeld, 2003; Settles et al., 2012; Zapolski, Stairs, Settles, Combs, & Smith, 2010)、自傷行為 (Glenn & Klonsky, 2010)、過食 (Fischer, Anderson, & Smith, 2004)、喫煙関連の問題行動 (Doran, Cook, McChargue, & Spring, 2009)、飲酒関連の問題行動 (Coskunpinar, Dir, & Cyders, 2013)、薬物関連の問題行動 (Verdejo-García, Bechara, Recknor, & Pérez-García, 2007) など、思春期・青年期において好発する自己および他に対して重大な影響を与える衝動的行動を起こすことが明らかにされている。

特に、ネガティブな切迫性が攻撃行動の促進要因であることを考慮すると、前述したような我が国の思春期における暴力行為の急増の背景にはネガティブな切迫性が影響していることが考えられる。このことから、ネガティブな切迫性を高めるリスク要因であるストレスの影響の低減や、ネガティブな切迫性によって引き起こされる衝動的行動の制御について検討することは、思春期・青年期の青年の重大な衝動的行動の予防支援において重要であると考えられる。

第4節 衝動的行動の生起プロセスにおける防御要因

たとえば、ストレスの影響を抑制する防御要因として挙げられるのが、レジリエンスである。レジリエンスは、困難で脅威的な状態にさらされることで一時的に心理的に不健康の状態に陥っても、それを乗り越え、精神的病理を示さず、よく適応している状態や (小塩・中谷・金子・長峰, 2002)、ストレスフルな状況でも精神的健康を維持する、あるいは回復へと導く心理特性 (石毛・無藤, 2005) と定義される、「ストレスフルな状況におかれても、精神的健康を維持あるいは回復する人間のポジティブな心理的特徴」を指す (川島, 2014)。

レジリエンスを導く要因 (レジリエンス要因) については、身体的健康や感情調整、ソーシャル・サポートなど、様々な要因が明らかにされてきたが (e.g., 小塩・中谷・金子・長峰, 2002)、平野 (2010) は、心理学的介入の方向性を広げるために、後天的に身につけやすいレジリエンス要因に着目した。そこで、平野 (2010) は、これまで明らかにされてきた様々なレジリエンス要因から、個人の気質と関連の強い「資質的レジリエンス」と、後天的に身につけることが可能な「獲得的レジリエンス」を見出した。資質的レジエン

すが、楽観性、統御力、社交性、行動力から成る一方で、獲得的レジリエンスは、問題解決志向、自己理解、他者心理の理解から成り、獲得的レジリエンスは周囲の環境によって形成されやすいレジリエンス要因から構成される（平野，2011）。獲得的レジリエンスは、気質との関連が強い資質的レジリエンスよりも、発達に伴って身につけていくことが比較的容易であるとされるため（e.g., 平野，2011），とりわけストレスに脆弱な青年に対する予防や介入を講じるにあたって重要な防御要因の一つであるといえる。したがって、獲得的レジリエンスが思春期・青年期においてどのように形成されていくのかについて検討し、獲得的レジリエンスが有するストレスの心身への影響に対する抑制効果について検討することが必要である。

また、衝動的行動の制御に関わる防御要因として挙げられるのが、エフォートフル・コントロールである。思春期・青年期では、ボトムアップ・システムよりも未成熟ではあるものの、トップダウン・システムが機能することにより行動が制御されているとされ、そのような行動制御に関わる能力のひとつにエフォートフル・コントロール（Effortful Control）が挙げられる（e.g., Blair & Razza, 2007; Rothbart, Ahadi, & Evans, 2000）。

エフォートフル・コントロール，具体的には、不適切な接近行動を抑制する能力である「行動抑制の制御」，集中したり注意を切り替えたりする能力である「注意の制御」，ある行動を回避したい時でもそれを遂行する能力である「行動始発の制御」から成り（Véronneau, Racer, Fosco, & Dishion, 2014; 山形・高橋・繁樹・大野・木島, 2005），思春期・青年期における様々な問題行動の制御に関わるということが明らかにされている（e.g., Eisenberg et al., 2005）。

エフォートフル・コントロールは、代表的なトップダウン・プロセスである実行機能と類似する概念であるが（e.g., Bridgett, Oddi, Laake, Murdock, & Bachmann, 2013; 小林・丹野, 2013），エフォートフル・コントロールは、情動的な反応に対する制御に関連するといった側面が強いことや（e.g., Zhou, Chen, & Main, 2012），能動的・意図的に行動の制御ができているという主観的な感覚を伴う重要な能力であることから（Eisenberg, Smth, Sadosky, & Spinrad, 2004），青年の衝動的行動の防御要因としてトップダウン・システムの機能を検討する際は、エフォートフル・コントロールに焦点を当てる必要がある。

ところで、前述のように、思春期では前頭前皮質をはじめとするトップダウン・システムはボトムアップ・システムに比して未成熟であるため、エフォートフル・コントロール

は十分に機能しないことが予想される。しかし、より適切な成熟をするために再構築が行われている前頭前皮質は、家族関係や友人関係といった青年を取り巻く環境要因の影響を受けながら、思春期・青年期を通して大きく発達し、それに伴いエフォートフル・コントロールの機能も成熟していくとされている（Crone, 2009；Noble, Norman & Farah, 2005）。このことから、思春期・青年期においてエフォートフル・コントロールがどのように発達していくのか、また、エフォートフル・コントロールがどのように衝動的行動を制御するのかについて検討する必要がある。

第2章 本論文の研究モデルと全体構成

第1節 本論文の研究モデル

以上から、思春期・青年期ではトップダウン・システムに比してボトムアップ・システムの発達が早熟であることにより、衝動的行動が生起しやすいといった神経生物学的な脆弱性を有する一方で、獲得的レジリエンスやエフォートフル・コントロールといった防御要因も、青年を取り巻く環境の影響によって発達していく時期でもある。

このことから、思春期における衝動的行動の生起プロセスを明らかにするにあたっては、心理学的観点および神経生物学的観点から、多角的に青年の衝動的行動の生起プロセスについて検討することが必要であると考えられる。以下に、本論文の研究モデルを示す（Figure 2-1）。研究モデルで示された変数間の関連を明らかにすることにより、思春期・青年期における衝動的行動に対して、どのような予防・介入策が必要であるかといった重要な知見が得られると考えられる。

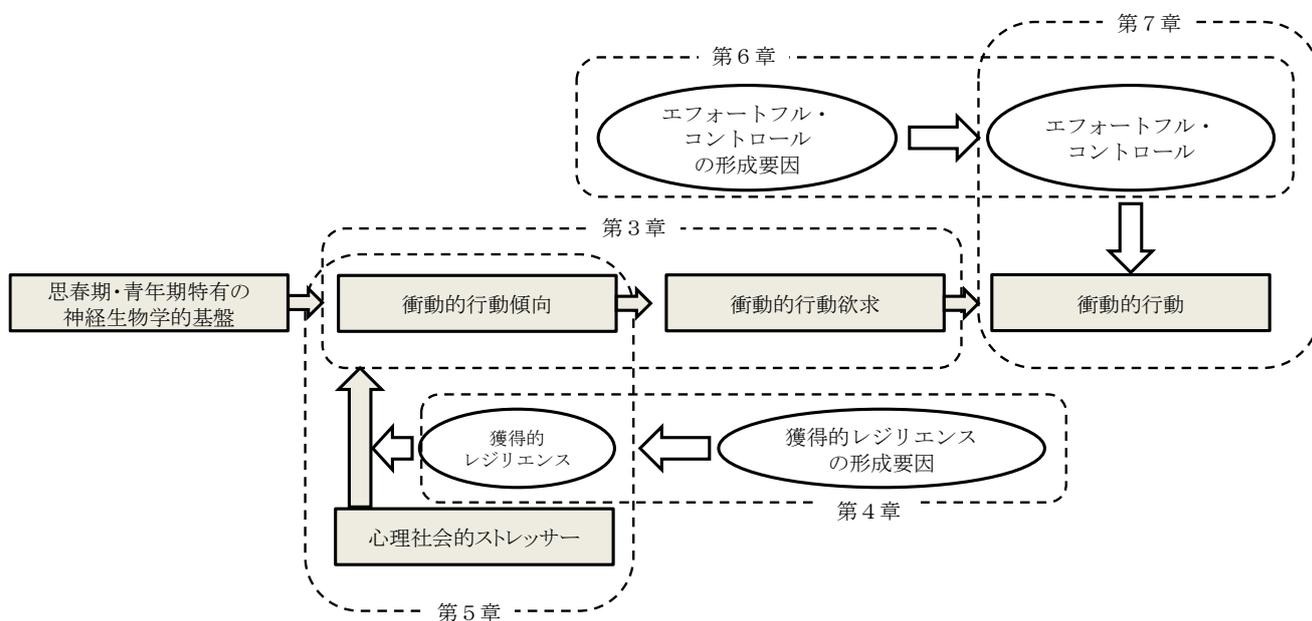


Figure 2-1. 本論文の研究モデル。

第2節 本論文の全体構成

第I部 問題

第1章 先行研究の概観と本論文の問題意識

第1節 はじめに

第2節 衝動的行動の促進要因に関する先行研究の概観

第3節 思春期・青年期において顕在化する衝動的行動傾向

第4節 衝動的行動の生起プロセスにおける防御要因

第2章 本論文の研究モデルと全体構成

第1節 本論文の研究モデル

第2節 本論文の全体構成

第II部 実証研究

第3章 衝動的行動傾向が自己破壊的行動欲求に及ぼす影響の検討【研究1】

第1節 目的

第2節 方法

第3節 結果

第4節 考察

第4章 獲得的レジリエンスの形成要因の検討【研究2】

第1節 目的

第2節 方法

第3節 結果

第4節 考察

第5章 獲得的レジリエンスの抑制効果の検討【研究3】

第1節 目的

第2節 方法

第3節 結果

第4節 考察

第6章 エフォートフル・コントロールの形成要因の検討【研究4】

第1節 目的

第2節 方法

第3節 結果

第4節 考察

第7章 エフォートフル・コントロールの抑制効果の検討【研究5】

第1節 目的

第2節 方法

第3節 結果

第4節 考察

第Ⅲ部 総括

第8章 総合的考察

第1節 本研究で明らかにされたこと

第2節 結論

第1章では、衝動的行動傾向に関する先行研究を概観した上で、思春期・青年期に顕在化する衝動的行動の生起プロセスを心理学的観点および神経生物学的観点から多角的に検討することの重要性を述べた。

第2章では、第1章を踏まえ、心理学的観点および神経生物学的観点から捉えた本研究のモデルを示した。

第3章では、青年期においてとりわけ生命に関わる重大な衝動的行動として自己破壊的行動を取り上げ、自己破壊的行動のリスク要因である自己破壊的行動欲求（自傷欲求，リスクテイキング行動欲求）が、思春期・青年期に高まるとされる衝動的行動傾向（ネガティブな切迫性，刺激欲求）とどのような関連を示すかについて実証的研究を行う。

第4章～第7章では、思春期・青年期の衝動的行動の生起プロセスにおける防御要因である獲得的レジリエンスとエフォートフル・コントロールに焦点を当てる。

第4章では、獲得的レジリエンスの形成要因の一つと考えられる「青年が不快情動を経

験した際の周囲のサポート」が獲得的レジリエンスの形成どのような影響を及ぼすかを検討するために、「青年用不快情動サポート尺度」を作成し、検討する。

第5章では、獲得的レジリエンスが、ストレスとネガティブな切迫性との関連においてどのような抑制効果を有するかを検討する。

第6章では、エフォートフル・コントロールの形成において、身体発育のタイミングおよび養育態度の認知がどのような影響を与えるかについて検討する。また、温かさと過干渉を組み合わせた養育態度の認知スタイルによって、エフォートフル・コントロールと問題行動経験頻度にどのような得点差がみられるかについて検討する。

第7章では、ストレスが、ネガティブな切迫性とエフォートフル・コントロールを媒介して、攻撃行動に対してどのような影響を与えるかを検討する。また、エフォートフル・コントロールが形成されれば、実際にネガティブな切迫性の攻撃行動への促進的影響を低下させることができるか（エフォートフル・コントロールの調整効果）について検討する。

第8章では、第3章から第7章までの実証研究を通じた総合的考察を行う。

第Ⅱ部 実証研究

第3章 衝動的行動傾向が自己破壊的行動欲求に及ぼす影響の検討【研究1】

第1節 目的

第1章でも述べたとおり，思春期・青年期の青年は衝動的行動を起こしやすいが，そのような行動の中でもとりわけ青年の生命に関わるのが，自傷行為やリスクテイキング行動といった自己破壊的行動である。たとえば，自傷行為は自殺を目的として行われるより，一時的に心理的な苦痛を和らげるために行われることが多いが（Sim, Adrian, Zeman, Cassanno, & Friedrich, 2009），自傷行為はその後の自殺による死亡とも密接に関連することが指摘されている（Arens, Gaher, & Simons, 2012; Owens, Horrocks, & House, 2002）。また，飲酒や喫煙，薬物の乱用といった自身の健康を害するリスクテイキング行動を数多く経験している者ほど，自殺による死亡のリスクが高まることが報告されている（Miller & Taylor, 2005）。

このように，青年期において生起しやすいとされる自傷行為やリスクテイキング行動などの自己破壊的行動は，自殺のリスク因子として看過できないと考えられる。それにもかかわらず，これらの行動がなぜ青年期で起こりやすいかについては十分に明らかにされてきたとは言えない。このことを明らかにするためには，青年期特有の発達的特徴を考慮した上で，これらによって生じる自己破壊的行動の促進要因について検討する必要がある。

第1章で述べたとおり，自己破壊的行動の促進要因としてまず挙げられるのが，ネガティブな切迫性である。ネガティブな切迫性が高い者は，不快情動を低減させるために，自傷行為（Glenn & Klonsky, 2010），過食（Fischer, Anderson, & Smith, 2004），喫煙関連の問題行動（Doran, Cook, McChargue, & Spring, 2009），飲酒関連の問題行動（Coskunpinar, Dir, & Cyders, 2013），薬物関連の問題行動（Verdejo-García, Bechara, Recknor, & Pérez-García, 2007）といった自己破壊的行動を起こしやすいとされる。

いまひとつの衝動的行動傾向は，刺激欲求（sensation seeking）である（Zuckerman, 1964）。刺激欲求は「多様な刺激，新奇な刺激，複雑な刺激への欲求で，危険や体験への欲求，そしてそのような体験を求めて身体的，社会的リスクを冒そうとする心理的特性」と定義され（古澤，1989），第1章で述べたとおり，ネガティブな切迫性と同様に，思春期・青年期において高まりやすいとされる。また，とりわけ刺激欲求は性ホルモンとも関

連しており、思春期から濃度が上昇するテストステロンも刺激欲求の高まりと関連することが指摘されている (Campbell et al., 2010)。刺激欲求が高い者は、刺激を得る手段として、アルコールの摂取や喫煙、(Martin et al., 2002)、違法薬物の使用 (Ayvasik & Sümer, 2010)、危険運転 (Zakletskaia, Mundt, Balousek, Wilson, & Fleming, 2009)、自傷行為 (Knorr, Jenkins, & Conner, 2013) などの自己破壊的行動を起こしやすい傾向があるとされる。

ところで、ネガティブな切迫性は、問題行動を深刻化させるのに対して、刺激欲求は問題行動の頻度を高める点で違いがあることが明らかにされてきた (Cyders & Smith, 2008; Romer et al., 2011)。これにしたがえば、ネガティブな切迫性および刺激欲求の両方が高い者は、生命の危機に関わるようなより深刻な問題行動を頻繁に行う傾向を有しているため、自己破壊的行動を起こそうとする欲求 (以下、自己破壊的行動欲求) が高まりやすく、実際に行動を起こす頻度も高くなることが予想される。これを本研究の仮説とする。

なお、ネガティブな切迫性や刺激欲求によって自己破壊的行動欲求が高められたとしても、実際に自己破壊的行動に至る青年は必ずしも多いわけではないということを考慮する必要がある (e.g., 市村・下村・渡邊, 2001)。この背景には、たとえば、周囲からのサポート (e.g., 松木, 2013; Piko & Kovács, 2010; Wichstrøm, 2009) や規範意識 (e.g., 市村・下村・渡邊, 2001)、情動および行動の制御に関する能力 (e.g., Franklin et al., 2010; Wong & Rowland, 2013) といった防御要因の影響があるとされている。したがって、Figure 3-1 に示されるように、自己破壊的行動欲求が実際に自己破壊的行動に至るかどうかは様々な防御要因によって左右され、自己破壊的行動欲求と自己破壊的行動の関連は単純ではないことから本研究では扱うことができない。

そこで本研究では、青年の自己破壊的行動の生起プロセスを明らかにする上で、まずは、青年期に高まりやすい衝動的行動傾向であるネガティブな切迫性と刺激欲求の自己破壊的行動欲求に対する影響を、特にネガティブな切迫性と刺激欲求の相互作用に着目して検討することを目的とする。

ところで、我が国ではネガティブな切迫性の測定道具が存在していないため、ネガティブな切迫性を測定する尺度を作成することも本研究の目的とする。なお、ネガティブな切迫性を測定する尺度の併存的妥当性を検討するために、先行研究 (e.g., Zapolski et al., 2010) において、青年期におけるネガティブな切迫性と正の相関を示すとされる攻撃性の行動的側面 (身体的攻撃、言語的攻撃) を取り上げる。研究対象については、青年期後期

まで脳内の成熟が十分ではないこと (e.g., Steinberg et al., 2008), 大学生は中高生に比べて親や学校からの管理が弱く, 生活の自由度が高い (武良・田村・埤森・關谷・藤側, 1998) ために問題行動に至るリスクが高くなると予想されることなどから, 大学生以上の青年期後期とする。

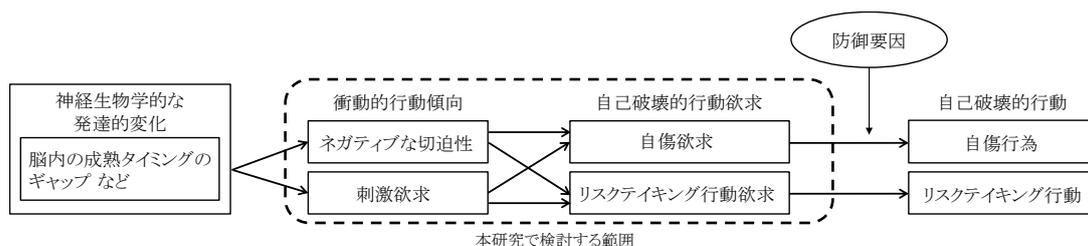


Figure 3-1. 本研究の変数間の関連。

第2節 方法

調査協力者 関西圏の大学生および大学院生 330 名 (男性 166 名, 女性 164 名) から回答を得た。そのうち, 回答に不備のあるデータを除外し, 304 名 (男性 150 名, 女性 154 名, 平均年齢 20.04 歳, $SD = 1.41$) を分析対象とした。

調査手続き 2012 年 12 月～2013 年 1 月に質問紙調査を実施した。調査は, 大学での講義時間を利用して質問紙を一斉に配布して回収した。調査への協力は任意であり, 協力しないことにより不利益を被ることはないことを説明した。

調査内容

ネガティブな切迫性 「不快情動を経験した際に衝動的に行動を起こす傾向」というネガティブな切迫性の定義 (e.g., Cyders et al. 2007) に適合するように, UPPS 衝動的行動尺度 (Whiteside & Lynam, 2001) の下位尺度 (「切迫性」「熟慮性のなさ (lack of premeditation)」「忍耐力のなさ (lack of perseverance)」「刺激欲求 (sensation seeking)」) である「切迫性」と, キレル系ストレス蓄積度尺度 (AIS) (森口・村井・大西・福山, 2011) を参考に, ネガティブな切迫性尺度の候補項目 9 項目 (Table 3-1) を作成した。教示は「下のそれぞれの文について, 今のあなたにどれくらいあてはまるか」とした。「全くあてはま

らない (1点)」から「とてもよくあてはまる (5点)」の5段階評定で回答を求めた。

攻撃性 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (安藤他, 1999) から, 身体的攻撃 (「挑発されたら, 相手をなぐりたくなるかもしれない」など6項目), 言語的攻撃 (「意見が対立したときは, 議論しないと気がすまない」など5項目) を使用した。教示は「下のそれぞれの文について, 今のあなたにどれくらいあてはまるか」とした。「全くあてはまらない (1点)」から「とてもよくあてはまる (5点)」の5段階評定で回答を求めた。

刺激欲求 日本語版 Sensation-Seeking Scale (寺崎・塩見・岸本・平岡, 1987), 刺激欲求尺度・抽象表現項目版 (古澤, 1989), 刺激欲求尺度短縮版 (Hoyle, Stephenson, Palmgreen, Lorch, & Donohew, 2002), 児童用刺激欲求尺度短縮版 (Jensen, Weaver, Ivic, & Imbodenn, 2011) を参考にして, Hoyle et al. (2002)と同様に, 刺激欲求を構成する4つの下位概念 (「スリルと冒険」「新奇な経験」「抑制の解放」「繰り返しへの嫌悪」) から2項目ずつ計8項目を作成して用いた。「スリルと冒険」は「ジェットコースターなど, スリルのある乗り物は好きなほうだ」「ヒヤッとするようなことは好きなほうだ」, 「新奇な経験」は「細かい計画を立てずに, 旅行に出かけてみたい」「一度も行ったことがない場所を探検してみたいと思う」, 「抑制の解放」は「はらはらさせることがあっても飽きさせない人と付き合うのが楽しい」「規則をやぶるようなことでも, 目新しく面白そうなことならやってみたいと思う」, 「繰り返しへの嫌悪」は「私はすぐに退屈するほうだ」「家の中にとっといって, そわそわするほうだ」であった。教示は「下のそれぞれの文について, 今のあなたにどれくらいあてはまるか」とした。「全くあてはまらない (1点)」から「とてもよくあてはまる (5点)」の5段階評定で回答を求めた。

自傷欲求 攻撃性質問紙 (安立, 2001) から, 自傷欲求を測定する項目 (「自分を傷つけたくなる時がある」など4項目) を使用した。教示は「下のそれぞれの文について, 今のあなたにどれくらいあてはまるか」とした。「全くあてはまらない (1点)」から「とてもよくあてはまる (5点)」の5段階評定で回答を求めた。

リスクテイキング行動欲求 大学生用リスクテイキング行動尺度 (小塩, 2001) を参考に, 喫煙および飲酒関連の問題行動 (たばこを吸う, 大量の酒を飲む, イッキ飲み, 飲酒運転)

への欲求を測定する 4 項目を作成した。教示は「下のそれぞれの文について、これまでに、どの程度実行しようと思ったことがあるか」とした。「全く思わなかった (1 点)」から「何度も思った (4 点)」の 4 段階評定で回答を求めた。

第 3 節 結果

1. ネガティブな切迫性尺度の作成および信頼性と妥当性の検討

本研究におけるネガティブな切迫性を測定する尺度は、一次元構造であるとの想定のもとで尺度作成が行われたため、9 項目を候補として主成分分析を行った (Table 3-1)。その結果、第 1 主成分から第 2 主成分までの寄与率は、42.80%、14.77%であった。この寄与率に関しては、第 1 主成分への寄与率が高く、かつ、第 1 主成分から第 2 主成分にかけて大きな落ち込みがみられたことから、一次元構造であることが確認された。さらに、第 1 主成分に対する主成分負荷量の絶対値が .40 未満の項目を削除し、最終的に残った 8 項目を「ネガティブな切迫性尺度」とした。累積寄与率は 45.40%であった。内的整合性を検討するために α 係数を算出したところ、 $\alpha = .81$ が得られ、高い信頼性があるものと判断された。

ネガティブな切迫性尺度の併存的妥当性を検討するために、ネガティブな切迫性尺度と身体的攻撃 ($\alpha = .80$)、言語的攻撃 ($\alpha = .66$) との相関係数について検討した。その結果、ネガティブな切迫性と身体的攻撃とは弱～中程度の正の相関 ($r = .34, p < .01$)、言語的攻撃とは弱い正の相関 ($r = .24, p < .01$) が認められた。これらの結果は、ネガティブな切迫性と攻撃性の行動的側面との関連は弱～中の正の相関にとどまるという先行研究 (Miller et al., 2003; Settles et al., 2012; Zapolski et al., 2010) の結果と一致するものである。したがって、ネガティブな切迫性尺度の併存的妥当性は満たされた。

2. ネガティブな切迫性および刺激欲求と自傷欲求、リスクテイキング行動欲求との関連の検討

基礎的分析

ネガティブな切迫性および刺激欲求と、自己破壊的行動欲求 (自傷欲求、リスクテイキ

Table 3-1 ネガティブな切迫性尺度候補項目の主成分分析結果

項目内容	主成分 負荷量	平均(<i>SD</i>)
落ち込んでいるとき、気分を晴らすために、後悔するような行動をしてしまうことがよくある	.83	2.60(1.20)
いらいらすると、よく考えずに行動してしまうことがよくある	.83	2.78(1.15)
気分が落ち込むと、よけいにつらくなるような行動であっても、それをやめられないときがある	.73	2.72(1.13)
いらいらしてよく考えずに行動したせいで、状況がさらに悪くなることがよくある	.71	2.76(1.08)
腹が立つようなことがあっても、人や物にやつあたりはしないほうだ(R)	-.67	2.59(1.19)
けんかをしているとき、あとになって、言いすぎたと思うようなことをよく言ってしまうほうだ	.55	3.07(1.25)
かっとなっても、気持ちをおさえることができるほうだ(R)	-.54	2.57(1.06)
頭にきたら、物をほうり投げたくなるのがよくある	.45	2.46(1.26)
寄与率(%)	45.40%	

注) (R)は逆転項目。削除された項目は「相手から拒絶されたと感じたとき、後悔するようなことを言ってしまうことがよくある」であった。

ング行動欲求)との関連を検討するにあたって、刺激欲求、自傷欲求、リスクテイキング行動欲求の α 係数を算出した。その結果、刺激欲求は $\alpha = .69$ 、自傷欲求は $\alpha = .66$ 、リスクテイキング行動欲求は $\alpha = .61$ と概ね満足できる値であった。次に、各変数について、性別ごとに平均値と標準偏差を算出し、各変数の性差を検討したところ、刺激欲求とリスクテイキング行動欲求の間に有意差がみられた (Table 3-2)。

Table 3-2 各変数の基礎統計分析結果

	得点範囲	男性		女性		<i>df</i>	<i>t</i>	<i>d</i>
		<i>M</i>	(<i>SD</i>)	<i>M</i>	(<i>SD</i>)			
ネガティブな切迫性	1~5	2.70	(.80)	2.69	(.73)	302	.04	.01
刺激欲求	1~5	3.38	(.67)	3.22	(.70)	302	2.06 *	.23
自傷欲求	1~5	2.15	(.82)	2.20	(.90)	302	-.45	.06
リスクテイキング行動欲求	1~4	1.68	(.67)	1.42	(.49)	271.68	3.99 **	.44

* $p < .05$ ** $p < .01$

相関分析

ネガティブな切迫性および刺激欲求と自己破壊的行動欲求(自傷欲求、リスクテイキング行動欲求)との関連について検討するため、各変数の相関係数を男女別に算出した (Table 3-3)。

まず、男性では、ネガティブな切迫性は、自傷欲求と有意な正の相関、リスクテイキン

グ行動欲求と有意な正の相関を示した。また、刺激欲求は、自傷欲求、リスクテイキング行動欲求と有意な正の相関を示し、さらに、自傷欲求はリスクテイキング行動欲求と有意な正の相関を示した。女性では、ネガティブな切迫性は、自傷欲求と有意な正の相関を示した。また、刺激欲求は、リスクテイキング行動欲求と有意な正の相関を示した。

Table 3-3 各変数の相関分析結果

	ネガティブな切迫性	刺激欲求	自傷欲求	リスクテイキング行動欲求
ネガティブな切迫性	—	.07	.45 **	.21 **
刺激欲求	.05	—	.24 **	.30 **
自傷欲求	.32 **	.10	—	.20 *
リスクテイキング行動欲求	.04	.26 **	.15	—

注) 右上: 男性 左下: 女性

* $p < .05$, ** $p < .01$

階層的重回帰分析

ネガティブな切迫性と刺激欲求の自己破壊的行動欲求（自傷欲求、リスクテイキング行動欲求）に対する相互作用を検討するために、階層的重回帰分析（強制投入法）を行った。

Step1 では、ネガティブな切迫性、刺激欲求を説明変数として、自傷欲求、リスクテイキング行動欲求を目的変数として投入し、Step2 では、ネガティブな切迫性、刺激欲求に加えてネガティブな切迫性と刺激欲求の交互作用項を説明変数として、自傷欲求、リスクテイキング行動欲求を目的変数として投入した。なお、刺激欲求において性差がみられた（Table 3-2）ことから、男女別に階層的重回帰分析を行った（男性は Table 3-4、女性は Table 3-5）。交互作用項の作成においては、多重共線性の問題を考慮し、ネガティブな切迫性と刺激欲求の平均が 0 になるように変換する「変数の中心化」（Aiken & West, 1991）を行った上で、変換した変数同士の積を求めるという方法を用いた。

男性では、自傷欲求において、Step1 における決定係数が有意であり、ネガティブな切迫性および刺激欲求が正の有意な貢献を示した。また、ネガティブな切迫性と刺激欲求の交互作用項を投入した Step2 における決定係数に有意な上昇が認められたため、ネガティブな切迫性が低い場合（ $-1SD$ ）および高い場合（ $+1SD$ ）の単回帰直線を求めた（Figure 3-2）。その結果、ネガティブな切迫性が低い場合、刺激欲求による有意な効果は認められないが（ $B = .09, ns$ ）、ネガティブな切迫性が高い場合、刺激欲求が高いほど自傷欲求が高くなることが示された（ $B = .35, p < .01$ ）。次に、リスクテイキング行動欲求においては、

Step1 における決定係数が有意であり、ネガティブな切迫性および刺激欲求が正の有意な貢献を示したが、Step1 と Step2 とを比較した決定係数の上昇は有意ではなかった。

女性では、自傷欲求において、Step1 における決定係数が有意であり、ネガティブな切迫性のみが正の有意な貢献を示したが、刺激欲求は有意な貢献を示さなかった。Step2 と Step1 とを比較した決定係数の上昇は有意ではなかった。次に、リスクテイキング行動欲求において、Step1 における決定係数は有意であり、刺激欲求のみが正の有意な貢献を示したが、Step1 と Step2 とを比較した決定係数の上昇は有意ではなかった。

Table 3-4 自己破壊的行動欲求を従属変数とした階層的重回帰分析の結果 (男性)

説明変数	自傷欲求		リスクテイキング行動欲求	
	標準偏回帰係数 (β)		標準偏回帰係数 (β)	
	Step1	Step2	Step1	Step2
ネガティブな切迫性(NU)	.43 **	.41 **	.19 *	.19 *
刺激欲求(SS)	.21 **	.21 **	.29 **	.29 **
NU×SS		.16 *		.00
R^2	.24 **	.27 **	.13 **	.13 **
ΔR^2		.03 *		.00

注) NU: ネガティブな切迫性, SS: 刺激欲求。Step1では, NU, SSを説明変数とし, Step2 では, NU, SS, NUとSSの交互作用項を説明変数とした。* $p < .05$ ** $p < .01$

Table 3-5 自己破壊的行動欲求を従属変数とした階層的重回帰分析の結果 (女性)

説明変数	自傷欲求		リスクテイキング行動欲求	
	標準偏回帰係数 (β)		標準偏回帰係数 (β)	
	Step1	Step2	Step1	Step2
ネガティブな切迫性(NU)	.32 **	.32 **	.02	.02
刺激欲求(SS)	.08	.09	.26 **	.26 **
NU×SS		.03		.01
R^2	.11 **	.11 **	.07 **	.07 **
ΔR^2		.00		.00

注) NU: ネガティブな切迫性, SS: 刺激欲求。Step1では, NU, SSを説明変数とし, Step2 では, NU, SS, NUとSSの交互作用項を説明変数とした。* $p < .05$ ** $p < .01$

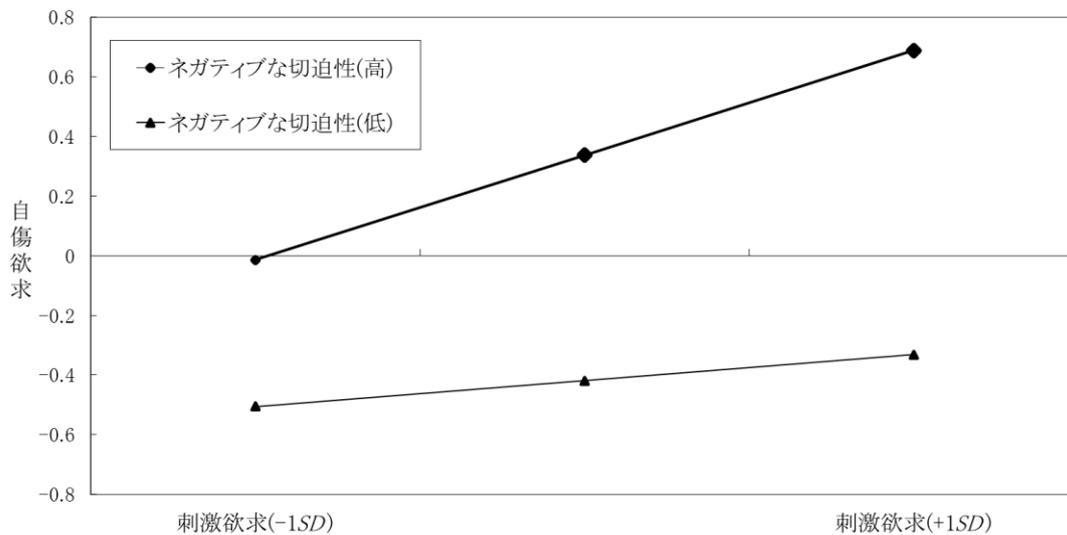


Figure 3-2. ネガティブな切迫性と刺激欲求が男性の自傷欲求に及ぼす影響。

第4節 考察

基礎的分析の結果から、ネガティブな切迫性において性差が認められなかったのはこれまでの研究と一致した (Cyders, 2013; Dir, Karyadi & Cyders, 2013; Liu & Kleiman, 2012; Lynam, Miller, Miller, Bornovalova, & Lejuez, 2011)。また、大学生における自傷行為の出現率に性差が認められないことも山口他 (2004) などの研究結果と一致した。刺激欲求については、男性ホルモンであるテストステロンと関連することなどから、一般的に男性の方が高いとされており、この結果も先行研究の結果 (Campbell et al., 2010; Cyders, 2013) と一致した。リスクテイキング行動欲求についても、喫煙や飲酒関連の問題行動といったリスクテイキング行動は男性の方が高いという先行研究の結果 (小塩, 2001) と一致した。

相関分析の結果から、ネガティブな切迫性および刺激欲求と自己破壊的行動欲求 (自傷欲求, リスクテイキング行動欲求) との関連の仕方は性別によって異なることが示唆された。Spillane, Cyders, & Maurelli (2012) によると、女性では、ネガティブな切迫性は飲酒に関する問題行動より、過食など他のリスクテイキング行動と関連する傾向が強いとされている。これにしたがうと、本研究において用いられたリスクテイキング行動欲求には、一気飲みや大量飲酒、さらには飲酒運転といったリスクの高い飲酒に関する問題行動への

欲求が含まれていたため、女性ではネガティブな切迫性とリスクテイキング行動欲求との間に有意な関連がみられなかったと考えられる。また、Laye-Gindhu & Schonert-Reichl (2005) において、「退屈だったから」「おもしろそうだったから」など、刺激欲求に関わる自傷行為の動機を有する者の割合は、女性が男性に比べ有意に低いことが示されている。このことから、女性では刺激欲求と自傷欲求との間に有意な関連がみられなかったと推察される。

階層的重回帰分析の結果から、ネガティブな切迫性および刺激欲求の両方が高い者は、自己破壊的行動欲求（自傷欲求、リスクテイキング行動欲求）が高まりやすいという仮説は、男性の自傷欲求において支持された。松本（2009）は、自傷行為が繰り返されると自殺のリスクが高まることを指摘しているが、このようなリスクは、自傷欲求が高まりやすく、自傷行為に至る頻度が少なくないことが予想されるネガティブな切迫性および刺激欲求の両方が高い男性においてより高くなることが示唆された。しかし一方で、男性では、ネガティブな切迫性が高くても刺激欲求が低い場合には自傷欲求が平均をやや下回っていたため (Figure 3-2), 成人期初期から刺激欲求が低下することを考慮すると (Steinberg et al., 2008), 成人期以降では、青年期と比較して、男性の自傷欲求は高まりにくいことが推察される。

他方、女性の階層的重回帰分析の結果は男性と異なり、ネガティブな切迫性のみが自傷欲求に有意な貢献を示していた。女性において刺激欲求は自傷行為の促進要因にはなりにくい、ネガティブな切迫性は自傷行為の重要な促進要因になるということが示されていることから (Peterson & Fischer, 2012), 女性の自傷欲求は、ネガティブな切迫性によって高められる点は男性の自傷欲求と同様であるが、刺激欲求の影響を受けにくい点において男性の自傷欲求と異なることが示唆された。男女ともに、ネガティブな切迫性と刺激欲求は自己破壊的行動欲求に対して十分な説明率を有していなかったが、これらが自己破壊的行動欲求の高まりに有意な影響を与えたことは、神経生物学的側面と関連した青年期特有の発達的特徴の影響の重要性を示唆するものであるといえる。

本研究は、ネガティブな切迫性および刺激欲求の自己破壊的行動欲求に及ぼす影響を検討したことにより、衝動的行動傾向に焦点を当てた青年の自己破壊的行動欲求の生起プロセスを明らかにし、その生起プロセスに性差が存在することを実証的に示した点において意義があるものと考えられる。このことから、衝動的行動傾向に焦点を当てた自己破壊的行動への介入においては、性差への配慮が求められることが示唆された。特に、青年の

自傷行為への予防支援において自傷行為の前段階である自傷念慮の関連要因の把握の必要性が指摘されていることから（山口他, 2013）、青年期において高まりやすい衝動的行動傾向であるネガティブな切迫性と刺激欲求が自傷欲求に及ぼす影響を明らかにした本研究の結果は、青年の自傷行為の予防支援のあり方を考える上で重要な示唆をもたらすものであると考えられる。今後の課題は、自己破壊的行動の経験頻度や防御要因を取り上げることによって、青年の自己破壊的行動の生起プロセスをより詳細に検討していくことであろう。また、青年期は前頭前皮質の可塑性が高く、周囲の環境の影響を受けながら実行機能などの自己制御能力が発達していくことを考慮すると（e.g., Crone, 2009; Véronneau, Racer, Fosco & Dishion, 2014; Weiser & Reynolds, 2011 山形訳 2014; Zelazo & Carlson, 2012）、そうした防御要因の形成プロセスを明らかにすることも重要である。

第4章 獲得的レジリエンスの形成要因の検討【研究2】

第1節 目的

第1章で述べた通り、平野（2012）によると、レジリエンスは獲得可能性の観点から、持って生まれた気質と関連が強い資質的レジリエンスと、発達的に身に付けることができる獲得的レジリエンスに分けることができるとされる。

神経生物学的観点および心理学的観点において可塑性が高い思春期・青年期では、とりわけ獲得的レジリエンスの習得が重要であると考えられる。獲得的レジリエンスが、「問題解決志向」「自己理解」「他者心理の理解」から成る（平野，2010）ことを考慮すると、青年が困難状況に直面した際に、重要な他者からの時宜を得たサポートを受けることが、獲得的レジリエンスの形成に寄与することが予想される。

そこで本研究は、まず青年がネガティブな情動を経験した際に重要な他者から受けるサポートを測定する尺度を作成し、これにより測定される不快情動サポートと獲得的レジリエンスとの関連を検討し、どのようなサポートが獲得的レジリエンス形成において有効であるかを明らかにすることを目的とする。

第2節 方法

予備調査

2014年5月～7月に、中学生・高校生・専門学校生・大学生53名（男性22名、女性31名、平均年齢17.79歳、 $SD = .90$ ）を対象にして、自由記述調査およびインタビュー調査によって、「青年用不快情動サポート尺度」作成のために項目を収集した。「とても悲しいことや、とても腹が立つことを経験した時、あなたは家族・友人に対してどのようなサポートを求めますか」という教示により得られた項目のうち、内容の重複しているものなどを整理し、12項目を「青年用不快情動サポート尺度」の候補項目とした。

調査時期・調査協力者

2014年9月～2014年12月。大学生140名（男性78名、女性62名、平均年齢19.44歳、 $SD = 1.11$ ）。

調査内容

青年の不快情動サポートを測定する項目 予備調査で作成した 12 項目について、家族・友人について「とてもつらいことや嫌なことがあった時、あなたはふだん、あなたの家族や友人からどのようなサポートを受けていますか」と教示し、「全くあてはまらない(1点)」～「とてもよくあてはまる(5点)」の 5 件法で回答を求めた。

ソーシャル・サポート 塩澤(2009)によって作成された大学生用ソーシャルサポート尺度の下位尺度である「情緒的サポート」(「ふだんからあなたの気持ちをよく理解してくれる」など 5 項目)を用いた。「全くあてはまらない(1点)」～「とてもよくあてはまる(5点)」の 5 件法で回答を求めた。

援助の欲求と態度 田村・石隈(2001)によって作成された被援助志向性尺度の下位尺度である「援助の欲求と態度」(「困っていることを解決するために、他者からの助言や援助が欲しい」など 7 項目)を用いた。家族・友人についてそれぞれ尋ねた。「全くあてはまらない(1点)」～「とてもよくあてはまる(5点)」の 5 件法で回答を求めた。

獲得的レジリエンス 平野(2010)によって作成された二次元レジリエンス要因尺度(BRS)の下位尺度である「獲得的レジリエンス」を用いた。「問題解決志向」(「人と誤解が生じたときには積極的に話をしようとする」など 3 項目)「自己理解」(「自分の性格についてよく理解している」など 3 項目)「他者心理の理解」(「人の気持ちや、微妙な表情の変化を読み取るのが上手だ」など 3 項目)の 3 下位尺度計 9 項目から成る。「全くあてはまらない(1点)」～「とてもよくあてはまる(5点)」の 5 件法で回答を求めた。

倫理的配慮 本研究で用いられたアンケートの表紙において、調査の中止および協力の辞退はいつでもできること、個人情報に十分に配慮した上で研究目的のみに使用されることなどについての記載がなされ、回答を行った者はそれらの記載に対して同意したものとみなし、調査を行った。

第 3 節 結果

1. 青年用不快情動サポート尺度の因子構造

青年の不快情動サポートを測定する項目 12 項目に対して因子分析を行った。なお、青年の不快情動サポートを測定する項目は家族と友人に分けたが、因子分析の際は、家族と友人を分けずに分析を行った。因子構造を検討し、固有値の減衰状況と解釈可能性から 2 因子を抽出し、因子負荷量の絶対値が.40 未満かつ複数の因子に.35 以上で重複をしている項目を除外して、9 項目を選定した。この 9 項目について、再度因子分析(主因子法、*Promax* 回転)を行い、2 因子を抽出した。

次に、それぞれの因子について負荷量の高い項目に着目し、第 1 因子は「なぐさめてもらう」「はげましてもらう」などから「受容的サポート」、第 2 因子は「気分転換をさせてもらう」「スポーツや遊びなどでストレスの発散に付き合ってもらおう」などから「気分転換的サポート」と命名した。

この因子分析結果をもとに、受容的サポート尺度(5 項目)、気分転換的サポート尺度(4 項目)を下位尺度とする青年用不快情動サポート尺度(9 項目)を作成した。信頼性について Cronbach の α 係数を算出したところ、受容的サポートで $\alpha = .92$ 、気分転換的サポートで $\alpha = .90$ が得られ、信頼性は満足できるものといえる。

なお、下位尺度相関は.53 であった。因子分析結果、各項目の平均値 (M) および標準偏差 (SD)、Cronbach の α 係数は Table 4-1 に示した。

Table 4-1 「青年用不快情動サポート尺度」の因子分析結果(主因子法・*Promax* 回転)

項目	I	II	M	SD
I. 受容的サポート($\alpha = .92$)				
なぐさめてもらう	1.02	-.18	3.20	(.96)
はげましてもらう	.93	-.06	3.31	(.90)
「大丈夫」と言ってもらおう	.75	.09	3.09	(1.01)
共感してもらう	.71	.19	3.37	(.96)
気持ちを理解してもらう	.68	.17	3.47	(.91)
II. 気分転換的サポート($\alpha = .90$)				
気分転換をさせてもらう	-.07	.89	3.30	(.93)
スポーツや遊びなどでストレスの発散に付き合ってもらおう	.02	.84	2.98	(.89)
嫌なことを忘れさせてもらう	.00	.83	3.14	(.95)
冗談などで笑わせてもらう	.09	.72	3.28	(.93)

2. 青年用不快情動サポート尺度の併存的妥当性の検討

青年用不快情動サポート尺度の基準関連妥当性を検討するため、受容的サポート、気分転換的サポート、ソーシャル・サポート、援助の欲求と態度との相関係数を算出した (Table 4-2)。なお、ソーシャル・サポートについては、家族のソーシャル・サポート得点と友人のソーシャル・サポート得点の合計得点を分析に用いた。その結果、受容的サポートおよび気分転換的サポートは、ソーシャルサポートおよび援助の欲求と態度と有意な正の相関を示した ($r = .46 \sim r = .64$, いずれも $p < .01$)。不快情動サポートと、ソーシャル・サポート、被援助欲求が正の関連をもつことから青年用不快情動サポート尺度の併存的妥当性は満たされているといえる。

Table 4-2 青年用不快情動サポートと各変数との相関

	ソーシャルサポート	援助の欲求と態度
受容的サポート	.64**	.46**
気分転換的サポート	.64**	.47**

** $p < .01$

3. 不快情動サポートと獲得的レジリエンスの基礎的分析

不快情動サポートと獲得的レジリエンスの下位尺度について、性別に平均値 (M) および標準偏差 (SD) を算出し、各変数の性差について検討したところ、有意な差は認められなかった (Table 4-3)。

Table 4-3 青年用不快情動サポートと獲得的レジリエンスの基礎統計および t 検定

項目	男性		女性		t
	M	SD	M	SD	
不快情動サポート					
家族からの受容的サポート	3.09	(1.01)	3.10	(1.11)	-.02
家族からの気分転換的サポート	2.87	(1.09)	2.55	(1.05)	1.50
友人からの受容的サポート	3.43	(.91)	3.58	(.92)	-.82
友人からの気分転換的サポート	3.63	(.88)	3.51	(1.08)	.66
獲得的レジリエンス					
問題解決志向	3.59	(.76)	3.51	(.82)	.48
自己理解	3.30	(.69)	3.41	(.70)	-.83
他者心理の理解	3.37	(.74)	3.59	(.77)	-1.50

4. 不快情動サポートと獲得的レジリエンスとの関連の検討

まず、不快情動サポートと獲得的レジリエンスの関連について検討するため、青年用不快情動サポート尺度の下位尺度である受容的サポートと気分転換的サポートと、獲得的レジリエンスの下位尺度である問題解決志向、自己理解、他者心理の理解との相関係数を算出した (Table 4-4)。なお、受容的サポートおよび気分転換的サポートは家族と友人に分けて分析を行った。

その結果、家族からの受容的サポートは他者心理の理解と有意な正の弱い相関を、家族からの気分転換的サポートは問題解決志向と有意な正の弱い相関を示した (それぞれ $r = .23, p < .05$; $r = .24, p < .01$)。また、友人からの受容的サポートは獲得的レジリエンスのいずれの下位尺度とも有意な相関を示さなかった (問題解決志向 $r = .06, ns$; 自己理解 $r = .02, ns$; 他者心理の理解 $r = .15, ns$) が、友人からの気分転換的サポートは獲得的レジリエンスのすべての下位尺度と有意な正の弱い相関を示した (問題解決志向 $r = .28, p < .01$; 自己理解 $r = .25, p < .01$; 他者心理の理解 $r = .23, p < .05$)。

Table 4-4 青年用不快情動サポートと獲得的レジリエンスとの相関

	獲得的レジリエンス		
	問題解決志向	自己理解	他者心理の理解
家族からの受容的サポート	.12	-.02	.23*
家族からの気分転換的サポート	.24**	.15	.15
友人からの受容的サポート	.06	.02	.15
友人からの気分転換的サポート	.28**	.25**	.23*

* $p < .05$, ** $p < .01$

次に、不快情動サポートが獲得的レジリエンスに与える影響について検討するため、青年用不快情動サポート尺度の各下位尺度を独立変数、獲得的レジリエンスの各下位尺度を従属変数とするステップワイズ法による重回帰分析を行った (Table 4-5)。

その結果、問題解決志向においては、家族からの気分転換的サポートと友人からの気分転換的サポートが有意な貢献を示した (家族からの気分転換的サポート $\beta = .19, p < .05$; 友人からの気分転換的サポート $\beta = .24, p < .05$)。また、自己理解においては、友人からの気分転換的サポートが有意な貢献を示した ($\beta = .25, p < .01$)。さらに、他者心理の理解においては、家族からの受容的サポートと友人からの気分転換的サポートが有意な貢献を示した (家族からの受容的サポート $\beta = .19, p < .05$; 友人からの気分転換的サポート $\beta = .19,$

Table 4-5 獲得的レジリエンスにおける青年用不快情動サポートの標準偏回帰係数

	獲得的レジリエンス		
	問題解決志向	自己理解	他者心理の理解
家族からの受容的サポート	—	—	.19*
家族からの気分転換的サポート	.19*	—	—
友人からの受容的サポート	—	—	—
友人からの気分転換的サポート	.24*	.25**	.19*
R^2	.11**	.06**	.09**

* $p < .05$, ** $p < .01$

$p < .05$)。決定係数はそれぞれ問題解決志向において $R^2 = .11$ ($p < .01$)、自己理解において $R^2 = .06$ ($p < .01$)、他者心理の理解において $R^2 = .09$ ($p < .01$) であった。なお、VIF は、問題解決志向において 1.06、自己理解において 1.00、他者心理の理解において 1.04 を示しており、多重共線性の問題はないと判断した。

第4節 考察

本研究の目的は、青年がネガティブな情動を経験した際に、家族や友人からどのようなサポートを受けることがレジリエンスの形成を促すかについて検討することであった。そのために、「受容的サポート」「気分転換的サポート」からなる青年用不快情動サポート尺度を作成し、獲得的レジリエンスとの関連について検討した。

その結果、問題解決志向には家族および友人からの気分転換的サポートが、自己理解には友人からの気分転換的サポートが、他者心理の理解には家族からの受容的サポートと友人からの気分転換的サポートがそれぞれ関連していることが示された。とりわけ、他者心理の理解の促進において、家族から受けるサポートの中では、受容的な関わりが有効であるのに対し、友人から受けるサポートの中では、受容的なサポートではなく、気分転換につながる関わりが有効であるという結果は、青年のレジリエンス形成に関わる家族と友人の役割の違いを示す重要なものであるといえる。

これまで、レジリエンスは発達過程の中で育まれていくものであるため、家族や友人といったサポート資源の存在はかねてより重要視されてきたが、ストレスが生じる場面で具体的にどのようなサポートを得ることが青年のレジリエンス形成において重要であるかと

いう点については十分に検討されてこなかった。そのため、誰からのどのようなサポートが、どのようなレジリエンスを形成するかについて具体的に示した本研究の結果は意義深いといえる。ただし、重回帰分析における決定係数が必ずしも高くないことや、調査協力者の人数が十分ではないことなどから、解釈には注意を要するといえる。今後は十分な調査協力者数を得た上で、青年のレジリエンスの形成に関連する他の要因についても検討する必要がある。

第5章 獲得的レジリエンスの抑制効果の検討【研究3】

第1節 目的

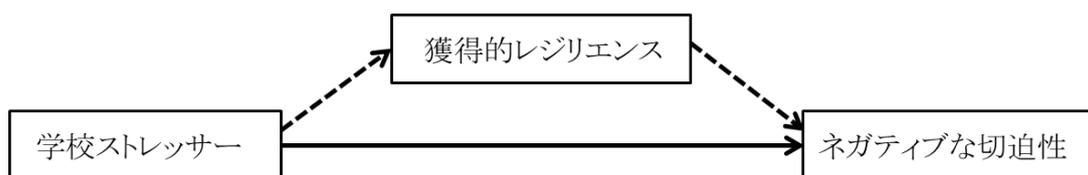
第1章で述べたとおり、ネガティブな切迫性の高まりに変化を与える要因として挙げられるのが、ストレスの存在である。ストレスを感じると、ボトムアップ・システムを構成する側坐核や扁桃体が活発になり、不快情動に対する制御が困難になることが明らかにされている (Spear, 2011 郷式 2014)。特に、トップダウン・システムとボトムアップ・システムの発達のギャップに加え、ストレス反応に関わる視床下部-下垂体-副腎軸 (HPA 軸) が大きく発達する思春期 (Johnson, Dariotis, & Wang, 2012) では、ストレスによる影響は大きいと考えられる。

しかしながら、思春期の青年は、ストレスを経験してもただちにはネガティブな切迫性が高まるわけではなく、ストレスの影響を軽減する防御要因を有していると考えられる。そのような防御要因として挙げられるのが、レジリエンスである。レジリエンスは、ストレスの影響を緩衝する、あるいはストレスフルな状態から回復する力や過程とされ (e.g., 齊藤・岡安, 2011)、中でも、後天的に獲得することが可能なレジリエンスとして「問題解決志向」「自己理解」「他者心理の理解」から成る獲得的レジリエンスが存在することが平野 (2012) によって明らかにされている。様々な問題行動の促進要因であるネガティブな切迫性が高まりやすい思春期の青年において、このような獲得的レジリエンスを身に付けることは重要であるといえる (松木・齊藤, 2016)。

そこで本研究では、ストレスの中でも思春期において大きな比重を占めるとされる学校ストレス (e.g., 岡安・嶋田・丹羽・森・矢富, 1992) を取り上げ、齊藤・岡安 (2011) と上野・鈴木・清水 (2014) のレジリエンスを媒介変数とするモデルを参考に、ストレスが直接的にネガティブな切迫性に及ぼす影響と、ストレスがレジリエンスを媒介してネガティブな切迫性に及ぼす影響について検討することを目的とする。なお、齊藤・岡安 (2011) と上野・鈴木・清水 (2014) のモデルにしたがえば、学校ストレスからネガティブな切迫性へのパスでは正の関連が、学校ストレスから獲得的レジリエンスへのパスでは負の関連が、獲得的レジリエンスからネガティブな切迫性へのパスでは負の関連がそれぞれ示されることが予想される (Figure 5-1)。

ところで、思春期では、身体発育に伴って様々な心理社会的なストレスが増大する

ことや、身体発育の程度と HPA 軸の発達に関連する (Gunnar, Wewerka, Frenn, Long, & Griggs, 2009; Johnson, Dariotis, & Wang, 2012; Spear, 2009) こと、また、身体発育の程度とネガティブな切迫性の高まりが関連する (Smith & Cyders, 2016) ことなどから、身体発育の程度によって調査対象者を分類し、比較検討を行う。なお、男女ともに最大身長成長速度 (peak height velocity; PHV)を経験するまでに中枢神経性思春期が開始し、それに伴い性ホルモンの分泌量の増大や体つきの変化、発毛がみられるなど、最大身長成長速度の経験の有無は生物学的パラメーターとして成熟度の指標となる (Bogin, 2011 日野林, 2014; 藤井, 2005) ことから、本研究では身体発育の程度を弁別する指標として、思春期における最大身長成長速度の経験の有無を測定する。



注) 実線の矢印は正の影響, 破線の矢印は負の影響をそれぞれ示している。

Figure 5-1. 本節における検討モデル。

第 2 節 方法

調査協力者 中学 1 年 129 名 (男子 61 名, 女子 68 名), 中学 2 年 182 名 (男子 87 名, 女子 95 名), 中学 3 年 177 名 (男子 85 名, 女子 92 名), 計 488 名 (男子 233 名, 女子 255 名) を対象とした。

調査手続きと倫理的配慮 2015 年 8 月に、無記名式の質問紙法による調査の実施を、校長の了承を得た上で、校長を通して各学級担任に依頼して行った。回答にあたって、プライバシーは保護されること、回答しないことにより不利益を被らないこと、いつでも中止可能なことなどを紙面上において教示した。

身体発育 身体発育の程度を測定する指標として信頼性および妥当性が確認されている

Pubertal Development Scale (Petersen, Crockett, & Boxer, 1988) を参考に作成された上長 (2007) の客観的な身体発育タイミングから「身長伸び」を参考に、「これまでに、短い期間で、身長が急に大きく伸びたことがありましたか」という最大身長成長速度の経験を測定する質問項目を作成した。評定については、上長 (2007) の「まだ起こっていない」「今、起こっている」「すでに終わった」の 3 段階評定を参考に、「まだない (1 点)」「今のびている (2 点)」「あった (3 点)」の 3 件法で回答を求めた。

学校ストレス 西野・小林・北川 (2009), 田中 (2006), 岡安・嶋田・丹羽・森・矢富 (1992) の学業ストレスと友人関係ストレスに関する項目のうち、因子負荷量が高い項目を参考にしながら、調査対象者への負担を考慮してできる限り項目数が少なくなるように、学業に関するストレス (以下、学業ストレス) 3 項目 (「一生けんめい勉強しているのに、成績がのびなかった」「勉強で新しい内容 (新しく教わったこと) をおぼえるのが大変だった」「テストや通知表の成績が悪かった」), 友人関係に関するストレス (以下、友人ストレス) 2 項目 (「友だちからいやなことを言われた」「友だちとけんかをした」), 部活動に関するストレス (以下、部活ストレス) 2 項目 (「部活動の練習がきびしかった」「部活動で、練習しても上達しなかった」) の計 7 項目を設定した。

それぞれの項目に対して、その出来事の最近数か月間の経験頻度 (「全然なかった (0 点)」「たまにあった (1 点)」「ときどきあった (2 点)」「よくあった (3 点)」の 4 段階評定) の回答を求め、経験があった場合 (「たまにあった (1 点)」「ときどきあった (2 点)」「よくあった (3 点)」) には、その出来事に対する嫌悪度 (「全然いやではなかった (0 点)」「(すこしいやだった (1 点)」「かなりいやだった (3 点)」「とてもいやだった (4 点)」の 4 件法) についての回答を求めた。各学校ストレスの得点は、岡安他 (1992) と同様に、経験頻度と嫌悪度の積とする (各項目の得点範囲は 0~9 点)。したがって、各ストレスの得点範囲は、学業ストレスで 0~27 点、友人ストレスで 0~18 点、部活ストレスで 0~18 点となる。 α 係数をそれぞれ算出したところ、学業ストレスは $\alpha=.71$, 友人ストレスは $\alpha=.60$, 部活ストレスは $\alpha=.62$ が得られ、おおむね満足できる内的一貫性が確認された。

獲得的レジリエンス 平野 (2010) の二次元レジリエンス要因尺度 (BRS) から「獲得的

レジリエンス」を用いた。これは「問題解決志向」3項目（「人と誤解が生じたときには積極的に話をしようとする」など）「自己理解」3項目（「自分の性格についてよく理解している」など）「他者心理の理解」3項目（「人の気持ちや、微妙な表情の変化を読み取るのが上手だ」など）の3下位尺度計9項目から構成されている。妥当性については、平野(2010)により、検証されている。それぞれの項目について、「全くあてはまらない(1点)」から「とてもよくあてはまる(5点)」の5件法で回答を求めた。 α 係数を算出したところ、 $\alpha=.74$ が得られ、十分な内的一貫性が確認された。

ネガティブな切迫性 第2章第2節で作成したネガティブな切迫性尺度8項目（「いらいらすると、よく考えずに行動してしまうことがよくある」など）を用いた。それぞれの項目について、「まったくあてはまらない(1点)」～「とてもよくあてはまる(5点)」の5件法で回答を求めた。 α 係数を算出したところ、 $\alpha=.80$ が得られ、十分な内的一貫性が確認された。

第3節 結果

1. 身体発育のタイミングによるグルーピング

身体発育のタイミングに対して、「まだない(1点)」と回答した者を未成熟群(男子77名、女子101名、計178名)、「今のびている(2点)」と回答した者をオンタイム群(男子67名、女子28名の計95名)、「あった(3点)」と回答した者を成熟群(男子89名、女子126名、計215名)に分類した(Table 5-1)。

Table 5-1 身体発育のタイミングによるクロス集計

	未成熟(%)	オンタイム(%)	成熟(%)	計(%)
男子	77 (33.3)	67 (28.8)	89 (38.2)	233 (100.00)
女子	101 (39.6)	28 (11.0)	126 (49.4)	255 (100.00)
計	178 (36.5)	95 (19.5)	215 (44.1)	488 (100.00)

2. 群別の各変数の平均値および分散分析

各変数の基礎統計量を身体発育のタイミング（未成熟，オンタイム，成熟）と性別（男子，女子）に算出し，身体発育のタイミングと性別を独立変数，各変数を従属変数とする分散分析を行った（Table 5-2）。その結果，学業ストレスにおいて身体発育のタイミングの主効果が認められたため，多重比較（Tukey の HSD 法）を行った結果，オンタイム群が最も得点が低かった。また，獲得的レジリエンスにおいて性別の主効果が認められ，女子の方が男子よりも得点が高かった。ただし，有意差が認められた各変数で得られた効果量はいずれも小さかった（ $\eta^2 = .01 \sim .02$ ）。

Table 5-2 各変数の身体発育のタイミング・性別の平均値（SD）および分散分析結果

	未成熟		オンタイム		成熟		F値(自由度)	η^2	
	男子 (n = 77)	女子 (n = 101)	男子 (n = 67)	女子 (n = 28)	男子 (n = 89)	女子 (n = 126)			
学業ストレス (0点～18点)	5.85 (3.85)	6.01 (4.37)	3.99 (3.58)	5.52 (4.17)	6.51 (4.19)	5.70 (4.30)	身体発育	3.19 (2/482) *	.01
							性別	.50 (1/482)	.01
							交互作用	2.39 (2/482)	.00
友人ストレス (0点～18点)	2.81 (3.63)	3.32 (4.19)	2.43 (2.99)	3.46 (4.97)	2.94 (3.78)	3.10 (3.89)	身体発育	.02 (2/482)	.01
							性別	2.08 (1/482)	.00
							交互作用	.39 (2/482)	.01
部活ストレス (0点～18点)	6.77 (5.48)	7.60 (6.33)	5.36 (5.48)	6.89 (5.93)	7.10 (5.56)	8.18 (6.70)	身体発育	1.81 (2/482)	.00
							性別	3.53 (1/482)	.01
							交互作用	.09 (2/482)	.00
獲得的レジリエンス (1点～5点)	3.29 (0.54)	3.47 (0.50)	3.41 (0.61)	3.60 (0.58)	3.37 (0.62)	3.53 (0.52)	身体発育	1.61 (2/482)	.01
							性別	9.53 (1/482) *	.02
							交互作用	.04 (2/482)	.00
ネガティブな切迫性 (1点～5点)	3.05 (0.70)	2.89 (0.80)	2.84 (0.65)	2.95 (0.88)	3.00 (0.69)	3.02 (0.78)	身体発育	.68 (2/482)	.00
							性別	.00 (1/482)	.00
							交互作用	1.10 (2/482)	.01

注) 学業ストレスの得点範囲は0～27点であるが，友人ストレスと部活ストレスと比較しやすいよう，得点範囲が0～18点になるよう調整した。

* $p < .05$

3. 各変数の相関分析

各変数の相関分析の結果を Table 5-3 に示した。部活ストレスは学業ストレス，友人ストレス，ネガティブな切迫性と有意な正の相関を示した。学業ストレスは，友人ストレス，ネガティブな切迫性と有意な正の相関を示し，獲得的レジリエンスと有意な負の相関を示した。友人ストレスは獲得的レジリエンスとは有意な負の，ネガティブな切迫性とは有意な正の相関を示した。獲得的レジリエンスはネガティブな切迫性

Table 5-3 各変数の相関係数

	1	2	3	4
1 学業ストレス				
2 友人ストレス	.29 **			
3 部活ストレス	.45 **	.29 **		
4 獲得的レジリエンス	-.15 **	-.10 *	-.04	
5 ネガティブな切迫性	.31 **	.24 **	.22 **	-.23 **

* $p < .05$, ** $p < .01$

と有意な負の相関を示した。

4. ネガティブな切迫性に対する学校ストレスと獲得的レジリエンスの影響の検討

ネガティブな切迫性に対する学校ストレスと獲得的レジリエンスの影響が、未成熟群、オンタイム群、成熟群の3群でどのように異なるかを検討するために、性別を統制変数として投入した多母集団同時分析を行った。全ての群において有意でなかったパスを削除した結果、Figure 5-2 のモデルが得られた。

モデルについては、 $\chi^2(15) = 15.54$, $p = .41$, GFI = .99, AGFI = .96, CFI = 1.00, RMSEA = .01 であり、十分な適合度が示された。各群のパス係数は Table 3-2-4 に示した。

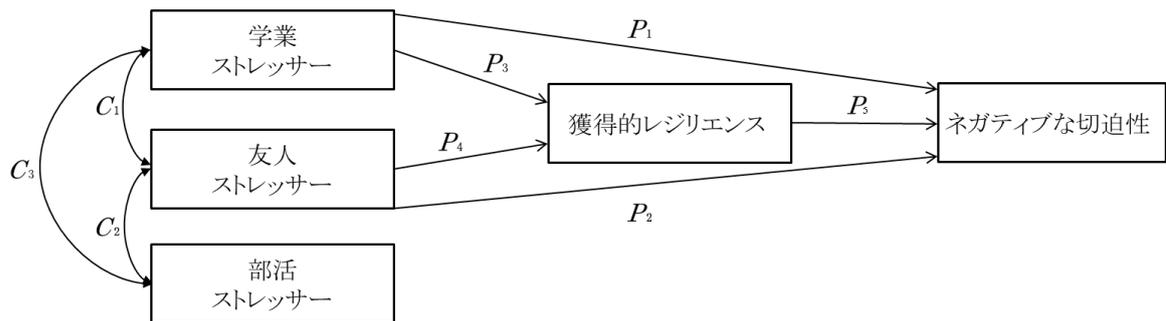


Figure 5-2. 多母集団同時分析で採用されたモデル（誤差項，統制変数は省略）。

学業ストレスからネガティブな切迫性へのパス (P_1) については、オンタイム群では有意なパスが認められず、未成熟群と成熟群では有意な正のパスが認められた。友人ストレスからネガティブな切迫性へのパス (P_2) については、未成熟群では有意なパスが認められず、オンタイム群と成熟群で有意な正のパスが認められた。学業ストレスから獲得的レジリエンスへのパス (P_3) については、オンタイム群においてのみ有意な負のパスが認められた。友人ストレスから獲得的レジリエンスへのパス (P_4) については、未成熟群においてのみ、有意な負のパスが認められた。獲得的レジリエンスからネガティブな切迫性へのパス (P_5) については、全ての群において有意な負のパスが認められた。

また、未成熟群では友人ストレスが獲得的レジリエンスを媒介してネガティブな切迫性に影響を及ぼし、オンタイム群では学業ストレスが獲得的レジリエンスを媒介してネガティブな切迫性に影響を及ぼすという間接効果がそれぞれ認められたことから、上野・鈴木・清水 (2014) と同様に、それぞれの間接効果モデルにおけるパス係数を算出し、獲得的レジリエンスを媒介しない場合のパス係数 (直接効果モデル) と獲得的レジリエンスを媒介した場合のパス係数 (間接効果モデル) の比較検討を行った。

未成熟群では、友人ストレスからネガティブな切迫性へのパスの係数が.13 であったのに対し、獲得的レジリエンスを媒介した場合のパスの係数は.03 [(-.18) × (-.16)] であったため、未成熟群では、友人ストレスは獲得的レジリエンスを媒介した方が、ネガティブな切迫性へのパス係数の値は低くなることが示された。

また、オンタイム群では、学業ストレスからネガティブな切迫性へのパスの係数が.14 であったのに対し、獲得的レジリエンスを媒介した場合のパスの係数は.07 [(-.27) × (-.27)] であったため、オンタイム群では、学業ストレスは獲得的レジリエンスを媒介した方が、ネガティブな切迫性へのパス係数の値は低くなることが示された。

なお、決定係数については、獲得的レジリエンスでは、未成熟群で $R^2 = .08$ 、オンタイム群で $R^2 = .19$ 、成熟群で $R^2 = .03$ であった。ネガティブな切迫性では、未成熟群で $R^2 = .15$ 、オンタイム群で $R^2 = .21$ 、成熟群で $R^2 = .12$ であった。

第4節 考察

本研究は、身体発育のタイミング (未成熟、オンタイム、成熟) ごとに、学校ストレッ

Table 5-4 各群のパス係数

	未成熟群 (<i>n</i> = 178)	オンタイム群 (<i>n</i> = 95)	成熟群 (<i>n</i> = 215)
P_1 (学業ストレス→ネガティブな切迫性)	.28 **	.14	.21 **
P_2 (友人ストレス→ネガティブな切迫性)	.13	.19 *	.16 *
P_3 (学業ストレス→獲得的レジリエンス)	-.07	-.27 **	-.13
P_4 (友人ストレス→獲得的レジリエンス)	-.18 *	-.16	.08
P_5 (獲得的レジリエンス→ネガティブな切迫性)	-.16 *	-.27 **	-.16 *
C_1 (学業ストレス↔友人ストレス)	.22 **	.32 **	.26 **
C_2 (友人ストレス↔部活ストレス)	.30 **	.52 **	.26 **
C_3 (学業ストレス↔部活ストレス)	.53 **	.42 **	.39 **

* $p < .05$, ** $p < .01$

サー（学業ストレス、友人ストレス、部活ストレス）が獲得的レジリエンスおよびネガティブな切迫性に及ぼす影響がどのように異なるかについて明らかにすることを目的として行われた。

分散分析の結果から、学業ストレスにおいて身体発育のタイミングの主効果が認められ、オンタイム群が他の2群よりも得点がわずかに低いことが認められた。これについて、オンタイム群は身長伸びだけでなく他の身体的変化も大きく、こうした身体的変化がその比較の基準となる友人とともにストレスとなり、相対的に学業ストレスが低くなったものと推測できる。獲得的レジリエンスにおいては性別の主効果が認められ、平野（2013）が指摘するように、思春期の女子は男子よりも人間関係を良好に保とうとするために獲得的レジリエンスが高いことが示唆された。

多母集団同時分析の結果では、まず、未成熟群では、友人ストレスからネガティブ

な切迫性への影響が獲得的レジリエンスによって軽減されるという間接効果が認められた一方で、学業ストレスは獲得的レジリエンスを媒介せず、ネガティブな切迫性を直接高めることが示唆された。オンタイム群では、未成熟群と異なり、学業ストレスからネガティブな切迫性への影響が獲得的レジリエンスによって軽減されるという間接効果が認められた一方で、友人ストレスは獲得的レジリエンスを媒介せず、ネガティブな切迫性を直接高めることが示唆された。成熟群では、未成熟群とオンタイム群と異なり、学業ストレスと友人ストレスの両方が獲得的レジリエンスを媒介せず、どちらのストレスもネガティブな切迫性に対して直接的に影響を及ぼしていた。

これらの結果から、未成熟群では、ネガティブな切迫性を直接的に高めるリスク要因となっていたが、オンタイム群のように身体発育が顕著な段階では、周囲の友人と自身の体つきを比較したりすることにより、自身の身体に対する認知が変容し (e.g., 上長, 2007), それに伴い友人関係においても様々な変化が生じるため、学業ストレスよりも友人ストレスの影響の方が大きな負担になると考えられる。

また、成熟群の結果については、思春期では身体発育の進行に伴いストレス反応が生じやすくなる (Stroud, Papandonatos, Williamson, & Dahl, 2004; Stroud et al., 2009) ことを考慮すると、身体発育が未成熟群およびオンタイム群よりも比較的進行していることが予想される成熟群では、ストレスを経験した際は、他群よりもレジリエンスが機能しにくく、ストレスによってネガティブな切迫性が高められやすいことが予想される。

なお、部活ストレスは、相関分析においては、ネガティブな切迫性と有意な負の相関を示していた一方で、他母集団同時分析においては、未成熟群、オンタイム群、成熟群のいずれの群においても、部活ストレスからネガティブな切迫性への有意なパスがみられなかった。このことについては、中学生では、学業に関するストレス、友人関係に関するストレス、先生との関係に関するストレス、部活動に関するストレスの中でも、とりわけ学業に関するストレス、友人関係に関するストレスが中学生のストレス反応と強い関連を示すとされている (e.g., 岡田, 2002; 岡安他, 1992) ことから推察された。

以上から、学校ストレスに対して獲得的レジリエンスが防御要因として機能するかどうかは身体発育の段階によって異なることが示唆されたものの、全群において獲得的レジリエンスがネガティブな切迫性に対して抑制的影響を示したことから、思春期において獲得的レジリエンスを身に付けることの重要性が示唆されたといえる。今後は、縦断研究

を行うことにより、ストレス、獲得的レジリエンス、ネガティブな切迫性の関連をより明確にしていくことが必要であろう。

第6章 エフォートフル・コントロールの形成要因の検討 【研究4】

第1節 目的

第1章で述べた通り，思春期では，このような神経生物学的な脆弱性が認められる一方で，必ずしも多くの青年が衝動的行動を起こすわけではない（e.g., Romer, 2011）。すなわち，多くの青年は，容易には衝動的行動を起こさない何らかの防御要因を持ち合わせていると考えられる。このような衝動的行動の生起の制御する防御要因の一つとして挙げられるのが，エフォートフル・コントロール（Effortful Control）（Eisenberg et al., 2005）である。

エフォートフル・コントロールは，能動的に行動を制御する能力であり，具体的には，不適切な接近行動を抑制する能力である「行動抑制の制御」，集中したり注意を切り替えたりする能力である「注意の制御」，ある行動を回避したい時でもそれを遂行する能力である「行動始発の制御」から成り（Véronneau, Racer, Fosco, & Dishion, 2014; 山形・高橋・繁樹・大野・木島, 2005），青年期における様々な問題行動の生起の制御に関わることが明らかにされている（Eisenberg et al., 2005）。

ところで，エフォートフル・コントロールは実行機能と同様に，前頭前皮質の成熟と密接に関わっているとされる（e.g., Nigg, 2006）。すなわち，前述のように，思春期では前頭前皮質が十分に成熟していないことを考慮すると，エフォートフル・コントロールは十分に機能しないことが予想される。しかし，より適した成熟をするために再構築が行われている青年の前頭前皮質は，環境の影響を受けながら大きく発達し，エフォートフル・コントロールもそれに伴い発達するとされる（Crone, 2009; Noble, Norman & Farah, 2005; Spear, 2009）。たとえば，養育者からの青年に対する支持的な関わりは，青年のエフォートフル・コントロールの発達を促し，養育者からの否定的な関わりは，エフォートフル・コントロールの発達を妨げるという先行研究の結果（e.g., Eisenberg et al., 2005; Véronneau, Racer, Fosco & Dishion, 2014）からも示唆されるように，エフォートフル・コントロールは，青年にとって適切な養育環境などによって発達が促され，問題行動の制御に寄与すると考えられる。

このように，青年のエフォートフル・コントロールは，彼らを取り巻く環境の影響を受

けながら発達していくが、エフォートフル・コントロールの発達過程において看過できない影響を与えると考えられるのが、身体発育に伴う心理的变化である。たとえば、身体発育が早熟な青年は、未成熟な青年よりも親との葛藤が多いことや、親との関係性が希薄である (e.g., Collins & Laursen, 2004; Paikoff & Brooks-Gunn, 1991) ことから、早熟な青年と未成熟な青年では養育態度の認知が異なることが推測され、エフォートフル・コントロールの発達過程において差異が生じることが予想される。また、エフォートフル・コントロールと問題行動との関連においては、身体発育に伴う神経生物学的影響を考慮する必要がある。たとえば、Khurana et al.(2012)によると、早熟な女子はエフォートフル・コントロールと関連するとされるワーキングメモリ能力が高いとされており、このことから、身体発育の程度によってエフォートフル・コントロールによる問題行動に対する制御力が異なることが予想される。したがって、エフォートフル・コントロールを媒介した養育態度の認知から問題行動へと至るプロセスにおいては、思春期における身体発育のタイミングに関わる心理的影響および神経生物学的影響が大きいと考えられる。

そこで本節では、思春期における身体発育のタイミングに焦点を当て、青年の養育態度の認知（温かさ、過干渉）が、彼らのエフォートフル・コントロールを媒介して問題行動に対してどのような影響を及ぼすかについて検討することを目的とする。

また、温かさと過干渉を組み合わせた養育態度の認知スタイルに着目することによって、養育態度の認知が青年に及ぼす影響を詳細に検討することが可能になることから (e.g., 藤原・濱口, 2009), 本研究では、養育態度の認知スタイルとエフォートフル・コントロールと問題行動との関連についても検討する。

なお、本節では、第5章と同様に、身体発育の程度を弁別する指標として、思春期における最大身長成長速度の経験の有無を測定する。

第2節 方法

調査協力者 兵庫県内の小学校5年 83名 (男子 38名, 女子 45名), 小学校6年 70名 (男子 36名, 女子 34名), 中学1年 129名 (男子 61名, 女子 68名), 中学2年 183名 (男子 88名, 女子 95名), 中学3年 180名 (男子 87名, 女子 93名), 計 645名 (男子 310名, 女子 335名) を対象とした。

調査手続きと倫理的配慮 2015年8月に、無記名式の質問紙法による調査の実施について、小学校および中学校の各学校長の了承を得た上で、各学校長を通して各学級担任に依頼して行った。回答にあたって、プライバシーは保護されること、回答しないことにより不利益を被らないことなどを紙面上において教示した。

身体発育 「これまでに、短い期間で、身長が急に大きく伸びたことがありましたか」という質問に対して、「まだない(1点)」「今のびている(2点)」「あった(3点)」の3件法で回答を求めた。

養育態度の認知 吉武・松本・室橋・古荘・菅原(2012)で用いられた親の養育態度尺度から「温かさ」(「よろこんであなたといろいろな事を話す」など3項目)と「過干渉」(「あなたがしようとすることに、いちいちこうしなさい、とうるさく言う」など3項目)を使用した。それぞれの項目について、「全くない(1点)」から「いつもそうだ(5点)」の5件法で回答を求めた。 α 係数を算出したところ、「温かさ」で $\alpha=.84$ 、「過干渉」で $\alpha=.71$ が得られ、十分な内的一貫性が確認された。

エフォートフル・コントロール Ellis & Rothbart(2001)によって作成されたEATQ-R短縮版から、エフォートフル・コントロールを測定する項目を、鋤柄・古田・中川(2013)の邦訳を参考にして用いた。エフォートフル・コントロールは、「行動始発の制御」(「物事を時間通りになかなか終わらせることができない」など5項目)「注意の制御」(「宿題に集中するのは簡単だ」など6項目)「行動抑制の制御」(「やめろと言われたら、していることをすぐにやめることができる」など5項目)の3下位尺度計16項目から成る。それぞれの項目について、「全くあてはまらない(1点)」から「とてもよくあてはまる(5点)」の5件法で回答を求めた。 α 係数を算出したところ、 $\alpha=.77$ が得られ、十分な内的一貫性が確認された。

問題行動経験頻度 金子(2011)で用いられた問題行動経験尺度を参考に、7項目(「学校で禁止されている持ち物をもって来る」「学校の規則にあわない服装や髪型をする」「大人に対して反抗的な口調で話す」「大人の指示にしたがわない」「夜遅い時間に外で遊びまわる」「親や先生に見つかったら怒られそうなことを、こっそりする」「大人から注意され

たことに反抗する)を作成して用いた。それぞれの項目について、「まったくなかった(0点)」から「なんどもあった(4点)」の5件法で回答を求めた。 α 係数を算出したところ、 $\alpha=.81$ が得られ、十分な内的一貫性が確認された。

第3節 結果

1. 身体発育のタイミングによるグルーピング

身体発育のタイミングに対して、「まだない(1点)」と回答した群を未成熟群(男子118名,女子140名,計258名),「今のびている(2点)」と回答した群をオンタイム群(男子84名,女子51名,計135名),「あった(3点)」と回答した群を成熟群(男子108名,女子144名,計252名)とした(Table 6-1)。なお,身体発育のタイミングの差異を明確にするために,以後の分析ではオンタイム群を分析から除外した。

Table 6-1 身体発育のタイミングによるクロス集計

	未成熟 (%)	オンタイム (%)	成熟 (%)	計 (%)
男子	118 (38.1)	84 (27.2)	108 (34.8)	310 (100.00)
女子	140 (41.8)	51 (15.2)	144 (43.0)	335 (100.00)
計	258 (40.0)	135 (20.9)	252 (39.1)	645 (100.00)

2. 群別の各変数の平均値および分散分析

身体発育のタイミングと性別を独立変数,各変数を従属変数とする分散分析を行った(Table 6-2)。その結果,温かさでは,性別の主効果が認められ,女子の方が男子よりも高かった。過干渉では,性別の主効果が認められ,男子の方が女子よりも高かった。エフォートフル・コントロールでは,性別の主効果が認められ,女子の方が男子よりも高かった。有意差が認められた各変数で得られた効果量はいずれも小さかった($\eta^2 = .01 \sim .04$)。

3. 各変数の相関分析

各変数の全体の相関分析の結果を Table 6-3 に,男女別の相関分析の結果を Table 6-4 に,男子の身体発育のタイミング別の相関分析の結果を Table 6-5 に,女子の身体発育のタイミング別の相関分析の結果を Table 6-6 に,それぞれ示した。

全体の相関分析の結果では、温かさは、過干渉と有意な負の相関を、エフォートフル・コントロールと有意な正の相関を、問題行動経験頻度と有意な負の相関をそれぞれ示した。過干渉は、エフォートフル・コントロールと有意な負の相関を、問題行動経験頻度と有意な正の相関をそれぞれ示した。エフォートフル・コントロールは、問題行動経験頻度と有意な負の相関を示した。

Table 6-2 各変数の身体発育のタイミング・性別の平均値(SD)および分散分析結果

	男子		女子			F値(自由度)	η^2
	早熟 (n = 108)	晩熟 (n = 118)	早熟 (n = 144)	晩熟 (n = 140)			
温かさ	3.50 (0.93)	3.48 (0.93)	3.98 (0.81)	3.78 (1.01)	身体発育	1.77 (1/506)	.00
					性別	22.68 (1/506) **	.04
					交互作用	1.10 (1/506)	.00
過干渉	3.13 (0.96)	3.04 (0.98)	2.89 (1.01)	2.84 (0.96)	身体発育	.66 (1/506)	.00
					性別	6.16 (1/506) *	.01
					交互作用	.05 (1/506)	.00
エフォートフル・ コントロール	3.14 (0.53)	3.18 (0.45)	3.32 (0.52)	3.28 (0.52)	身体発育	.00 (1/506)	.00
					性別	9.60 (1/506) **	.02
					交互作用	.93 (1/506)	.00
問題行動経験頻度	0.96 (0.79)	0.89 (0.76)	0.87 (0.78)	0.81 (0.68)	身体発育	.98 (1/506)	.01
					性別	1.72 (1/506)	.02
					交互作用	.00 (1/506)	.00

* $p < .05$, ** $p < .01$

Table 6-3 各変数の相関係数 (全体)

	1	2	3
1 温かさ			
2 過干渉	-.10 *		
3 エフォートフル・コントロール	.31 **	-.33 **	
4 問題行動経験頻度	-.22 **	.26 **	-.47 **

* $p < .05$, ** $p < .01$

男子の相関分析の結果では、温かさは、エフォートフル・コントロールと有意な正の相関を、問題行動経験頻度と有意な負の相関を示した。過干渉は、エフォートフル・コントロールと有意な負の相関を、問題行動経験頻度と有意な正の相関を、エフォートフル・コ

ントロールは、問題行動経験頻度と有意な負の相関をそれぞれ示した。

女子の相関分析の結果では、温かさは、過干渉と有意な負の相関を、エフォートフル・コントロールと有意な正の相関を、問題行動経験頻度と有意な負の相関をそれぞれ示した。過干渉は、エフォートフル・コントロールと有意な負の相関を、問題行動経験頻度と有意な正の相関をそれぞれ示した。エフォートフル・コントロールは、問題行動経験頻度と有意な負の相関を示した。

Table 6-4 各変数の相関係数 (男女別)

	1	2	3	4
1 温かさ		-.07	.29 **	-.23 **
2 過干渉	-.18 **		-.22 **	.15 **
3 エフォートフル・コントロール	.31 **	-.33 **		-.40 **
4 問題行動経験頻度	-.18 **	.37 **	-.53 **	

注) 上段:男子, 下段:女子

** $p < .01$

男子成熟群の相関分析の結果では、温かさは、エフォートフル・コントロールと有意な正の相関を、問題行動経験頻度と有意な負の相関をそれぞれ示した。過干渉は、エフォートフル・コントロールと有意な負の相関を、問題行動経験頻度と有意な正の相関をそれぞれ示した。エフォートフル・コントロールは、問題行動経験頻度と有意な負の相関を示した。

男子未成熟群の相関分析の結果では、温かさは、エフォートフル・コントロールと有意な正の相関を、問題行動経験頻度と有意な負の相関をそれぞれ示した。過干渉は、エフォートフル・コントロールと有意な負の相関を示した。エフォートフル・コントロールは、問題行動経験頻度と有意な負の相関を示した。

女子成熟群の相関分析の結果では、温かさは、過干渉と有意な負の相関を、エフォートフル・コントロールと有意な正の相関をそれぞれ示した。過干渉は、エフォートフル・コントロールと有意な負の相関を、問題行動経験頻度と有意な正の相関をそれぞれ示した。エフォートフル・コントロールは、問題行動経験頻度と有意な負の相関を示した。

女子未成熟群の相関分析の結果では、温かさは、エフォートフル・コントロールと有意な正の相関を、問題行動経験頻度と有意な負の相関をそれぞれ示した。過干渉は、エフォートフル・コントロールと有意な負の相関を、問題行動経験頻度と有意な正の相関をそれぞれ示した。エフォートフル・コントロールは、問題行動経験頻度と有意な負の相関を示した。

した。

Table 6-5 各変数の相関係数（男子：身体発育タイミング別）

	1	2	3	4
1 温かさ		.06	.20 *	-.21 *
2 過干渉	-.04		-.23 *	.24 *
3 エフォートフル・コントロール	.29 **	-.27 **		-.43 **
4 問題行動経験頻度	-.35 **	.06	-.29 **	

注) 上段:成熟, 下段:未成熟 * $p < .05$ ** $p < .01$

Table 6-6 各変数の相関係数（女子：身体発育タイミング別）

	1	2	3	4
1 温かさ		-.27 **	.34 **	-.15
2 過干渉	-.06		-.40 **	.35 **
3 エフォートフル・コントロール	.30 **	-.34 **		-.58 **
4 問題行動経験頻度	-.18 *	.34 **	-.51 **	

注) 上段:成熟, 下段:未成熟 * $p < .05$ ** $p < .01$

4. 問題行動経験頻度に対する養育態度の認知とエフォートフル・コントロールの影響の検討

養育態度の認知がエフォートフル・コントロールを媒介して問題行動経験頻度に及ぼす影響が、4群でどのように異なるかを検討するため、学年を統制変数として投入した上で、多母集団同時分析を行った。

分析にあたって、すべてのパスと共分散に等値制約を置かないモデル（モデル1）、群間で有意な差がみられなかったパスと共分散に等値制約を置くモデル（モデル2）、すべてのパスと共分散に等値制約を置くモデル（モデル3）を検討し、AICの値によりモデル適合度を比較した。各モデルのAICを比較したところ、モデル1は113.11、モデル2は98.73、モデル3は111.03であったため、AICがもっとも小さかったモデル2を採用した。モデル2の適合度指標を算出したところ、 $\chi^2(16) = 10.73$, ns , $GFI = .99$, $AGFI = .97$, $CFI = 1.00$, $RMSEA = .00$ という十分な値が得られた。本研究で採用したモデルをFigure 6-1に示し、4群のパス係数およびパス係数の群間比較をTable 6-7に示した。

温かさからエフォートフル・コントロールへのパスについては、全群で有意な正のパス

が示された。温かさから問題行動経験頻度へのパスについては、男子未成熟群では有意な

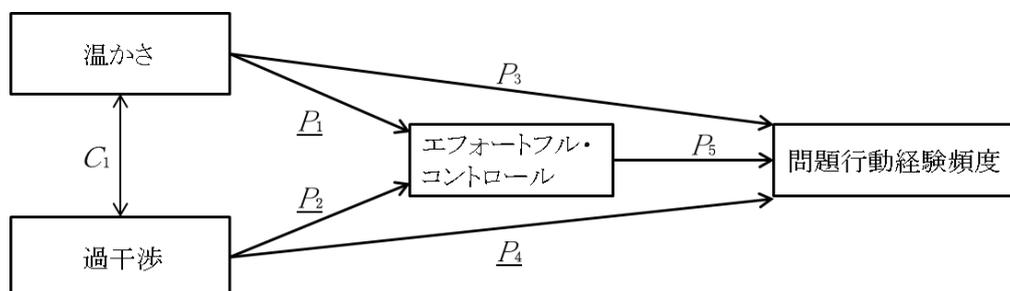


Figure 6-1. 多母集団同時分析で検討したモデル。

注) 誤差項、統制変数は省略した。群間で倒置制約を置いたパスおよび共分散には下線を引いた。

負のパスが示され、男子成熟群、女子成熟群、女子未成熟群では有意なパスが示されなかった。

パス係数の差の検討を行ったところ、男子成熟群が女子成熟群よりも値が大きく ($z = 2.03, p < .05$), 男子未成熟群が女子成熟群と女子未成熟群よりも値が大きかった (それぞれ, $z = 3.22, p < .01, z = 2.51, p < .01$)。過干渉からエフォートフル・コントロールへのパスについては、全群で有意な負のパスが示された。過干渉から問題行動経験頻度へのパスについては、全群で有意な正のパスが示された。エフォートフル・コントロールから問題行動経験頻度へのパスについては、全群で有意な負のパスが示されたが、パス係数の差の検討を行ったところ、女子成熟群が男子未成熟群よりも値が大きかった ($z = 2.94, p < .01$)。

なお、エフォートフル・コントロールの決定係数は、男子成熟群が $R^2 = .24$, 男子未成熟群が $R^2 = .17$, 女子成熟群が $R^2 = .17$, 女子未成熟群が $R^2 = .18$ であり、問題行動経験頻度の決定係数は、男子成熟群が $R^2 = .23$, 男子未成熟群が $R^2 = .17$, 女子成熟群が $R^2 = .32$, 女子未成熟群が $R^2 = .25$ であった。

5. 養育態度の認知による分類

温かさと過干渉を用いて、グループ内平均連結法によるクラスタ分析を行った。その結果、解釈可能性から、4クラスタ解が妥当であると判断した。第1クラスタは195名、第2クラスタは235名、第3クラスタは149名、第4クラスタは66名であった。 χ^2 検定を

行ったところ、有意な人数の偏りがみられた ($\chi^2 = 97.99$, $df = 3$, $p < .01$)。

Table 6-7 各群のパス係数およびパス係数の群間比較

	P_1 (温かさ→EC)	P_2 (過干渉→EC)	P_3 (温かさ→問題行動)	P_4 (過干渉→問題行動)	P_5 (EC→問題行動)	C_1 (温かさ↔過干渉)
①男子成熟群 ($n = 108$)	.24 **	-.23 **	-.15	.14 **	-.36 **	.08
②男子未成熟群 ($n = 118$)	.29 **	-.28 **	-.30	.14 **	-.15	.02
③女子成熟群 ($n = 144$)	.23 **	-.27 **	.08 **	.15 **	-.52 **	-.27 **
④女子未成熟群 ($n = 140$)	.29 **	-.25 **	-.04	.16 **	-.42 **	-.07
群間比較			③ < ① ③④ < ②		② < ③	①② < ③

** $p < .01$

注 1. ECはエフォートフル・コントロール、問題行動は問題行動経験頻度をそれぞれ表す。

また、得られた4つのクラスタを独立変数、温かさ、過干渉を従属変数とする分散分析を行った。その結果、温かさ、過干渉ともに有意な群間差がみられた(温かさ： $F(3, 641) = 270.13$, 過干渉： $F(3, 641) = 270.13$)。TukeyのHSD法による多重比較を行ったところ、温かさについては、第1クラスタ>第3クラスタ>第2クラスタ>第4クラスタ、過干渉については、第4クラスタ=第3クラスタ>第2クラスタ>第1クラスタという結果が得られた。

第1クラスタは、温かさが高く、過干渉が低いため、「温かさ群」とした(195名)。第2クラスタは、温かさと過干渉がともに低いため、「低関与群」とした(235名)。第3クラスタは、温かさと過干渉がともに高いため、「高関与群」とした(149名)。第4クラスタは、温かさが低く、過干渉が高いため、「過干渉群」とした(66名)。Figure 6-2に4群の各得点を示した。また、各クラスタに含まれる人数の割合を、性別×身体発育タイミング別(Table 6-8)、性別×学年別(Table 6-9)でそれぞれ示した。

6. 養育態度の認知スタイルとエフォートフル・コントロール、問題行動経験頻度との関連

養育態度の認知スタイルによって、エフォートフル・コントロール、問題行動経験頻度の得点の差異を検討するために、養育態度の認知スタイル(「温かさ群」「低関与群」「高関与群」「過干渉群」)を独立変数、エフォートフル・コントロール、問題行動経験頻度を従属変数とする1要因の分散分析を行った。4群のエフォートフル・コントロールの平均値

を Figure 6-3 に、問題行動経験頻度の平均値を Figure 6-4 にそれぞれ示した。

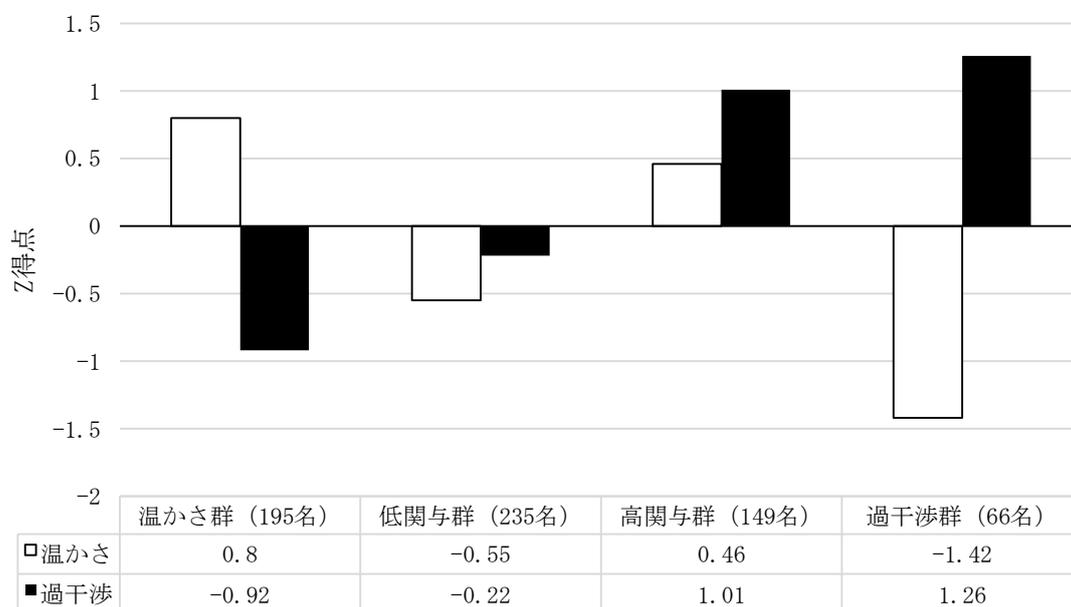


Figure 6-2. 温かさ・過干渉別のクラスターパターン。

Table 6-8 各群に含まれる人数の割合 (学年・性別)

	小学5年		小学6年		中学1年		中学2年		中学3年		全体	
	男子	女子	男子	女子								
	(n = 38)	(n = 45)	(n = 36)	(n = 34)	(n = 61)	(n = 68)	(n = 88)	(n = 95)	(n = 87)	(n = 93)	(n = 310)	(n = 335)
温かさ群	19	18	15	11	15	23	16	29	21	28	86	109
	50.00%	40.00%	41.70%	32.40%	24.60%	33.80%	18.20%	30.50%	24.10%	30.10%	27.70%	32.50%
低関与群	11	19	14	16	19	18	35	35	41	27	120	115
	28.90%	42.20%	38.90%	47.10%	31.10%	26.50%	39.80%	36.80%	47.10%	29.00%	38.70%	34.30%
高関与群	6	5	6	5	20	15	24	20	18	30	74	75
	15.80%	11.10%	16.70%	14.70%	32.80%	22.10%	27.30%	21.10%	20.70%	32.30%	23.90%	22.40%
過干渉群	2	3	1	2	7	12	13	11	7	8	30	36
	5.30%	6.70%	2.80%	5.90%	11.50%	17.60%	14.80%	11.60%	8.00%	8.60%	9.70%	10.70%

Table 6-9 各群に含まれる人数の割合 (身体発育のタイミング・性別)

	未成熟群		成熟群	
	男子	女子	男子	女子
温かさ群	118	140	108	144
	35	44	26	50
	29.70%	31.40%	24.10%	34.70%
低関与群	50	53	43	45
	42.40%	37.90%	39.80%	31.30%
高関与群	23	30	33	33
	19.50%	21.40%	30.60%	22.90%
過干渉群	10	13	6	16
	8.50%	9.30%	5.60%	11.10%

分散分析の結果、エフォートフル・コントロール、問題行動経験頻度ともに、群間の得点差は有意であった（エフォートフル・コントロール： $F(3, 641) = 28.23$ ，問題行動経験頻度： $F(3, 641) = 18.56$ ）。TukeyのHSD法による多重比較を行ったところ、エフォートフル・コントロールでは、低関与群、高関与群、過干渉群は、温かさ群よりも得点が低か

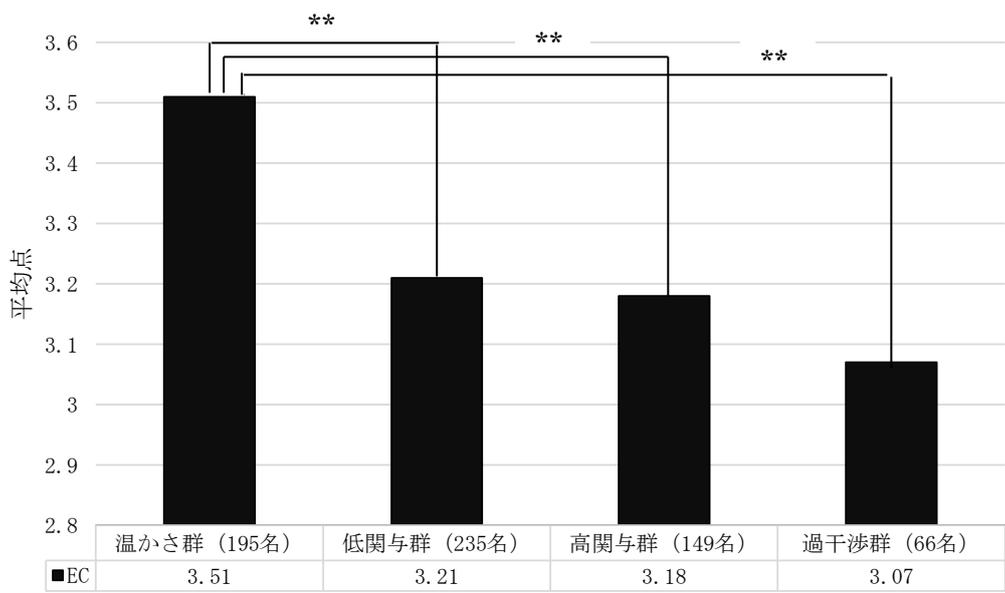


Figure 6-3. 群別のエフォートフル・コントロールの平均値および分散分析結果。

注) EC = エフォートフル・コントロール。 ** $p < .01$

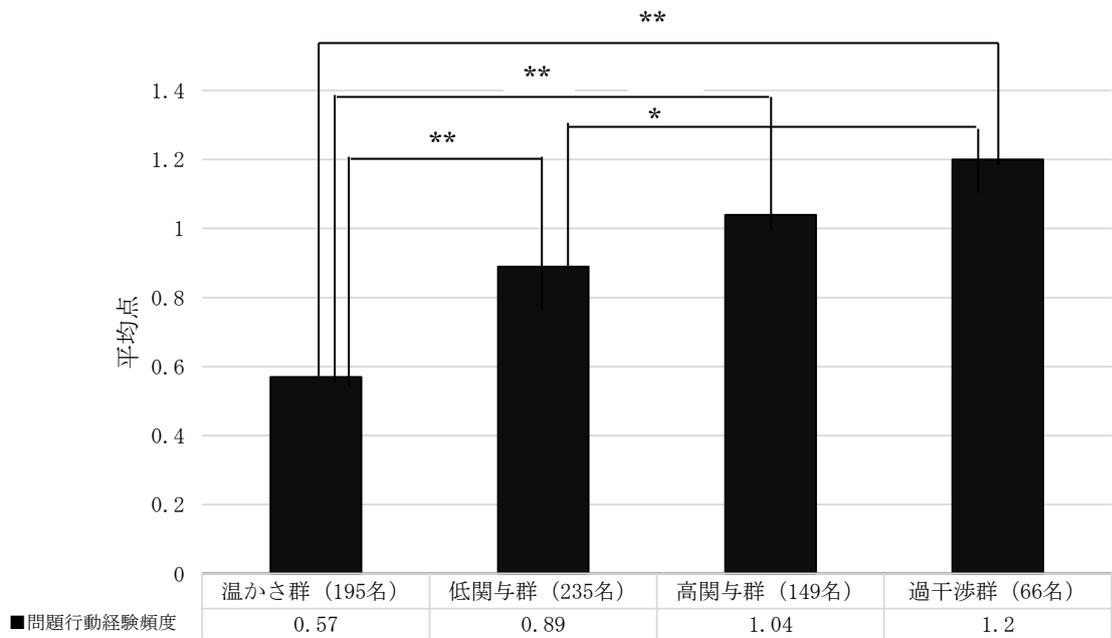


Figure 6-4. 群別の問題行動経験頻度の分散分析結果。注) * $p < .05$, ** $p < .01$

った ($F(3,641) = 30.98$)。また、問題行動経験頻度では、温かさ群は、低関与群、高関与群、過干渉群よりも得点が低く、低関与群は、過干渉群よりも得点が低かった ($F(3,641) = 18.56$)。

第4節 考察

本研究では、思春期の青年を対象に、養育態度の認知がエフォートフル・コントロールを媒介して問題行動経験頻度にどのような影響を及ぼすかを、思春期の身体発育のタイミングと性別に着目して検討を行った。

分散分析の結果では、温かさとエフォートフル・コントロールにおいて群間差が認められた。温かさについては、女子の方が男子よりも高い傾向にあり、この結果は、吉武他 (2012) と同様であり、女子の方が男子よりも温かみのある受容的な養育を受けていると知覚していることが示唆された。エフォートフル・コントロールについては、女子の方が高いことは、鋤柄・古田・中川 (2013) や Eisenberg et al. (2005) と同様の結果であったが、本研究では、そのような性差はとりわけ早熟者の間で認められることが明らかになった。思春期では、トップダウン・システムとボトムアップ・システムの発達の乖離が大きい、すなわち、トップダウン・システムに比してボトムアップ・システムの成熟が早いほど、エフォートフル・コントロールをはじめとする行動制御能力が低下する (e.g., Spear, 2011 郷式, 2014) ことを考慮すると、早熟な女子は両システムの成熟の乖離が比較的小さい一方で、早熟な男子は両システムの成熟の乖離が比較的大きいことが予想される。ただし、効果量は必ずしも大きな値ではなかったため、解釈には注意を要するといえる。

相関分析の結果で特に注目すべき結果は、養育態度の認知とエフォートフル・コントロールの関連に着目すると、温かさはエフォートフル・コントロールと正の有意な関連を示し、過干渉はエフォートフル・コントロールと負の有意な関連を示していたことである。温かさのような養育者からの受容的な関わりがエフォートフル・コントロールの発達を促すことは先行研究 (e.g., Eisenberg et al., 2005) と同様であった。一方で、過干渉がエフォートフル・コントロールの発達を抑制するという結果については、過干渉養育は思春期の青年にとってストレスャーとして知覚されやすいことが影響していると考えられる。たとえば、Gulley, Hankin, & Young (2016) によると、ストレスャーへの暴露は、前頭前皮質の機能の低下をもたらすとされている。これらのことから、受容的な関わりはエフォー

トフル・コントロールの発達を促すが、養育者からの関わりが行き過ぎたものと思春期の青年に知覚されると、その関わりはストレスターとなり、彼らのエフォートフル・コントロールの発達を抑制することが示唆された。エフォートフル・コントロールと問題行動経験頻度の関連では、温かさは問題行動経験頻度と負の有意な関連を示し、過干渉は問題行動経験頻度と正の有意な関連を示していた。この結果は、前述のように、養育態度が過干渉的と認知され、それが青年にとってストレスターになると、本研究の結果のように、問題行動経験頻度が高められると考えられる。エフォートフル・コントロールと問題行動経験頻度の関連については、先行研究と同様の結果が得られた (Eisenberg et al., 2005)。

多母集団同時分析の結果では、群によって変数間の関連の仕方が異なるパスがいくつか認められた。まず、温かさから問題行動経験頻度へのパスについては、男子未成熟群のみ有意な負の関連が示された。このことについては、家庭内での信頼関係は思春期の青年の反社会的な問題行動の抑制に寄与するとされる (酒井・菅原・眞栄城, 菅原, 北村, 2002) が、このような傾向はとりわけ未成熟な男子において顕著であることが示唆された。また、エフォートフル・コントロールから問題行動経験頻度へのパスについては、すべての群において有意な負のパスが示されたが、とりわけ、女子成熟群の方が男子未成熟群よりもエフォートフル・コントロールの問題行動経験頻度への抑制的影響が大きいことが示された。これについては、女子では、思春期において身体発育の進行に伴い、エフォートフル・コントロールが発達するという Khurana et al. (2012)の結果を支持するものであるといえる。養育態度の認知からエフォートフル・コントロールへのパスについては、性別と身体発育のタイミングにかかわらず、温かさはエフォートフル・コントロールの発達に対して促進的な影響を与え、過干渉はエフォートフル・コントロールの発達に対して抑制的な影響を与えることが示唆された。温かさのように、養育者からの受容的な関わりがエフォートフル・コントロールの発達を促すことは先行研究 (e.g., Eisenberg et al., 2005) と同様であった。一方で、過干渉がエフォートフル・コントロールの発達を抑制するという結果については、ストレスターにさらされると、エフォートフル・コントロールの機能が低下する (Gulley, Hankin, & Young, 2016) ことを考慮すると、青年が養育者からの関わりを過干渉的なものと受け取ると、それがストレスターとして認知され、結果としてエフォートフル・コントロールの発達が抑制されることが推察された。また、過干渉養育が問題行動経験頻度に対して促進的な影響を与えていたことについては、養育態度がストレスターとして青年に認知されると、そのストレス反応の一つとして問題行動が高められることが推察

された。

これらの検討に加え、温かさと過干渉を組み合わせた養育態度の認知スタイルによって、エフォートフル・コントロールと問題行動経験頻度にどのような得点差がみられるかについて検討した。養育態度の認知スタイルの分類については、全体では、低関与群、温かさ群、高関与群、過干渉群の順に人数が多かった。

男子においては、小学5年、小学6年では、温かさ群、低関与群、高関与群、過干渉群の順に人数が多かったが、中学1年では、高関与群、低関与群、温かさ群、過干渉群の順に多く、中学2年では、低関与群、高関与群、温かさ群、過干渉群の順に多く、中学3年では、低関与群、温かさ群、高関与群、過干渉群の順に多くなっていた。このように、小学5年、小学6年では、温かい養育を受けていると認知している者が多かったが、中学に入るとその割合が減り、温かい養育も過干渉的な養育もあまり受けていないと認知する者が増えていったことから、男子は中学生以降になると徐々に養育者への関与が減少していくことが示唆された。

女子においては、小学5年、小学6年では、低関与群、温かさ群、高関与群、過干渉群の順に人数が多かったが、中学1年では、温かさ群、低関与群、高関与群、過干渉群の順に多く、中学2年では、小学5年、小学6年と同様に、低関与群、温かさ群、高関与群、過干渉群の順に多く、中学3年では、高関与群、温かさ群、低関与群の順に高くなっていた。このように、女子は、過干渉群が学年を通してもっとも人数が少なかった点は共通しているものの、小学校高学年では男子と異なり、温かい養育も過干渉的な養育もあまり受けていないと認知する者が多く、中学3年に至ると、高関与群や温かさ群の多さにみられるように、養育者への関与が高まることが示唆された。

身体発育のタイミング別においては、男子未成熟群では、低関与群、温かさ群、高関与群、過干渉群の順に多く、男子成熟群では、低関与群、高関与群、温かさ群、過干渉群の順に多かった。男子は身体発育のタイミングに関わらず、低関与群がもっとも多く、過干渉群がもっとも少ないといった結果が得られたが、成熟すると温かさを認知しながらも過干渉的な養育も認知するといった高関与群が温かさ群よりも増加することが示唆された。

女子未成熟群では、低関与群、温かさ群、高関与群、過干渉群の順に多く、女子成熟群では、温かさ群、低関与群、高関与群、過干渉群の順に多かった。男子は身体発育が進行しても低関与群がもっとも多かったが、女子は男子と異なり、成熟すると温かさ群がもっとも多くなることから、身体発育に伴い、養育者から受容的な養育を受けていると認知す

る者が増加することが示唆された。

4つの養育態度の認知スタイルによって、エフォートフル・コントロール、問題行動経験頻度においてどのような得点差がみられるかについて検討したところ、エフォートフル・コントロールでは、温かさ群がもっとも高く、他の3群では有意な差がみられなかった。これまで、受容的な養育はエフォートフル・コントロールの発達を促し、否定的な養育態度はエフォートフル・コントロールの発達を抑制することが先行研究で示されてきたが (e.g., Eisenberg et al., 2005; Véronneau, Racer, Fosco & Dishion, 2014), その結果が支持され温かさをあまり認知していない低関与群, 温かさを認知している一方で過干渉も同時に認知している高関与群, 温かさよりも過干渉を強く感じている過干渉群においては, 温かさ群と比較すると, エフォートフル・コントロールの発達に大きな差がないことが示唆された。

問題行動経験頻度では, 温かさ群が全群においてもっとも低いことが示された。高関与群と過干渉において有意な差がみられなかった一方で, 低関与群と過干渉群においては有意な差がみられたことから, 温かい養育態度を認知していることは問題行動経験頻度の抑制には大きく影響せず, 過干渉的な養育態度を認知していないことが, 問題行動経験頻度の抑制において重要であることが示唆された。

本研究で得られたこれらの知見は, 性別や身体発育のタイミングに配慮した思春期における青年の問題行動への介入策を講じる上で, 重要な示唆を与えるものであるといえよう。本研究は横断的研究であるため, 思春期において, 養育態度の認知が長期的にエフォートフル・コントロールや問題行動にどのような影響を及ぼしていくかは検討できなかったため, 今後は縦断研究によってそれらの関連を明らかにしていくことが課題である。

第7章 エフォートフル・コントロールの抑制効果の検討 【研究5】

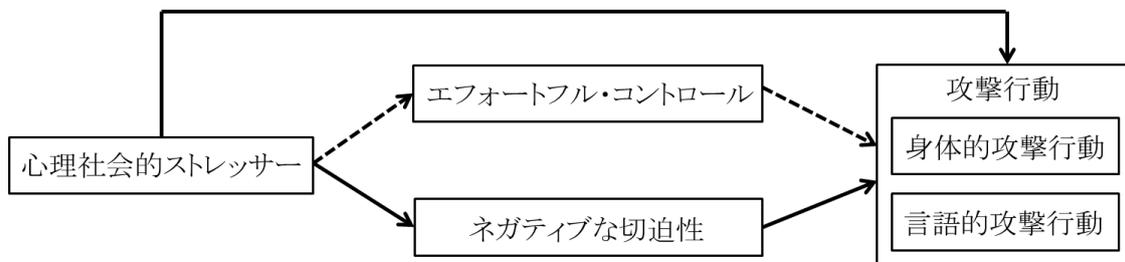
第1節 目的

思春期・青年期では、ボトムアップ・システムの方がトップダウン・システムよりも早成熟であるという発達のギャップが生じているが、この時期の青年は、そのようなギャップがさらに拡大するリスクを抱えている。そのようなリスク要因として挙げられるのが、青年を取り巻く心理社会的ストレスである。第1章でも述べた通り、ストレス反応に関連する視床下部-下垂体-副腎軸（HPA 軸）が発達する時期であり、心理社会的ストレスに対して敏感に反応する時期であるとされる（Johnson, Dariotis, & Wang, 2012）。たとえば、ストレスフルなライフイベントによって扁桃体と側坐核の活動レベルが上昇することにより、不快情動に対する制御が困難になりやすいことが明らかにされている（Repetti, Taylor, & Seeman, 2002; Spear, 2011 郷式 2014）。このことから、心理社会的ストレスによって青年のネガティブな切迫性が高められることが示唆される。また、心理社会的ストレスへの暴露は、前頭前皮質内の神経細胞に影響を与え、前頭前皮質の機能の低下をもたらし、エフォートフル・コントロールの機能を低下させるとされている（Gulley, Hankin & Young, 2016）。これらのことから、思春期では、心理社会的ストレスの影響によってトップダウン・システムとボトムアップ・システムの活動の乖離がさらに拡大し、衝動的行動へと至るリスクが増大することが予想される。

以上から、トップダウン・システムに比べ、ボトムアップ・システムの早成熟のために、ボトムアップ・システムの活動が優位であるといった思春期特有の神経生物学的な脆弱性を踏まえた検討を行うことにより、心理学的観点および神経生物学的観点を統合した思春期における衝動的行動の生起プロセスを明らかにすることが可能になると考えられる。

そこで本節では、次の2点について検討を行う。1点目は、思春期の青年を取り巻く心理社会的ストレスが、エフォートフル・コントロールおよびネガティブな切迫性を介して、思春期における重大な衝動的行動である攻撃行動（身体的攻撃行動，言語的攻撃行動）（高橋・佐藤・野口・永作・嶋田，2009）に対してどのような影響を及ぼすのかについて学年別に検討することである（Figure 7-1）。2点目は、エフォートフル・コントロールによって、ネガティブな切迫性から攻撃行動（身体的攻撃行動，言語的攻撃行動）への

促進的な影響力が低減するか否かを明らかにするために、エフォートフル・コントロールを高群と低群に分類し、それぞれの群のネガティブな切迫性と攻撃行動との関連の差異を比較検討することである (Figure 7-2)。



注) 実線の矢印は正の影響, 破線の矢印は負の影響をそれぞれ示している。

Figure 7-1. エフォートフル・コントロール, ネガティブな切迫性を媒介変数とした攻撃行動の生起プロセスの仮説モデル。

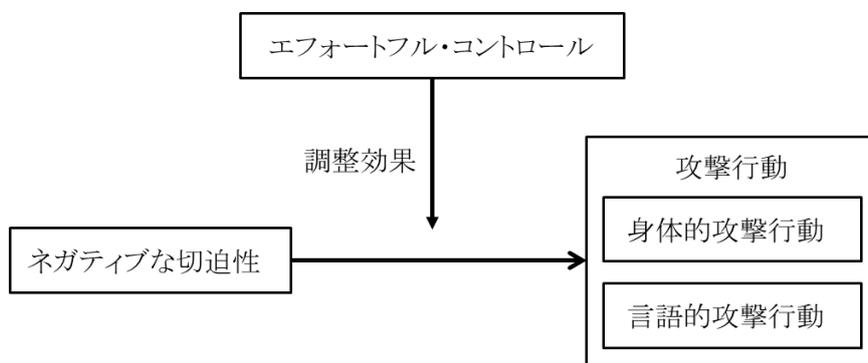


Figure 7-2. エフォートフル・コントロールの調整効果検討モデル。

第2節 方法

調査協力者 兵庫県内の小学校5年83名(男子38名, 女子45名), 小学校6年70名(男子36名, 女子34名), 中学1年129名(男子61名, 女子68名), 中学2年183名(男子88名, 女子95名), 中学3年180名(男子87名, 女子93名), 計645名(男子310名, 女子335名)を対象とした。

調査手続きと倫理的配慮 2015年8月に、無記名式の質問紙法による調査の実施を、小学校および中学校の各学校長を通して各学級担任に依頼して行った。回答にあたって、プライバシーは保護されること、回答しないことにより不利益を被らないことなどを紙面上において教示した。

心理社会的ストレス 西野・小林・北川(2009)、田中(2006)、岡安・嶋田・丹羽・森・矢富(1992)で用いられた尺度を参考に、小学校高学年児童および中学生に適用可能な学業に関する心理社会的ストレス(「一生けんめい勉強しているのに、成績がのびなかった」「勉強で新しい内容(新しく教わったこと)をおぼえるのが大変だった」「テストや通知表の成績が悪かった」の3項目)と友人関係に関する心理社会的ストレス(「友だちからいやなことを言われた」「友だちとけんかをした」の2項目)の計5項目を用いた。各項目に対して、その出来事の最近数か月間の経験頻度(「全然なかった(0点)」「たまにあった(1点)」「ときどきあった(2点)」「よくあった(3点)」の4段階評定)の回答を求め、経験があった場合(「たまにあった(1点)」「ときどきあった(2点)」「よくあった(3点)」)には、その出来事に対する嫌悪度(「全然いやではなかった(0点)」「(すこしいやだった(1点)」「かなりいやだった(3点)」「とてもいやだった(4点)」の4段階)についての回答を求めた。心理社会的ストレスの得点は、岡安他(1992)と同様に、経験頻度と嫌悪度の両者の得点を掛け合わせたものとする(各項目の得点範囲は0~9点)。なお、分析では学業に関するストレスと友人関係に関するストレスの合成得点を心理社会的ストレスの経験頻度として用いた。

エフォートフル・コントロール Ellis & Rothbart(2001)によって作成されたEATQ-R短縮版のうち、エフォートフル・コントロールを測定する項目を、鋤柄・古田・中川(2013)の邦訳を参考にして用いた。エフォートフル・コントロールは、「行動始発の制御」(「物事を時間通りになかなか終わらせることができない」など5項目)「注意の制御」(「宿題に集中するのは簡単だ」など6項目)「行動抑制の制御」(「やめろと言われてたら、していることをすぐにやめることができる」など5項目)の3下位尺度計16項目から成る。なお、分析では各下位尺度の合成得点の平均値をエフォートフル・コントロール得点とした。それぞれの項目について、「まったくあてはまらない(1点)」~「とてもよくあてはまる(5点)」の5件法で回答を求めた。 α 係数を算出したところ、 $\alpha=.77$ が得られ、十分な内的一

貫性が確認された。

ネガティブな切迫性 第2章で作成したネガティブな切迫性尺度（「いらいらすると、よく考えずに行動してしまうことがよくある」など8項目）を用いた。それぞれの項目について、「まったくあてはまらない（1点）」～「とてもよくあてはまる（5点）」の5件法で回答を求めた。 α 係数を算出したところ、 $\alpha = .79$ が得られ、十分な内的一貫性が確認された。

攻撃行動経験頻度 高橋他（2009）が作成した中学生用攻撃行動尺度の中から、身体的攻撃（「ほかの人を、たたいたりけったりした」など3項目）、言語的攻撃（「だれかに嫌みなことを言った」など3項目）を用いた。それぞれの項目について、「まったくなかった（1点）」～「なんどもあった（4点）」の5件法で回答を求めた。 α 係数をそれぞれ算出したところ、身体的攻撃、言語的攻撃ともに $\alpha = .84$ が得られ、十分な内的一貫性が確認された。

第3節 結果

1. 各変数の基礎統計量の検討

各変数の基礎統計量を学年別および性別に算出し、学年（小学校高学年、中学1年、中学2年、中学3年）と性（男子、女子）を独立変数、各変数を従属変数とする分散分析を行った（Table 7-1）。

その結果、心理社会的ストレスでは、交互作用が認められ、中学3年では女子の方が男子より得点が高く、女子では中学3年の方が中学1年より得点が高かった。エフォートフル・コントロールでは、学年の主効果が認められ、小学校高学年と中学1年の方が中学2年と中学3年よりも得点が高かった。また、性の主効果も認められ、女子の方が男子よりも得点が高かった。ネガティブな切迫性では、交互作用が認められ、中学1年では男子の方が女子よりも得点が高く、女子では中学2年と中学3年の方が中学1年よりも得点が高かった。身体的攻撃行動では、学年の主効果が認められ、小学校高学年の方が中学1年よりも得点が高かった。また、性の主効果が認められ、男子の方が女子よりも高かった。言語的攻撃行動では、学年の主効果が認められ、中学2年、中学3年の方が中学1年より

も得点が高かった。また、性の主効果が認められ、男子の方が女子よりも高かった。

ただし、有意差が認められたいずれの変数においても効果量は小さいものであった ($\eta^2 = .01 \sim .06$)。

Table 7-1 各変数の学年別・性別の平均値 (SD) および分散分析結果

	小学校高学年		中学1年		中学2年		中学3年		F値(自由度)	η^2
	男子 (n = 74)	女子 (n = 79)	男子 (n = 61)	女子 (n = 68)	男子 (n = 88)	女子 (n = 95)	男子 (n = 87)	女子 (n = 93)		
ストレッサー (0点~45点)	12.22	14.06	13.66	11.93	14.67	15.00	12.24	17.32	学年差 2.07 (3/637)	.01
	(8.18)	(10.01)	(9.13)	(9.02)	(9.12)	(9.10)	(8.90)	(10.52)	性差 3.48 (1/637)	.01
									交互作用 3.76 (3/637) *	.02
エフォートフル・ コントロール (1点~5点)	3.39	3.47	3.27	3.49	3.15	3.22	3.04	3.23	学年差 13.03 (3/637) **	.06
	(0.57)	(0.59)	(0.45)	(0.56)	(0.47)	(0.47)	(0.47)	(0.49)	性差 11.73 (1/637) **	.02
									交互作用 1.02 (3/637)	.01
ネガティブな切迫性 (1点~5点)	3.12	3.00	3.06	2.72	2.86	3.04	3.00	3.06	学年差 1.61 (3/637)	.01
	(0.78)	(0.75)	(0.70)	(0.70)	(0.69)	(0.84)	(0.65)	(0.80)	性差 0.93 (1/637)	.00
									交互作用 3.46 (3/637) *	.02
身体的攻撃行動 (0点~4点)	1.05	0.87	0.78	0.46	0.98	0.60	0.94	0.68	学年差 3.35 (3/637) *	.02
	(1.03)	(0.97)	(0.93)	(0.70)	(0.86)	(0.85)	(0.97)	(0.83)	性差 16.14 (1/637) **	.03
									交互作用 0.35 (3/637)	.00
言語的攻撃行動 (0点~4点)	1.27	0.97	1.30	0.56	1.35	1.11	1.51	0.91	学年差 3.09 (3/637) *	.01
	(1.03)	(0.93)	(1.10)	(0.63)	(0.83)	(0.88)	(1.08)	(0.97)	性差 39.08 (1/637) **	.06
									交互作用 2.53 (3/637)	.01

* $p < .05$, ** $p < .01$

2. 相関分析

心理社会的ストレスの経験頻度が、エフォートフル・コントロールおよびネガティブな切迫性を媒介して攻撃行動に影響を与える仮説モデルを検討するため、各変数の相関係数を算出した (Table 7-2)。

Table 7-2 各変数の相関係数

	1	2	3	4
1 心理社会的ストレス				
2 エフォートフル・コントロール	-.26 **			
3 ネガティブな切迫性	.33 **	-.45 **		
4 身体的攻撃行動	.11 **	-.29 **	.34 **	
5 言語的攻撃行動	.12 **	-.35 **	.35 **	.59 **

** $p < .01$

その結果、心理社会的ストレスは、ネガティブな切迫性、身体的攻撃行動、言語的

攻撃行動とは有意な正の相関を示し、エフォートフル・コントロールとは有意な負の相関を示していた。エフォートフル・コントロールは、ネガティブな切迫性、身体的攻撃行動、言語的攻撃行動と有意な負の相関を示していた。ネガティブな切迫性は、身体的攻撃行動、言語的攻撃行動と有意な正の相関を示していた。身体的攻撃行動と言語的攻撃行動は有意な正の相関を示していた。

3. 仮説モデルの検討（全体）

Figure 7-1 の仮説モデルを検討するためのパス解析を行った（Figure 7-2）。分析にあたって、学年と性別を統制変数に加えた。分析の結果、適合度は、 $\chi^2(7) = 7.17, ns, GFI = 1.00, AGFI = .99, CFI = 1.00, RMSEA = .01$ であり、十分なモデル適合度が認められた。心理社会的ストレスから、エフォートフル・コントロールへの有意な負のパス、ネガティブな切迫性への有意な正のパスがそれぞれ認められた。エフォートフル・コントロールからは、身体的攻撃行動、言語的攻撃行動への有意な負のパスがそれぞれ認められた。ネガティブな切迫性からは、身体的攻撃行動、言語的攻撃行動への有意な正のパスが認められた。なお、心理社会的ストレスから身体的攻撃行動、言語的攻撃行動への直接の有意なパスは認められなかった。決定係数は、エフォートフル・コントロールで $R^2 = .11$ 、ネガティブな切迫性で $R^2 = .13$ 、身体的攻撃行動で $R^2 = .16$ 、言語的攻撃行動で $R^2 = .20$ であった。

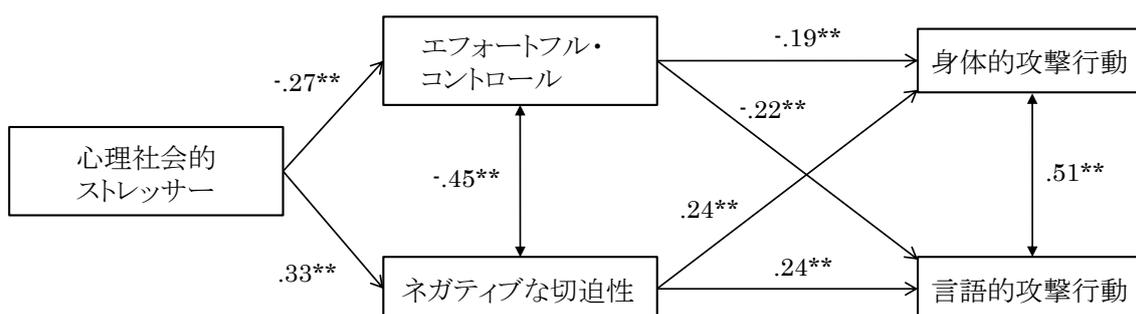


Figure 7-3. パス解析結果(誤差項, 統制変数は省略)。
注) ** $p < .01$

4. 多母集団同時分析（学年別）

学年別（小学校高学年，中学1年，中学2年，中学3年）の多母集団同時分析を行った。なお，小学校5年と小学校6年は人数が十分ではなかったため，両学年をまとめて小学校

高学年とした。また、分析の際に性別を統制変数として加えた。さらに、分析にあたって、等値制約を置かないモデル（モデル 1）、学年間で有意な差が見られなかったパスおよび共分散に等値制約を置くモデル（モデル 2）、全てのパスおよび共分散に等値制約を置くモデル（モデル 3）をそれぞれ検討し、AIC の比較を行った。

その結果、モデル 1 は AIC = 160.91, モデル 2 は AIC = 145.31, モデル 3 は AIC = 153.69 であったため、最も低い AIC を示したモデル 2 を採用した。モデル 2 の適合度は、 $\chi^2(20) = 17.31, ns, GFI = .99, AGFI = .96, CFI = 1.00, RMSEA = .00$ であり、十分なモデル適合度が認められた。モデル 2 を Figure 7-4 に、モデル 2 における各群のパス係数およびその群間比較の検定結果を Table 7-3 に示す。

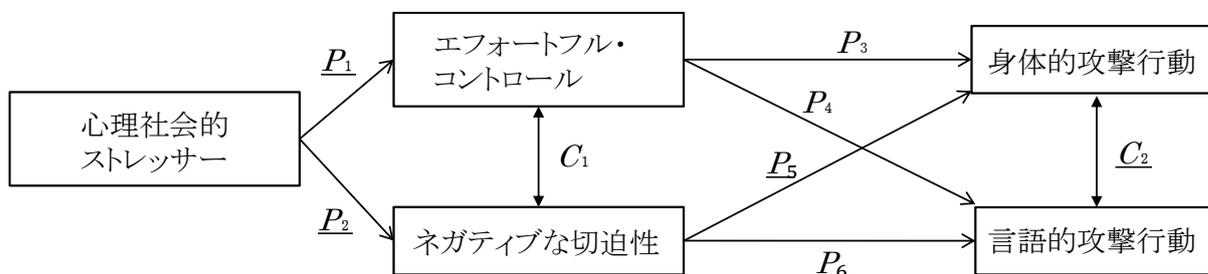


Figure 7-4. 学年別の多母集団同時分析で採用されたモデル 2。

注) 誤差項，統制変数は省略した。群間で倒置制約を置いたパスおよび共分散には下線を引いた。

Table 7-3 学年別のパス係数およびパス係数の群間比較

	小学校 高学年	中学1年	中学2年	中学3年	差の検定
P_1 (心理社会的スレッサー→EC)	-.24 **	-.27 **	-.28 **	-.31 **	<i>ns</i>
P_2 (心理社会的スレッサー→ネガティブな切迫性)	.31 **	.32 **	.30 **	.36 **	<i>ns</i>
P_3 (EC→身体的攻撃行動)	-.30 **	-.20 **	-.04	-.15 *	中2 < 小高*
P_4 (EC→言語的攻撃行動)	-.34 **	-.32 **	-.03	-.22 **	中2 < 小高**・中1**・中3*
P_5 (ネガティブな切迫性→身体的攻撃行動)	.23 **	.25 **	.26 **	.25 **	<i>ns</i>
P_6 (ネガティブな切迫性→言語的攻撃行動)	.15	.05	.31 **	.34 **	小高 < 中3*, 中1 < 中2*・中3**
C_1 (EC ↔ ネガティブな切迫性)	-.50 **	-.63 **	-.44 **	-.27 **	中3 < 小高**・中1**
C_2 (身体的攻撃行動 ↔ 言語的攻撃行動)	.48 **	.54 **	.53 **	.50 **	<i>ns</i>

注) ECはエフォートフル・コントロール。

* $p < .05$, ** $p < .01$

結果から、心理社会的ストレスからエフォートフル・コントロールへのパス (P_1) については、全学年において、有意な負のパスが認められた。心理社会的ストレスからネガティブな切迫性へのパス (P_2) については、全学年において、有意な正のパスが認められた。エフォートフル・コントロールから身体的攻撃行動へのパス (P_3) については、小学校高学年、中学1年、中学3年では有意な負のパスが認められ、中学2年では有意なパスが認められなかった。パス係数の差の検討を行ったところ、小学校高学年の方が中学2年より有意にパス係数が高かった ($z = 2.42, p < .01$)。エフォートフル・コントロールから言語的攻撃行動へのパス (P_4) については、小学校高学年、中学1年、中学3年では有意な負のパスが認められ、中学2年では有意なパスが認められなかった。パス係数の差の検討を行ったところ、小学校高学年、中学1年、中学3年の方が中学2年より有意にパス係数が高かった (それぞれ、 $z = 2.65, p < .01, z = 2.42, p < .01, z = 2.11, p < .05$)。ネガティブな切迫性から身体的攻撃行動へのパス (P_5) については、全学年において、有意な正のパスが認められた。ネガティブな切迫性から言語的攻撃行動へのパス (P_6) については、中学2年、中学3年では有意な正のパスが認められ、小学校高学年、中学1年では有意なパスが認められなかった。パス係数の差の検討を行ったところ、中学2年の方が中学1年よりパス係数が有意に高く ($z = 2.02, p < .05$)、中学3年の方が小学校高学年、中学1年よりパス係数が有意に高かった (それぞれ、 $z = 2.28, p < .05, z = 2.83, p < .01$)。

決定係数については、エフォートフル・コントロールでは、小学校高学年で $R^2 = .06$ 、中学1年で $R^2 = .12$ 、中学2年で $R^2 = .08$ 、中学3年で $R^2 = .13$ であった。ネガティブな切迫性では、小学校高学年で $R^2 = .10$ 、中学1年で $R^2 = .16$ 、中学2年で $R^2 = .11$ 、中学3年で $R^2 = .12$ であった。身体的攻撃行動では、小学校高学年で $R^2 = .22$ 、中学1年で $R^2 = .19$ 、中学2年で $R^2 = .13$ 、中学3年で $R^2 = .13$ であった。言語的攻撃行動では、小学校高学年で $R^2 = .21$ 、中学1年で $R^2 = .26$ 、中学2年で $R^2 = .12$ 、中学3年で $R^2 = .29$ であった。

5. 多母集団同時分析 (男女別)

男女別の多母集団同時分析を行った。なお、分析の際に学年を統制変数として加えた。また、分析にあたって、等値制約を置かないモデル (モデル1)、学年間で有意な差が見られなかったパスおよび共分散に等値制約を置くモデル (モデル2)、全てのパスおよび共分散に等値制約を置くモデル (モデル3) をそれぞれ検討し、AICの比較を行った。

その結果、モデル 1 は AIC = 76.68, モデル 2 は AIC = 66.94, モデル 3 は AIC = 82.21 であったため、最も低い AIC を示したモデル 2 を採用した。モデル 2 の適合度は、 $\chi^2(17) = 16.94$, *ns*, GFI = .99, AGFI = .98, CFI = 1.00, RMSEA = .00 であり、十分なモデル適合度が認められた。モデル 2 を Figure 7-5 に、モデル 2 における各群のパス係数およびその群間比較の検定結果を Table 7-4 に示す。

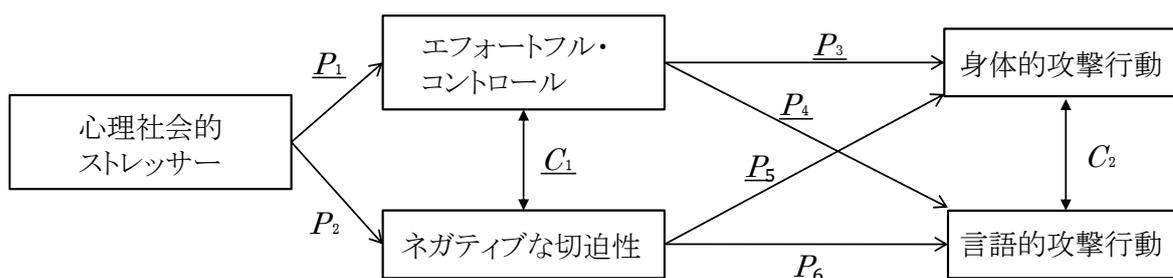


Figure 7-5. 男女別の多母集団同時分析で採用されたモデル 2。

注) 誤差項, 統制変数は省略した。群間で倒置制約を置いたパスおよび共分散には下線を引いた。

Table 7-4 男女別のパス係数およびパス係数の群間比較

	男子	女子	差の検定
P_1 (心理社会的ストレス→EC)	-.26 **	-.28 **	<i>ns</i>
P_2 (心理社会的ストレス→ネガティブな切迫性)	.24 **	.40 **	男子 < 女子*
P_3 (EC→身体的攻撃行動)	-.18 **	-.20 **	<i>ns</i>
P_4 (EC→言語的攻撃行動)	-.21 **	-.24 **	<i>ns</i>
P_5 (ネガティブな切迫性→身体的攻撃行動)	.22 **	.26 **	<i>ns</i>
P_6 (ネガティブな切迫性→言語的攻撃行動)	.13 *	.36 **	男子 < 女子**
C_1 (EC ↔ ネガティブな切迫性)	-.46 **	-.44 **	<i>ns</i>
C_2 (身体的攻撃行動 ↔ 言語的攻撃行動)	.54 **	.48 **	女子 < 男子**

注) ECはエフォートフル・コントロール。

* $p < .05$, ** $p < .01$

結果から、心理社会的ストレスからエフォートフル・コントロールへのパス (P_1) については、男女ともに、有意な負のパスが認められた。心理社会的ストレスからネガティブな切迫性へのパス (P_2) については、男女ともに、有意な正のパスが認められた。パス係数の差の検討を行ったところ、女子の方が男子より有意にパス係数が高かった ($z = 2.32, p < .05$)。エフォートフル・コントロールから身体的攻撃行動へのパス (P_3) については、男女ともに、有意な負のパスが認められた。エフォートフル・コントロールから言語的攻撃行動へのパス (P_4) については、男女ともに、有意な負のパスが認められた。ネガティブな切迫性から身体的攻撃行動へのパス (P_5) については、男女ともに、有意な正のパスが認められた。ネガティブな切迫性から言語的攻撃行動へのパス (P_6) については、男女ともに、有意な正のパスが認められた。パス係数の差の検討を行ったところ、女子の方が男子より有意にパス係数が高かった ($z = 2.92, p < .01$)。

決定係数については、エフォートフル・コントロールでは、男子で $R^2 = .11$ 、女子で $R^2 = .12$ であった。ネガティブな切迫性では、男子で $R^2 = .06$ 、女子で $R^2 = .16$ であった。身体的攻撃行動では、男子で $R^2 = .12$ 、女子で $R^2 = .16$ であった。言語的攻撃行動では、男子で $R^2 = .08$ 、女子で $R^2 = .27$ であった。

6. エフォートフル・コントロールの調整効果の検討

ネガティブな切迫性と攻撃行動の関連におけるエフォートフル・コントロールの調製効果を検討するため、調査協力者をエフォートフル・コントロールの平均値の±.5SDを境にして、エフォートフル・コントロール高群（以下、EC高群）（男子106名、女子86名、計192名）とエフォートフル・コントロール低群（以下、EC低群）（男子70名、女子105名、計175名）に分類し、相関分析を行った上で（Table 7-5）、性別と学年を統制変数として投入した多母集団同時分析を用いて比較検討を行った（Figure 7-6）。

Table 7-5 群別の相関分析結果

	1	2	3
1 ネガティブな切迫性		.22 **	.09
2 身体的攻撃行動	.26 **		.64 **
3 言語的攻撃行動	.31 **	.49 **	

注) 左下:EC低群, 右上:EC高群 ** $p < .01$

相関分析の結果、EC低群では、ネガティブな切迫性は身体的攻撃行動、言語的攻撃行

動と有意な正の相関を示した。身体的攻撃行動は言語的攻撃行動と有意な正の有意な相関を示した。EC 高群では、ネガティブな切迫性は身体的攻撃行動と有意な正の相関を示した。身体的攻撃行動は言語的攻撃行動と有意な正の相関を示した。

多母集団同時分析にあたって、等値制約を置かないモデル (モデル 1)、学年間で有意な差が見られなかったパスおよび共分散に等値制約を置くモデル (モデル 2)、全てのパスおよび共分散に等値制約を置くモデル (モデル 3) をそれぞれ検討し、AIC の比較を行った。その結果、モデル 1 は AIC = 55.05、モデル 2 は AIC = 82.86、モデル 3 は AIC = 88.99 であったため、最も低い AIC を示したモデル 1 を採用した。モデル 1 の適合度は、 $\chi^2(8) = 11.05$, *ns*, GFI = .99, AGFI = .95, CFI = .98, RMSEA = .03 であり、十分なモデル適合度が認められた。

ネガティブな切迫性から身体的攻撃行動へのパスについては、EC 低群・EC 高群ともに正の有意なパスが認められたが、パス係数の差の検定を行ったところ、EC 低群のパス係数の値の方が大きかった ($z = 1.97, p < .05$)。また、ネガティブな切迫性から言語的攻撃行動へのパスについては、EC 低群では正の有意なパスが認められたが、EC 高群では有意なパスが認められなかった。差の検定を行ったところ、EC 低群のパス係数の値の方が大きかった ($z = 3.32, p < .01$)。

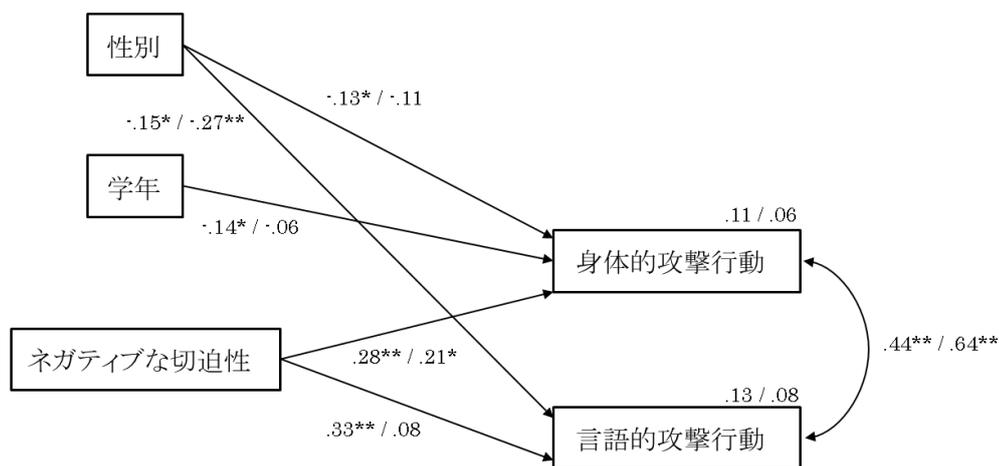


Figure 7-6. EC 低群・高群別のネガティブな切迫性から攻撃行動への影響。

注) 左側の数値が EC 低群, 右側の数値が EC 高群。性別は男子 = 1, 女子 = 2。誤差項は省略。

第4節 考察

本研究は、思春期の青年を取り巻くストレスが、エフォートフル・コントロールおよびネガティブな切迫性を媒介して、攻撃行動（身体的攻撃行動、言語的攻撃行動）に対してどのような影響を及ぼすのかについて検討することを第一の目的とした。また、エフォートフル・コントロールによって、ネガティブな切迫性から攻撃行動（身体的攻撃行動、言語的攻撃行動）への促進的な影響力が低減するか否かを明らかにするために、エフォートフル・コントロールを高群と低群に分類し、両群のネガティブな切迫性と攻撃行動との関連の差異を比較検討することを第二の目的とした。

はじめに、各変数における学年差および性差の検討において、心理社会的ストレスの経験では、中学3年において女子の方が男子よりも高く、また、女子では中学3年の方が中学1年よりも高いことが示された。これは、高学年になるほど学業などに関する心理社会的ストレスは女子の方が男子よりも経験しやすいという先行研究の結果(e.g., 岡安ら, 1992)を支持するものであったといえる。エフォートフル・コントロールでは、小学校高学年および中学1年の方が、中学2年および中学3年よりも高いという学年差が認められ、また、女子の方が男子よりも高いという性差が認められた。学年が上がるにつれてエフォートフル・コントロールが低下する背景には、シナプスの刈込みや髄鞘形成などにより、前頭前皮質の一時的な機能低下(Spear, 2009)が中学2年~3年において認められることが示唆された。また、エフォートフル・コントロールの性差については、鋤柄・古田・中川(2013)やEisenberg et al.(2005)の結果を支持するものであった。ネガティブな切迫性では、中学1年の女子においてやや低い得点が認められたものの、青年期におけるネガティブな切迫性には大きな性差はない(e.g., Gunn & Smith, 2010, Pearson, Combs, Zapolski, & Smith, 2012)という先行研究同の結果と同様のものであったといえる。身体的攻撃行動や言語的攻撃行動では、学年差については、身体的攻撃行動については顕著な差がみられなかったが、言語的攻撃行動については学年が上がるにつれて頻度が高まることが示唆された。性差については、多くの先行研究で示されてきたように(e.g., 安藤他, 1999), 男子の方が女子よりも高いことが示された。ただし、本研究の分散分析で認められた有意差はいずれも効果量が小さかったため、結果の解釈には注意を要するといえる。

各変数の相関分析の結果に基づき、心理社会的ストレスの経験がエフォートフル・

コントロールとネガティブな切迫性を介して、身体的攻撃行動および言語的攻撃行動に影響を及ぼすモデルについて検討した。また、学年別、男女別によってこの仮説モデルにおける変数間の関連がどのように異なるかについて多母集団同時分析によって検討した。

まず、仮説モデルの検討を行ったところ、心理社会的ストレスはエフォートフル・コントロールに対して抑制的な影響を与え、ネガティブな切迫性に対して促進的な影響を与えることが示唆された。これは、ストレスは、トップダウン・システムの活動レベルを低下させ、ボトムアップ・システムの活動レベルを上昇させるといったこれまでの知見（Gulley, Hankin & Young, 2016; Repetti, Taylor, & Seeman, 2002; Spear, 2011 郷式 2014）を実証的に支持するものであった。また、心理社会的ストレスは身体的攻撃行動、言語的攻撃行動に直接的な影響を与えなかったことから、心理社会的ストレスは、エフォートフル・コントロールとネガティブな切迫性を媒介することによって、攻撃行動を生起させることが示唆された。エフォートフル・コントロールは攻撃行動に対して抑制的な影響を与え、ネガティブな切迫性が攻撃行動に対して促進的な影響を与えるという結果については、先行研究の結果（e.g., Cyders & Smith, 2008; Eisenberg et al., 2005）を支持するものであった。これらの結果から、思春期では、心理社会的ストレスは、トップダウン・プロセスとボトムアップ・プロセスのギャップをさらに拡大させる攻撃行動の生起における重大なリスク要因であることが示唆された。

仮説モデルの学年別の多母集団同時分析の結果では、エフォートフル・コントロールから身体的攻撃行動および言語的攻撃行動へのパスについては、中学 2 年においてのみエフォートフル・コントロールによる有意な抑制的影響が認められないことが示された。また、ネガティブな切迫性から身体的攻撃行動へのパスについては、全学年で有意な促進的影響が認められ、言語的攻撃行動へのパスについては、中学 2 年および中学 3 年のみ有意な促進的影響が示された。このように、中学 2 年において、攻撃行動に対するネガティブな切迫性の促進的な影響がある一方で、エフォートフル・コントロールの攻撃行動への抑制的影響が認められないという結果は、対人暴力や器物損壊といった重大な加害行為が中学 2 年においてピークを迎えるという文部科学省による学年別加害児童生徒数の統計結果（文部科学省, 2015; 文部科学省, 2014; 文部科学省, 2013）の裏付けになると考えられる。言語的攻撃行動についても身体的攻撃行動と同様に、とりわけ中学 2 年ではエフォートフル・コントロールが機能しにくいことが示唆された。しかし、中学 3 年になると、中学 2 年と同様に、ネガティブな切迫性の身体的攻撃行動および言語的攻撃行動への促進的影響

が認められる一方で、エフォートフル・コントロールの攻撃行動に対する抑制的影響が認められることから、エフォートフル・コントロールは着実に発達し、トップダウン・システムとボトムアップ・システムの相互作用を経て攻撃行動の制御に寄与していることが示唆された。小学校高学年および中学1年においてネガティブな切迫性が言語的攻撃行動に対して有意なパスが認められなかったことについては、小学校高学年から中学1年の時期においては、高まった不快情動を低減する手段として、身体的攻撃行動が選択されやすいことが示唆された。

次に、仮説モデルの男女別の多母集団同時分析の結果では、心理社会的ストレスカーからネガティブな切迫性へのパスと、ネガティブな切迫性から言語的攻撃行動へのパスにおいて性差が認められ、それぞれ女子の方が男子よりも関連が強いことが示された。この結果は、女子の方が男子よりもストレス反応が高いことや（嶋田，1998），小澤（2010）によると、思春期では、怒りや悲しみといった不快情動を切り替える能力である不快情動の切り替え可能性は、男子の方が女子よりも高いという結果などから推察される。これらの結果から、心理社会的ストレスカーを経験すると、女子の方が男子よりもネガティブな切迫性が高まりやすく、また、ネガティブな切迫性が高まった際は、女子の方が男子よりも言語的攻撃行動に至りやすいことが示唆された。

本研究の第二の目的として、多母集団同時分析によって、ネガティブな切迫性と身体的攻撃行動および言語的攻撃行動との関連におけるエフォートフル・コントロールの調製効果を検討した。その結果、エフォートフル・コントロールが低い者の方が、エフォートフル・コントロールが高い者よりも、ネガティブな切迫性によって身体的攻撃行動および言語的攻撃行動が高められやすいことが示唆された。このことから、思春期・青年期ではボトムアップ・システムよりもトップダウン・システムの影響力が弱いものの、トップダウン・プロセスの一つであるエフォートフル・コントロールを周囲の環境の影響を受けながら身に付けていくことにより、ネガティブな切迫性の攻撃行動への促進的影響を低減させることができることが示唆された。

本研究の限界として、攻撃行動の生起プロセスにおける詳細な因果関係が同定されていない点が挙げられる。本研究は横断研究であるため、心理社会的ストレスカーがエフォートフル・コントロールやネガティブな切迫性に与える長期的な影響などについては十分な検討ができていないと考えられる。今後は、攻撃行動以外の問題行動も取り上げて縦断研究を行うことにより、思春期における問題行動の生起プロセスをさらに明らかにしていく

必要がある。

第Ⅲ部 総括

第8章 総合的考察

第1節 本研究で明らかにされたこと

第1章～第2章において本論文全体の問題と目的を述べた上で、第3章～第7章において、思春期・青年期における衝動的行動の生起プロセスにおける促進要因および防御要因の影響について、トップダウン・システムとボトムアップ・システムの発達に焦点を当て、実証的に検討してきた (Figure 8-1)。

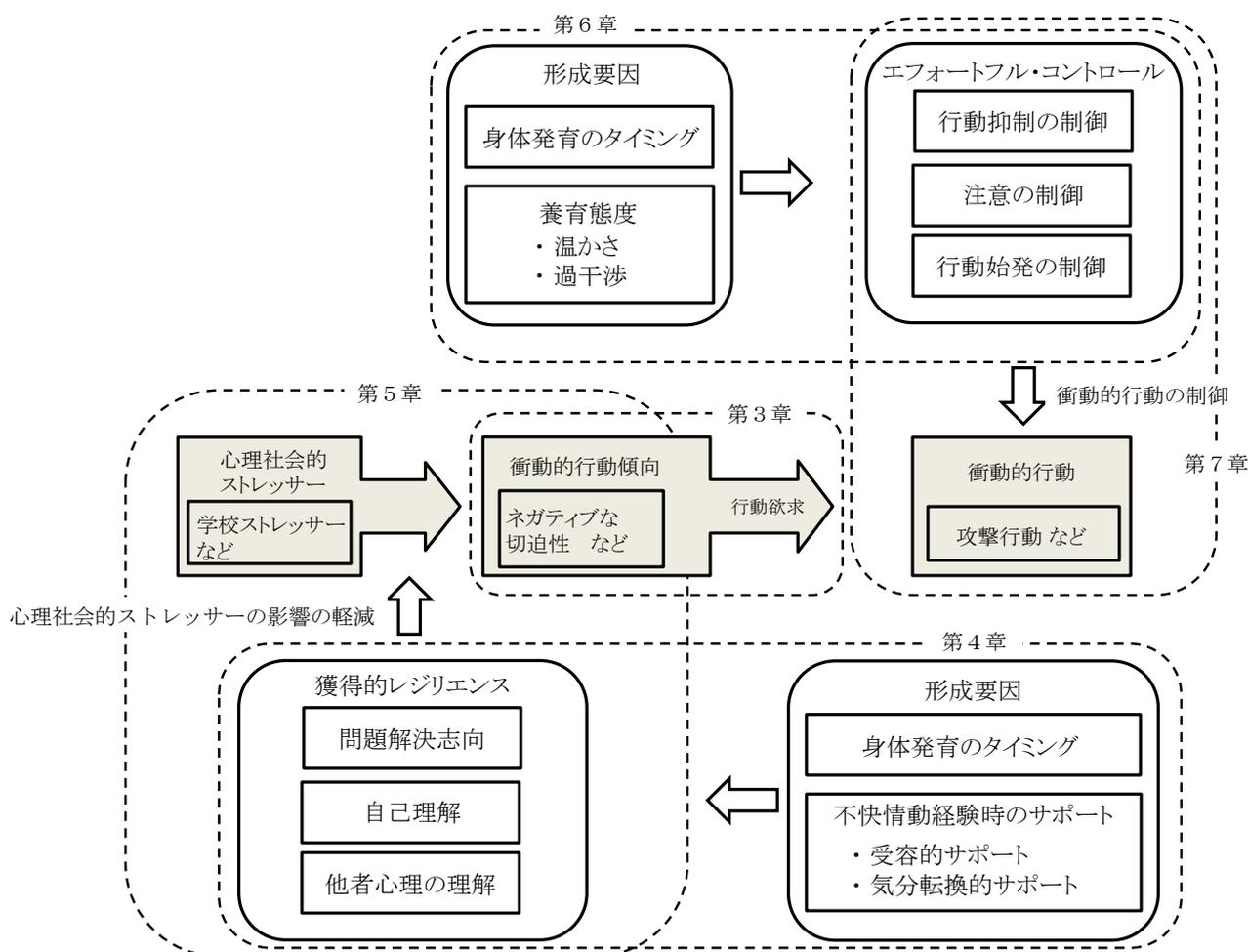


Figure 8-1. 第3章～第7章のまとめ。

第3章では、思春期・青年期に顕在化する重大な衝動的行動である自傷行為やリスクテイキング行動などの自己破壊的行動の生起において、ネガティブな切迫性や刺激欲求が促

進要因として重要であることが示唆された。特に、リストカットなどの自傷行為の生起においてはネガティブな切迫性が、飲酒や喫煙などのリスクテイキング行動の生起においては刺激欲求がそれぞれ促進要因として重要であることが明らかにされた。第4章では、青年が不快情動を経験した際に家族や友人といった重要な他者からサポートを受けることは、青年の獲得的レジリエンスの形成に寄与することが明らかにされた。また、他者心理の理解の形成については、家族からのサポートでは受容的なサポートが寄与しており、友人からのサポートでは気分転換的サポートが寄与していたことから、青年のレジリエンス形成に関わる家族と友人が担う役割の違いが示唆された。第5章では、身体発育のタイミングによって獲得的レジリエンスが有するストレスに対する軽減効果に差異はあるものの、身体発育のタイミングにかかわらず、獲得的レジリエンスがネガティブな切迫性に対して抑制的影響を示したことから、思春期・青年期において獲得的レジリエンスを身に付けることの重要性が示唆された。第6章では、エフォートフル・コントロールの発達には、温かい受容的な養育を受けていると認知することが重要である一方で、過干渉的な養育を受けているという認知はエフォートフル・コントロールの発達に抑制的な影響を与えることが明らかとなった。第7章では、全体で見ると、心理社会的ストレスがエフォートフル・コントロールに対して抑制的な影響を、ネガティブな切迫性に対して促進的な影響を与え、間接的に身体的攻撃行動および言語的攻撃行動が生起するリスクを高めていることが明らかにされた。学年別で見ると、小学校高学年から中学3年へと移行するにつれ、エフォートフル・コントロールとネガティブな切迫性が攻撃行動（身体的攻撃行動、言語的攻撃行動）に及ぼす影響の仕方が変化し、とりわけ中学2年において、ネガティブな切迫性が身体的攻撃行動および言語的に対して促進的な影響を及ぼす一方で、エフォートフル・コントロールの攻撃行動に対する抑制的な影響が認められないことが明らかにされた。男女別で見ると、心理社会的ストレスからネガティブな切迫性への促進的な影響については、女子の方が男子よりも強く、ネガティブな切迫性から言語的攻撃行動への促進的な影響についても、女子の方が男子よりも強いことが明らかとなった。また、エフォートフル・コントロールの高さによって調査協力者を分類したところ、高いエフォートフル・コントロールを有している者は、そうでない者に比べ、身体的攻撃行動および言語的攻撃行動に対する制御力が強いことが明らかにされた。

以上の結果から、Figure 8-1 に示されるように、ストレスがネガティブな切迫性などの衝動的行動傾向を経て、攻撃行動などの衝動的行動に至るまでのプロセスにおいて、

獲得的レジリエンスおよびエフォートフル・コントロールが防御要因として二段階で機能することが示唆された。まず、一段階目では、獲得的レジリエンスによって、ストレスターのネガティブな切迫性に及ぼす促進的影響が軽減され、ネガティブな切迫性の高まりを抑制することができると考えられる。獲得的レジリエンスについては、青年が不快情動を経験した際に、彼らを取り巻く家族や友人の支えを受け続け、自己や他者への理解が深まることによって身につけられていくと考えられる。次に、二段階目は、エフォートフル・コントロールによる衝動的行動の制御である。トップダウン・プロセスの一つであるエフォートフル・コントロールは、思春期・青年期ではボトムアップ・システムよりも成熟速度が遅いものの、獲得的レジリエンスと同様に、家族などの重要な他者からの支えによって発達していき、衝動的行動の生起を制御すると考えられる。

以上から、身体的発育のタイミングの差異や、性差、年齢差などによって獲得的レジリエンスやエフォートフル・コントロールといった防御要因が身に付けられる時期や、抑制効果はある程度異なるものの、発達段階の中でもとりわけ心理学的、神経生物学的に著しい発達を遂げる思春期・青年期ではこれらの防御要因を獲得していくことが今後の発達においても重要であるといえよう。

第2節 結論

思春期・青年期は、衝動的行動の制御に関わるトップダウン・システムよりも衝動的行動の促進に関わるボトムアップ・システムの方が早期に成熟するといったこの時期特有の神経生物学的な発達の影響により、ストレスターなどが引き金となってネガティブな切迫性をはじめとする衝動的行動傾向が高まり、結果として、攻撃行動などの衝動的行動が引き起こされやすいといった「危機」が生じる時期である。しかし、発達の可塑性が高い思春期・青年期は、レジリエンスやエフォートフル・コントロールといった防御要因が発達しやすいという「好機」もみられる時期である。本論文では、思春期・青年期に生じるこのような「危機」と「好機」に焦点を当て、「危機」がありながらも思春期・青年期の衝動的行動の生起プロセスにおいて防御要因が機能すること、また、これらの防御要因は青年を取り巻く人間関係によって形成されていくことを本論文において実証的に明らかにしてきた。このように、衝動的行動を起こしやすいという発達の「危機」を有している青年たちにとって、どのような防御要因がどの時点で有効であり、また、それらの防御要因は

どのようにして形成されていくのかについて検討した本論文は、暴力行為などの重大な問題になりかねない思春期・青年期の衝動的行動への予防策や介入策に対して重要な視点を与える意義深いものといえるであろう。

具体的には、たとえば、セロトニンおよびドパミンの分泌に関わる遺伝子多型の影響などにより生得的にネガティブな切迫性が高まりやすい青年 (Smith & Cyders, 2016) や、本研究で示されたように、思春期の中でもとりわけエフォートフル・コントロールによる衝動的行動に対する制御力が弱いと考えられる中学 2 年頃の青年は、ネガティブな切迫性によって衝動的行動を起こしやすいが、獲得的レジリエンスを周囲のサポートによって形成することができれば、ストレスによるネガティブな切迫性の高まりを低減させることができ、衝動的行動が生起するリスクを未然に防ぐことができると考えられる。また、ネガティブな切迫性が高まったとしても、養育者からの受容的な養育などによって発達が促されるエフォートフル・コントロールによって衝動的行動の生起が抑制されることが考えられる。

今後の課題としては、以下の三点が挙げられる。第一に、本論文における研究では、情動や行動制御に関わるトップダウン・システムの機能を測定する指標としてエフォートフル・コントロールを取り上げたが、今後は、ストループ課題 (e.g., 渡辺・箱田・松本, 2013) やタスクスイッチング (e.g., 佐伯, 2015) などを用いることによって、思春期・青年期のトップダウン・システムの発達を多角的に捉えていくことが重要であろう。また、近年、fMRI (機能的核磁気共鳴断層画像法) が用いられることによって、脳機能に着目した衝動的行動の研究が盛んに行われてきている (e.g., Chester et al., 2016) ことから、こうした測定方法も視野に入れて神経生物学的変数を積極的に扱っていくことが思春期・青年期の衝動的行動の生起機序を検討する上で必要であると考えられる。

第二に、衝動的行動の生起プロセスにネガティブな切迫性と関連する背景要因の影響を含め、検討することである。たとえば、ネガティブな切迫性が高められる背景要因としては、ネガティブな切迫性が高まりやすい遺伝子多型 (Smith & Cyders, 2016) や、ネガティブな切迫性やストレス反応を高める乳幼児期の虐待経験 (e.g., Wardell, Strang, & Hendershot, 2016) などが挙げられるが、これらの影響により、ネガティブな切迫性が高い高まりやすいリスクを有する青年に対しても、本論文で取り上げた獲得的レジリエンスやエフォートフル・コントロールといった防御要因が機能するのかについて詳細に検討していくことが今後必要であろう。

第三に、前方視的研究を行うことにより、思春期・青年期における衝動的行動の防御要因の詳細な形成プロセスを検討することである。本論文で行った実証研究はすべて横断研究のため、獲得的レジリエンスやエフォートフル・コントロールの形成に関わる要因（不快情動を経験した際に受ける重要な他者からのサポート、養育態度など）が、思春期・青年期においてどのように形成されていくかについて詳細に検討することができていない。今後は、防御要因の具体的な形成プロセスについて検討するとともに、生涯発達の観点から、思春期・青年期において身に付けられた防御要因が、青年期・成人期以降においてどのように維持され、どのように機能するのかについても検討していく必要がある。

以上の課題を検討していくことにより、思春期・青年期における衝動的行動の生起プロセスを心理学および神経生物学の両観点から統合的に捉える枠組みについて明らかにしていくことができるであろう。

引用文献

- 安立 奈歩 (2001). 攻撃性の諸相に関する研究 京都大学大学院教育学研究科紀要, 47, 475-487.
- Aiken, L. S., & West, S. G. (1991). *Multiple regression: Testing and interpreting interactions*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- 安藤 明人・曾我 祥子・山崎 勝之・島井 哲志・嶋田 洋徳・宇津木 成介・大芦 治・坂井 明子 (1999). 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙(BAQ)の作成と妥当性, 信頼性の検討 心理学研究, 70, 384-392.
- Arens, A. M., Gaher, R. M., & Simons, J. S. (2012). Child maltreatment and deliberate self-harm among college students: Testing mediation and moderation models for impulsivity. *American Journal of Orthopsychiatry*, 82, 328-337.
- Ayvasik, H. B., & Sümer, H. C. (2010). Individual differences as predictors of illicit drug use among Turkish college students. *Journal of Psychology*, 144, 489-505.
- Blair, C., & Razza, R. P. (2007). Relating effortful control, executive function, and false belief understanding to emerging math and literacy ability in kindergarten. *Child development*, 78, 647-663.
- Bogin, B. (2011). Puberty and Adolescence: An Evolutionary Perspective. In B. B. Brown & M. J. Prinstein (Eds.), *Encyclopedia of adolescence*. Elsevier. (日野林 俊彦 (訳) (2014). 思春期と青年期: 進化的観点 子安 増生・二宮 克美 (監訳) 青年期発達百科事典編集委員会 (編) 青年期発達百科事典 第1巻 発達の定型プロセス 丸善出版 pp.111-123.)
- Bridgett, D. J., Oddi, K. B., Laake, L. M., Murdock, K. W., & Bachmann, M. N. (2013). Integrating and differentiating aspects of self-regulation: Effortful control, executive functioning, and links to negative affectivity. *Emotion*, 13, 47-63.
- Buss, A. H., & Plomin, R. (1975). A temperament theory of personality development. *New York: John Wiley & Sons*.
- Campbell, B. C., Dreber, A., Apicella, C. L., Eisenberg, D. T. A., Gray, P. B., Little, A. C., Garcia, J. R., Zamore, R. S., & Lum. J. K. (2010). Testosterone exposure, dopaminergic reward, and sensation-seeking in young men. *Physiology and*

Behavior, 99, 451-456.

- Carlson, S. R., Johnson, S. C., & Jacobs, P. C. (2010). Disinhibited characteristics and binge drinking among university student drinkers. *Addictive Behaviors, 35*, 242-251.
- Chester, D. S., Lynam, D. R., Milich, R., Powell, D. K., Andersen, A. H., & DeWall, C. N. (2016). How do negative emotions impair self-control? A neural model of negative urgency. *NeuroImage, 132*, 43-50.
- Cloninger, C. R., Svrakic, D. M., & Przybeck, T. R. (1993). A psychobiological model of temperament and character. *Archives of General Psychiatry, 50*, 975-990.
- Collins, W. A., & Laursen, B. (2004). Changing relationships, changing youth interpersonal contexts of adolescent development. *The Journal of Early Adolescence, 24*, 55-62.
- Coskunpinar, A., Dir, A. L., & Cyders, M. A. (2013). Multidimensionality in impulsivity and alcohol use: A meta - analysis using the UPPS model of impulsivity. *Alcoholism: Clinical and Experimental Research, 37*, 1441-1450.
- Costa, P. T. Jr, & McCrae, R. R. (1992). *Revised NEO personality inventory manual*. Odessa, FL: Psychological Assessment Resources.
- Crone, E. A. (2009). Executive functions in adolescence: Inferences from brain and behavior. *Developmental Science, 12*, 825-830.
- Cyders, M. A. (2013). Impulsivity and the sexes: Measurement and structural invariance of the UPPS-P Impulsive Behavior Scale. *Assessment, 20*, 86-97.
- Cyders, M. A., & Smith, G. T. (2007). Mood-based rash action and its components: Positive and negative urgency. *Personality and Individual Differences, 43*, 839-850.
- Cyders, M. A., & Smith, G. T. (2008). Emotion-based dispositions to rash action: Positive and negative urgency. *Psychological Bulletin, 134*, 807-828.
- Cyders, M. A., Smith, G. T., Spillane, N. S., Fischer, S., Annus, A. M., & Peterson, C. (2007). Integration of impulsivity and positive mood to predict risky behavior: Development and validation of a measure of positive urgency. *Psychological Assessment, 19*, 107-118.

- Dickman, S. J. (1990). Functional and dysfunctional impulsivity: personality and cognitive correlates. *Journal of personality and social psychology*, *58*, 95-102.
- Dir, A. L., Karyadi, K., & Cyders, M. A. (2013). The uniqueness of negative urgency as a common risk factor for self-harm behaviors, alcohol consumption, and eating problems. *Addictive Behaviors*, *38*, 2158-2162.
- Doran, N., Cook, J., McChargue, D., & Spring, B. (2009). Impulsivity and cigarette craving: Differences across subtypes. *Psychopharmacology*, *207*, 365-373.
- Eisenberg, N., Smith, C. L., Sadovsky, A., & Spinrad, T. L. (2004). Effortful control: Relations with Emotion regulation, adjustment, and socialization in childhood. In R. F. Baumeister, & K. D. Vohs (Eds.), *Handbook of self-regulation* (pp. 259–282). New York, Guilford Press.
- Eisenberg, N., Zhou, Q., Spinrad, T. L., Valiente, C., Fabes, R. A., & Liew, J. (2005). Relations among positive parenting, children's effortful control, and externalizing problems: A three - wave longitudinal study. *Child development*, *76*, 1055-1071.
- Ellis, L. K., & Rothbart, M. K. (2001). Revision of the early adolescent temperament questionnaire. *In Poster presented at the 2001 biennial meeting of the society for research in child development, Minneapolis, Minnesota.*
- Fischer, S., Anderson, K. G., & Smith, G. T. (2004). Coping with distress by eating or drinking: Role of trait urgency and expectancies. *Psychology of Addictive Behaviors*, *18*, 269-274.
- Fischer, S., & Smith, G. T. (2008). Binge eating, problem drinking, and pathological gambling: Linking behavior to shared traits and social learning. *Personality and Individual Differences*, *44*, 789-800.
- Franklin, J. C., Hessel, E. T., Aaron R. V., Arthur M. S., Heilbron, N., & Prinstein, M. J. (2010). The functions of nonsuicidal self-injury: Support for cognitive-affective regulation and opponent processes from a novel psychophysiological paradigm. *Journal of Abnormal Psychology*, *119*, 850-862.
- 藤井 勝紀 (2005). 生物学的パラメーターとしての身長 of 思春期: ピーク年齢に関する発育学的検証論議 愛知工業大学研究報告. A, 基礎教育センター論文集, *40*, 41-45.
- 藤原 健志・濱口 佳和 (2009). 小中学生における怒り反応の特徴: 両親の養育態度パター

- ンに注目して. 筑波大学発達臨床心理学研究, *20*, 21-28.
- 古澤 照幸 (1989). 刺激欲求尺度・抽象表現項目版 (Sensation Seeking Scale-Abstract Expression) 作成の試み 心理学研究, *60*, 180-184.
- Glenn, C. R., & Klonsky, E. D. (2010). A multimethod analysis of impulsivity in non-suicidal self-injury. *Personality Disorders: Theory, Research, and Treatment*, *1*, 67-75.
- Gulley, L. D., Hankin, B. L., & Young, J. F. (2016). Risk for depression and anxiety in youth: the interaction between negative affectivity, effortful control, and stressors. *Journal of abnormal child psychology*, *44*, 207-218.
- Gunn, R. L., & Smith, G. T. (2010). Risk factors for elementary school drinking: Pubertal status, personality, and alcohol expectancies concurrently predict fifth grade alcohol consumption. *Psychology of Addictive Behaviors*, *24*, 617-627.
- Gunnar, M. R., Wewerka, S., Frenn, K., Long, J. D., & Griggs, C. (2009). Developmental changes in hypothalamus-pituitary-adrenal activity over the transition to adolescence: normative changes and associations with puberty. *Development and Psychopathology*, *21*, 69-85.
- Hemphill, S. A., Kotevski, A., Herrenkohl, T. I., Toumbourou, J. W., Carlin, J. B., Catalano, R. F., & Patton, G. C. (2010). Pubertal stage and the prevalence of violence and social/relational aggression. *Pediatrics*, *126*, e298-e305.
- 平野 真理 (2010). レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み ——二次元レジリエンス要因尺度 (BRS) の作成 パーソナリティ研究, *19*, 94-106.
- 平野 真理 (2011). 中高生における二次元レジリエンス要因尺度 (BRS) の妥当性——双生児法による検討 パーソナリティ研究, *20*, 50-52.
- 平野 真理 (2012). 心理的敏感さに対するレジリエンスの緩衝効果の検討 ——もともとの「弱さ」を後天的に補えるか—— 教育心理学研究, *60*, 343-354.
- 平野 真理 (2013). 中高生における資質的・獲得的レジリエンス要因の様相 ——学年差と性差の検討—— 第 55 回日本教育心理学会総会発表論文集, 168.
- Horvath, L. S., Milich, R., Lynam, D., Leukefeld, C., & Clayton, R. (2004). Sensation seeking and substance use: A cross-lagged panel design. *Individual Differences Research*, *2*, 175-183.

- 法務省法務総合研究所(編) (2012). 犯罪白書(平成 24 年版) ——刑務所出所者等の社会復帰支援—— 国立印刷局
- Hoyle, R. H., Stephenson, M. T., Palmgreen, P., Lorch, E. P., & Donohew, R. L. (2002). Reliability and validity of a brief measure of sensation seeking. *Personality and Individual Differences, 32*, 401-414.
- 市村 國夫・下村 義夫・渡邊 正樹 (2001). 中・高校生の薬物乱用・喫煙・飲酒行動と規範意識 学校保健研究, *43*, 39-49.
- 石毛 みどり・無藤 隆 (2005). 中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連——受験期の学業場面に着目して—— 教育心理学研究, *53*, 356-367.
- Jensen, J. D., Weaver, A. J., Ivic, R., & Imboden, K. (2011). Developing a brief sensation seeking scale for children: Establishing concurrent validity with video game use and rule-breaking behavior. *Media Psychology, 14*, 71-95.
- Johnson, S. B., Dariotis, J. K., & Wang, C. (2012). Adolescent risk taking under stressed and nonstressed conditions: Conservative, calculating, and impulsive types. *Journal of Adolescent Health, 51*, s34-s40.
- 上長 然 (2007). 思春期の身体発育のタイミングと抑うつ傾向 教育心理学研究, *55*, 370-381.
- 金子 泰之 (2011). 中学生の問題行動動機と問題行動の関係——< 規範文化の低い学校> と< 規範文化の高い学校> の比較からの検討—— カウンセリング研究, *44*, 199-208.
- 川島 一晃 (2014). レジリエンス 後藤 宗理・二宮 克美・高木 秀明・大野 久・白井 利明・平石 賢二・佐藤 有耕・若松 養亮 (編) 新・青年心理学ハンドブック (p. 291) 福村出版
- Khurana, A., Romer, D., Betancourt, L. M., Brodsky, N. L., Giannetta, J. M., & Hurt, H. (2012). Early adolescent sexual debut: The mediating role of working memory ability, sensation seeking, and impulsivity. *Developmental Psychology, 48*, 1416-1428.
- Knorr, A. C., Jenkins, A. L., & Conner, B. T. (2013). The role of sensation seeking in non-suicidal self-injury. *Cognitive Therapy and Research, 37*, 1276-1284.
- 小林 正法・丹野 義彦 (2013). エフォートフル・コントロールは検索誘導性忘却を予測す

- る パーソナリティ研究, 22, 77-79.
- 国里 愛彦・山口 陽弘・鈴木 伸一 (2008). Cloninger の気質・性格モデルと Big Five モデルとの関連性 パーソナリティ研究, 16, 324-334.
- Laye-Gindhu, A., & Schonert-Reichl, K. A. (2005). Nonsuicidal self-harm among community adolescents: Understanding the “whats” and “whys” of self-harm. *Journal of youth and Adolescence*, 34, 447-457.
- Liu, R. T., & Kleiman, E. M. (2012). Impulsivity and the generation of negative life events: The role of negative urgency. *Personality and Individual Differences*, 53, 609-612.
- Lynam, D. R. & Miller, J. D. (2004). Personality pathways to impulsive behavior and their relations to deviance: Results from three samples. *Journal of Quantitative Criminology*, 20, 319-341.
- Lynam, D. R., Miller, J. D., Miller, D. J., Bornovalova, M. A., & Lejuez, C. W. (2011). Testing the relations between impulsivity-related traits, suicidality, and nonsuicidal self-injury: A test of the incremental validity of the UPPS Model. *Personality Disorders: Theory, Research, and Treatment*, 2, 151-160.
- Martin, C. A., Kelly, T. H., Rayens, M. K., Brogli, B. R., Brengel, A., Smith, W. J., & Omar, H. A. (2002). Sensation seeking, puberty, and nicotine, alcohol, and marijuana use in adolescence. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 41, 1495-1502.
- Martin, C. A., Logan, T. K., Leukefeld, C., Milich, R., Omar, H., & Clayton, R. (2001). Adolescent and young adult substance use: Association with sensation seeking, self-esteem and retrospective report of early pubertal onset. A preliminary examination. *International Journal of Adolescent Medicine and Health*, 13, 211-219.
- 松木 太郎 (2013). 青年の心理的居場所感が攻撃行動に及ぼす影響. 神戸大学発達・臨床心理学研究, 12, 13-17.
- 松木 太郎・齊藤 誠一 (2016). ネガティブな情動を経験した際に重要な他者からのサポートが青年の獲得的レジリエンスに与える影響の検討 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 9, 125-128.

- 松本 太郎・齊藤 誠一 (投稿中). ネガティブな切迫性および刺激欲求が青年の自己破壊的行動欲求に及ぼす影響 青年心理学研究
- 松本 俊彦 (2009). 自傷行為の理解と援助——「故意に自分の健康を害する」若者たち—— 日本評論社
- Miller, J., Flory, K., Lynam, D., & Leukefeld, C. (2003). A test of the four-factor model of impulsivity-related traits. *Personality and Individual Differences, 34*, 1403-1418.
- Miller, T. R., & Taylor, D. M. (2005). Adolescent suicidality: Who will ideate, who will act? *Suicide Life-Threatening Behavior, 35*, 425-435.
- 文部科学省 (2013). 平成 24 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について 文部科学省 Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/1341728.htm. (2016 年 9 月 1 日)
- 文部科学省 (2014). 平成 25 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について 文部科学省 Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/1351936.htm. (2016 年 9 月 1 日)
- 文部科学省 (2015). 平成 26 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について 文部科学省 . Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/09/1362012.htm. (2016 年 9 月 1 日)
- 森口 由佳子・村井 俊哉・大西 良浩・福山 秀直 (2011). キレル系ストレス蓄積度尺度 (AIS) の作成および一般中高生の評価 思春期学, *29*, 269-277.
- 武良 徹文・田村 進・埜森 武雄・關谷 武司・藤側 宏喜 (1998). 男子の高校生と大学生における生活習慣と精神的健康の関係 発育発達研究, *26*, 43-52.
- Nigg, J. T. (2006). Temperament and developmental psychopathology. *Journal of Child Psychology and Psychiatry, 47*, 395-422.
- 西野 泰代・小林 佐知子・北川 朋子 (2009). 高学年児童の抑うつに対する社会環境の影響と自己価値の役割 心理学研究, *80*, 252-257.
- Noble, K. G., Norman, M. F., & Farah, M. J. (2005). Neurocognitive correlates of socioeconomic status in kindergarten children. *Developmental science, 8*, 74-87.
- 岡田 佳子 (2002). 中学生の心理的ストレス・プロセスに関する研究. 教育心理学研究, *50*, 193-203.
- 岡安 孝弘・嶋田 洋徳・丹羽 洋子・森 俊夫・矢富 直美 (1992). 中学生の学校ストレス

- サーの評価とストレス反応との関係 心理学研究, 63, 310-318.
- 小塩 真司 (2001). 大学生用リスクテイキング行動尺度 (RIBS-U) の作成 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 48, 257-265.
- 小塩 真司・中谷 素之・金子 一史・長峰 伸治 (2002). ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性——精神的回復力尺度の作成—— カウンセリング研究, 35, 57-65.
- Owens, D., Horrocks, J., & House, A. (2002). Fatal and non-fatal repetition of self-harm: Systematic review. *British Journal of Psychiatry*, 181, 193-199.
- 小澤 永治 (2010). 思春期における不快情動への態度とストレスの関連 心理学研究, 81, 501-509.
- Paikoff, R. L., & Brooks-Gunn, J. (1991). Do parent-child relationships change during puberty? *Psychological bulletin*, 110, 47.
- Patton, J. H., Stanford, M. S., & Barratt, E. S. (1995). Factor structure of the Barratt Impulsiveness Scale. *Journal of Clinical Psychology*, 51, 768-774.
- Petersen, A. C., Crockett, L., Richards, M., & Boxer, A. (1988). A self-report measure of pubertal status: Reliability, validity, and initial norms. *Journal of Youth and Adolescence*, 17, 117-133.
- Peterson, C. M., & Fischer, S. (2012). A prospective study of the influence of the UPPS model of impulsivity on the co-occurrence of bulimic symptoms and non-suicidal self-injury. *Eating Behaviors*, 13, 335-341.
- Piko, B. F., & Kovács, E. (2010). Do parents and school matter? Protective factors for adolescent substance use. *Addictive Behaviors*, 35, 53-56.
- Repetti, R. L., Taylor, S. E., & Seeman, T. E. (2002). Risky families: family social environments and the mental and physical health of offspring. *Psychological bulletin*, 128, 330.
- Romer, D. (2010). Adolescent risk taking, impulsivity, and brain development: Implications for prevention. *Developmental Psychobiology*, 52, 263-276.
- Romer, D., Betancourt, L. M., Brodsky, N. L., Giannetta, J. M., Yang, W., & Hurt, H. (2011). Does adolescent risk taking imply weak executive function? A prospective study of relations between working memory performance, impulsivity, and risk

- taking in early adolescence. *Developmental Science*, *14*, 1119-1133.
- Rothbart, M. K., Ahadi, S. A., Hershey, K. L., & Fisher, P. (2001). Investigations of temperament at three to seven years: The Children's Behavior Questionnaire. *Child Development*, *72*, 1394-1408.
- 佐伯 恵里奈 (2015). 柔軟性を支える認知メカニズム: タスクスイッチング研究からの示唆 (特集 実行機能研究から心の制御を考える). *心理学評論*, *58*, 34-51.
- 齊藤 和貴・岡安 孝弘 (2011). 大学生のレジリエンスがストレス過程と自尊感情に及ぼす影響 *健康心理学研究*, *24*, 33-41.
- 酒井 厚・菅原 ますみ・眞榮城 和美・菅原 健介・北村 俊則 (2002). 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応. *教育心理学研究*, *50*, 12-22.
- Settles, R. E., Fischer, S., Cyders, A. M., Combs, J. L., Gunn, R. L., & Smith, G. T. (2012). Negative urgency: A personality predictor of externalizing behavior characterized by neuroticism, low conscientiousness, and disagreeableness. *Journal of Abnormal Psychology*, *121*, 160-172.
- 塩澤 聖子 (2009). 大学新入生を調査対象とした大学生用ソーシャルサポート尺度の作成 *学校メンタルヘルス*, *11*, 33-42.
- Sim, L., Adrian, M., Zeman, J., Cassano, M., & Friedrich, W. N. (2009). Adolescent deliberate self-harm: Linkages to emotion regulation and family emotional climate. *Journal of Research on Adolescence*, *19*, 75-91.
- 嶋田 洋徳 (1998). 小中学生の心理的ストレスと学校 不適応に関する研究 風間書房
- Smith, G. T., & Cyders, M. A. (2016). Integrating affect and impulsivity: The role of positive and negative urgency in substance use risk. *Drug and Alcohol Dependence*, *163*, s3-s12.
- Spear, L. P. (2000). Neurobehavioral changes in adolescence. *Current Directions in Psychological Science*, *9*, 111-114.
- Spear, L. P. (2009). Heightened stress responsivity and emotional reactivity during pubertal maturation: Implications for psychopathology. *Development and Psychopathology*, *21*, 87-97.
- Spear, L. P. (2011). Brain Development. In B. B. Brown & M. J. Prinstein (Eds.), *Encyclopedia of adolescence*. Elsevier. (郷式 徹 (訳) (2014). 脳の発達 子安 増

- 生・二宮 克美 (監訳) 青年期発達百科事典編集委員会 (編) 青年期発達百科事典 第 1 卷 発達の定型プロセス 丸善出版 pp.353-363.)
- Spillane, N. S., Cyders, M. A., & Maurelli, K. (2012). Negative urgency, problem drinking and negative alcohol expectancies among members from one First Nation: A moderated-mediation model. *Addictive Behaviors, 37*, 1285-1288.
- Steinberg, L. (2007). Risk taking in adolescence: New perspectives from brain and behavioral science. *Current Directions in Psychological Science, 16*, 55-59.
- Steinberg, L. (2008). A social neuroscience perspective on adolescent risk-taking. *Developmental Review, 28*, 78-106.
- Steinberg, L., Albert, D., Cauffman, E., Banich, M., Graham, S., & Woolard, J. (2008). Age differences in sensation seeking and impulsivity as indexed by behavior and self-report: Evidence for a dual systems model. *Developmental Psychology, 44*, 1764-1778.
- Steinberg, L., Graham, S., O'Brien, L., Woolard, J., Cauffman, E., & Banich, M. (2009). Age differences in future orientation and delay discounting. *Child Development, 80*, 28-44.
- 鋤柄 増根・古田 美佳・中川 敦子 (2013). 前青年期における気質の発達の变化 日本心理学会第 77 回大会, 987.
- 高橋 史・佐藤 寛・野口 美幸・永作 稔・嶋田 洋徳 (2009). 中学生用攻撃行動尺度の作成と信頼性・妥当性の検討. *行動療法研究, 35*, 53-66.
- 田村 修一・石隅 利紀 (2001). 指導・援助サービス上の悩みにおける中学校教師の被援助志向性に関する研究——バーンアウトとの関連に焦点をあてて—— *教育心理学研究, 49*, 438-448.
- 田中 麻未 (2006). パーソナリティ特性およびネガティブ・ライフイベントが思春期の抑うつに及ぼす影響 *パーソナリティ研究, 14*, 149-160.
- 寺崎 正治・塩見 邦雄・岸本 陽一・平岡 清志 (1987). 日本語版 Sensation-Seeking Scale の作成 *心理学研究, 58*, 42-48.
- 上野 雄己・鈴木 平・清水 安夫 (2014). 大学生運動部員のレジリエンスモデルの構築に関する研究 *健康心理学研究, 27*, 20-34.
- 内海 緒香 (2013). 青年期養育尺度 (PAS) の作成. *心理学研究, 84*, 238-246.

- Verdejo-García, A., Bechara, A., Recknor, E. C., & Pérez-García, M. (2007). Negative emotion-driven impulsivity predicts substance dependence problems. *Drug and Alcohol Dependence, 91*, 213-219.
- Véronneau, M-H., Racer, K. H., Fosco, G. M., & Dishion, T. J. (2014). The contribution of adolescent effortful control to early adult educational attainment. *Journal of Educational Psychology, 106*, 730-743.
- Wardell, J. D., Strang, N. M., & Hendershot, C. S. (2016). Negative urgency mediates the relationship between childhood maltreatment and problems with alcohol and cannabis in late adolescence. *Addictive behaviors, 56*, 1-7.
- 渡辺 めぐみ・箱田 裕司・松本 亜紀 (2013). ストループ・逆ストロープ課題の切り替えコストと注意制御 心理学研究, *84*, 64-68.
- Weiser, J., & Reynolds, B. (2011). Impulsivity and Adolescence. In B. B. Brown & M. J. Prinstein (Eds.), *Encyclopedia of adolescence*. Elsevier. (山形 伸二 (訳) (2014). 衝動性 子安 増生・二宮 克美 (監訳) 青年期発達百科事典編集委員会 (編) 青年期発達百科事典 第1巻 発達の定型プロセス 丸善出版 pp.156-162.)
- Whiteside, S. P., & Lynam, D. R. (2001). The Five Factor Model and impulsivity: Using a structural model of personality to understand impulsivity. *Personality and Individual Differences, 30*, 669-689.
- Wichstrøm, L. (2009). Predictors of non-suicidal self-injury versus attempted suicide: Similar or different? *Archives of Suicide Research, 13*, 105-122.
- Wong, M. M., & Rowland, S. E. (2013). Self-determination and substance use: Is effortful control a mediator? *Alcoholism: Clinical and Experimental Research, 37*, 1040-1047.
- 山形 伸二・高橋 雄介・繁樹 算男・大野 裕・木島 伸彦 (2005). 成人用エフォートフル・コントロール尺度日本語版の作成とその信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, *14*, 30-41.
- 山口 亜希子・松本 俊彦・近藤 智津恵・小田原 俊成・竹内 直樹・小阪憲司・澤田 元 (2004). 大学生における自傷行為の経験率——自記式質問票による調査—— 精神医学, *46*, 473-479.
- 山口 豊・窪田 辰政・須部 宗生・杉山 三七男・下川 学・横沢 民男・松本 俊彦 (2013).

- 自傷行為の実態について 21 世紀アジア学研究, *11*, 73-83.
- 吉武 尚美・松本 聡子・室橋 弘人・古荘 純一・菅原 ますみ (2012). 中高生の生活満足度に対するポジティブな個人内特性と対人関係の関連. *発達心理学研究*, *23*, 180-190.
- Zakletskaia, L. I., Mundt, M. P., Balousek, S. L., Wilson, E. L., & Fleming, M. F. (2009). Alcohol-impaired driving behavior and sensation-seeking disposition in a college population receiving routine care at campus health services centers. *Accident Analysis and Prevention*, *41*, 380-386.
- Zapolski, T. C. B., Stairs, A. M., Settles, R. F., Combs, J. L., & Smith, G. T. (2010). The measurement of dispositions to rash action in children. *Assessment*, *17*, 116-125.
- Zelazo, P. D., & Carlson, S. M. (2012). Hot and cool executive function in childhood and adolescence: Development and plasticity. *Child Development Perspectives*, *6*, 354-360.
- Zhou, Q., Chen, S. H., & Main, A. (2012). Commonalities and differences in the research on children's effortful control and executive function: a call for an integrated model of self - regulation. *Child Development Perspectives*, *6*, 112-121.
- Zuckerman, M. (1964). Development of a Sensation Seeking Scale. *Journal of Consulting Psychology*, *28*, 477-482.
- Zuckerman, M. (1994). Behavioral expressions and biosocial bases of sensation seeking. *New York: Cambridge University Press.*

謝 辞

私が心理学に興味をもったきっかけは、学部の頃に様々な凄惨なニュースを見聞きする中で、『心のブレーキ』とは何か』について知りたいと思ったことです。大学院に入学し、先輩に紹介していただいた適応教室で出会った子どもたちと関わる中で、その思いはさらに強まっていき、気づいたら、本論文の研究テーマに辿り着いていました。

当初の思いをどこまで形にできたかはわかりませんが、ひとまず、この本論文をもって私の長かった博士課程生活の一区切りにしたいと思います。

齊藤誠一先生へ

大学院に進学した時から、何から何まで至らないこの私に研究はもちろんのことながら、生活指導やマナーなど、生きていく上で必要な様々なことを、温かくご指導いただき、本当に感謝の限りでございます。本論文は課題が多々ありますが、本論文のテーマで書き上げることができたのは、心理学に留まらない幅広い知識をお持ちの齊藤先生のご指導とご助言があったからこそと考えております。本論文以外でも、東日本大震災 心のケアプロジェクトに関らせていただいたことにより、多くのことを学ばせていただきました。恐縮ながらも、これからもまだまだお世話になるかと思えます。まずは6年間、本当にありがとうございました。

加藤佳子先生、河崎佳子先生、林 創先生、吉田圭吾先生へ

大変お忙しいところ、有益なご指摘とご助言をいただき、心よりお礼申し上げます。予備審査でいただいた先生方からのご指摘とご助言により、本論文の至らぬ点についてさらに勉強し、本論文をブラッシュアップさせていただく機会をいただきました。先生方からいただきましたご指摘・ご助言のうち、本論文で十分に検討できていなかったものは、今後の課題とし、さらに精進したいと思います。本当にありがとうございました。

神戸大学大学院で出会った先生方へ

神戸大学大学院で出会った先生方には、修士の時から大変お世話になりました。私が研究室で夜遅くまで残っている時に、赤木和重先生や鳥居深雪先生からお菓子をいただいたおかげで、空腹に負けずに研究に取り組むことができました。神戸大の先生方には色々な

ことでご迷惑をおかけしたりしても、いつも温かく接してくださいました。博士課程を修了してもさらに精進したいと思います。本当にありがとうございました。

石本雄真様，榎本千春様，岡本英生様，上長 然様，下坂 剛様，田中由佳様，谷 芳恵様，西田裕紀子様，則定百合子様，日瀉淳子様

ようやく博士論文を提出することができそうです。神戸大の偉大な先輩方には修士の時から本当にご迷惑ばかりをおかけし、申し訳なさでいっぱいです。皆様には、研究へのご指摘やご助言をいただいただけでなく、様々なことで支えてくださり、本当に感謝しております。上長さん、私を飲みに誘ってくださり、居酒屋で「思春期の心理学とは何か」について語られたことは、決して忘れることはありません。その時いただいた言葉は、私が研究に取り組む上で、今も大事にしている言葉です。

まだまだ未熟でどうしようもない後輩ですが、これからも温かく見守っていただけますと、幸いです。

岩本伊代様，北代 祐様，近藤安津美様

私が神戸大学大学院に入学し、はじめて基礎論部屋に入った時、温かく出迎えてくれたのが、いよさん、きたしろさん、あっちゃんさんのお三人でした。同じ部屋の身近にいる先輩ということで甘えてしまい、何から何まで相談させていただきましたが、そのたびに、温かく接して下さったこと、心から感謝しております。北代さんがお子様に「たろう」という名をつけられた時は、心の底から、うれしかったです。これからも「たろう」の名に恥じないように精進していきたいと思います。本当にありがとうございました。

近藤龍彰様，鈴木ゆみ様，原田 新様

ゼミが異なるにもかかわらず、大学内外で色々とお世話になり、本当にありがとうございました。博士課程を終えてもまだまだ研究者としては未熟者ですので、また、ご指導のほどよろしく申し上げます。

学会発表・研究会・研究グループでお世話になった先生方へ

私が学会発表や研究会で発表した際に、大変有益なご指摘・ご助言をいただいた先生方に、心より感謝の気持ちを申し上げます。特に、関西地区青年心理学研究会では本論文の

作成にあたり貴重なご指摘・ご助言をいただきました。また、子どもの社会性の発達研究プロジェクト（PEERS）では、大変貴重な経験をさせていただきました。本当にありがとうございました。先生方には、またお会いした際に、感謝の意を述べさせていただきたいと思えます。

齊藤ゼミの皆様へ

年長のゼミ生として長い間居座らせていただいていたにもかかわらず、ゼミの皆様にはいつも優しく接していただき、感謝の限りです。修了してもまたゼミに顔を出させていただくことになるかと思いますが、その時はよろしくお願ひします。

田村陽子様，森 優子様

修士時代から何かとお世話になりました。ありがとうございました。齊藤ゼミの同期のお二人とは修士時代から含めると長い付き合いになりますね。たまーにくれる連絡，うれしかったです。お互い色々と落ち着いたら，また集合しましょう。

雲財啓様，神野雄様，状家莉保様，田中美帆様，中井由貴子様，西尾祐美子様，西中華子様へ

博士課程に進学してから，はじめは 509（通称，基礎論部屋）で，次は 506（通称，ドクター部屋）で多くの時間を共に過ごし，多くのことを語る機会がありました。基礎論部屋もドクター部屋も，誰かがいるといつも賑やかで，真剣な研究の話から，次の日になったら忘れるくらいどうでもいいような話まで，色々な話で盛り上がっていたように思います。このような空間と時間があつたからこそ，心に余裕ができ，途中でくじけることなく博士論文の執筆を続けることができたのだと思います。本当にありがとうございました。

神戸大学附属小・中学校の先生方および児童・生徒の皆様，調査に協力して下さった専門学校生・大学生・大学院生の皆様へ

このたびは貴重な時間を割いて質問紙調査にご協力いただきましたこと，心よりお礼申し上げます。皆様にご協力いただいたおかげで，本論文を完成させることができたと同時に，有益な知見を得ることができました。誠にありがとうございました。

芦屋市教育委員会学校教育課適応教室、伊丹市立総合教育センターの先生方へ

子どもの姿をそばで見るといふ貴重な機会を与えてくださったことにより、研究に役立つ多くのヒントを得ることができました。それらのヒントがあったからこそ、本論文を書き上げることができました。心より感謝申し上げます。

適応教室で出会った子どもたちへ

「なんの研究してるん？」「いつまで大学院いてるん？」と、適応教室でわたしのことを気にかけてくれていた心優しい(?)子が何人かいましたが、松木先生はようやく、ひとまず、これまでやってきた研究をまとめ、長かった学生生活を終えることができそうです。わたしが長い長い時間をかけて研究してきたこと、そして研究を通してみなさんに伝えたかったことを、いつか読んでくれることを思って、ここに短くまとめます。

思春期というのは、誰もが通る時期で、ちょっとしたことでイライラしたり、落ち込んだりして、「なんであんなことをしてしまったんだろう」と、後悔するような行動をしてしまいやすい時期です。この原因のひとつは、より良い脳に成長するために、みなさんの脳が工事されているからです。だからある意味、しかたがないことなのです。「じゃあこの時期はどうすればいいの？」という疑問がでてくると思いますが、大丈夫です。あなたのまわりにいる人たちから支えてもらう中で、自分なりの「心のブレーキ」を身につけていくことができます。工事中の脳は、おどろくほど、柔軟だからです。みなさんが大人になって、ちょうどみなさんが適応教室に通っていたくらいの年齢の子どもに関わったり、育てていたりする立場になったら、今度はみなさんが、彼らをそばで支えてあげられるような人になってください。わたしが研究を通してみなさんに伝えたかったことは、以上です。

松木先生がさいごまで研究を進めていくことができたのは、まちががなく、みなさんとの出会いがあったからです。ほんとうに、ありがとう。

私の家族へ

私が時間をかけてこそこそと研究してきたことが、ようやく博士論文という形にまとまりました。家族には陰ながら支えてもらい、研究の進捗など、何かと気にかけてくれたように思います。大学院に入学してからずいぶんと時間が経ち、私ももういい歳になりましたが、面と向かって感謝の気持ちを伝えるのはいくつになっても気恥ずかしいものなので、この場を借りて、感謝の気持ちを伝えたいと思います。ありがとう。そのうち就職

できたら、祖父母孝行，親孝行，姉孝行をしていこうと思うので，その時が来るまで，また，気長に待っていてください。

本論文の執筆にあたり，私を支えてくれたすべての方々に，心より御礼申し上げます。

2017年1月

付 録

付録 1. 本研究で使用した尺度

第 3 章 (1), (2), (3), (4), (5), (6) を使用。

第 4 章 (7), (8), (9), (10) を使用。

第 5 章 (0), (1), (10), (11) を使用。

第 6 章 (0), (12), (13), (14) を使用。

第 7 章 (1), (11) (部活ストレッサーを除く), (13), (15) を使用。

(0) 身体発育

【教示文】

あなたはこれまでに、短い期間で、身長が急に大きく伸びたことがありましたか。

【評定】

1. まだない
2. 今のびている
3. あった

(1) ネガティブな切迫性

【教示文】

下のそれぞれの文について、今のあなたにどれくらいあてはまるかを、「1:まったくあてはまらない」～「5:とてもよくあてはまる」までの中から、選んでください。

【評定】

1. 全くあてはまらない
2. あまりあてはまらない
3. どちらともいえない
4. だいたいあてはまる
5. とてもよくあてはまる

【項目】

1. いらいらすると、よく考えずに行動してしまうことがよくある
2. おちこんでいるとき、気分をはらす行動をして、後悔することがよくある
3. いらいらしてよく考えずに行動したせいで、状況がさらに悪くなることがよくある
4. 気分がおちこむと、よけいにつらくなうような行動であっても、それをやめられないことがある
5. はらがたつようなことがあっても、人や物にやつあたりはしないほうだ
6. けんかをしているとき、あとになって、言い過ぎたと思うようなことをよく言ってしまうほうだ
7. かつとなっても、気持ちをさえることができるほうだ
8. 頭にきたら、物をほうり投げたくなることがよくある

(2) 刺激欲求

【教示文】

下のそれぞれの文について、今のあなたにどれくらいあてはまるかを、「1:まったくあてはまらない」～「5:とてもよくあてはまる」までの中から、選んでください。

【評定】

1. 全くあてはまらない
2. あまりあてはまらない
3. どちらともいえない
4. だいたいあてはまる
5. とてもよくあてはまる

【項目】

1. ジェットコースターなど、スリルのある乗り物は好きなほうだ
2. ヒヤッとするようなことは好きなほうだ
3. 細かい計画を立てずに、旅行に出かけてみたい
4. 一度も行ったことがない場所を探検してみたいと思う
5. はらはらさせることがあっても飽きさせない人と付き合うのが楽しい
6. 規則をやぶるようなことでも、目新しく面白そうなことならやってみたいと思う
7. 私はすぐに退屈するほうだ
8. 家の中にずっといると、そわそわするほうだ

(3) 身体的攻撃

【教示文】

下のそれぞれの文について、今のあなたにどれくらいあてはまるかを、「1:まったくあてはまらない」～「5:とてもよくあてはまる」までの中から、選んでください。

【評定】

1. 全くあてはまらない
2. あまりあてはまらない
3. どちらともいえない
4. だいたいあてはまる
5. とてもよくあてはまる

【項目】

1. なぐられたら、なぐり返すと思う
2. 挑発されたら、相手をなぐりたくなるかもしれない
3. 権利を守るためには暴力もやむをえないと思う
4. 人をなぐりたいという気持ちになることがある
5. どんな場合でも、暴力に正当な理由があるとは思えない
6. 相手が先に手を出したとしても、やりかえさない

(4) 言語的攻撃

【教示文】

下のそれぞれの文について、今のあなたにどれくらいあてはまるかを、「1:まったくあてはまらない」～「5:とてもよくあてはまる」までの中から、選んでください。

【評定】

1. 全くあてはまらない
2. あまりあてはまらない
3. どちらともいえない
4. だいたいあてはまる
5. とてもよくあてはまる

【項目】

1. 友達の意見に賛成できないときには、はっきり言う
2. 自分の権利は遠慮しないで主張する
3. 意見が対立したときは、議論しないと気がすまない
4. 誰かに不愉快なことをされたら、不愉快だとはっきり言う
5. でしゃばる人がいても、たしなめることができない

(5) 自傷欲求

【教示文】

下のそれぞれの文について、今のあなたにどれくらいあてはまるかを、「1:まったくあてはまらない」～「5:とてもよくあてはまる」までの中から、選んでください。

【評定】

1. 全くあてはまらない
2. あまりあてはまらない
3. どちらともいえない
4. だいたいあてはまる
5. とてもよくあてはまる

【項目】

1. めちゃくちゃな行動をしたくなる時がある
2. 自分を傷つけたくなる時がある
3. 自分の髪を引っ張ったり、引き抜いたりしたことがある
4. 自分の皮膚をかきむしりたくなる時がある

(6) リスクテイキング行動欲求

【教示文】

下のそれぞれの文について、これまでに、どの程度実行しようと思ったことがあるかを、「1:全く思わなかった」～「4:何度も思った」までの中から、選んでください。

【評定】

1. 全く思わなかった
2. 1～2度は思った
3. ときどき思った
4. 何度も思った

(f) リスクテイキング行動欲求

1. たばこを吸うこと
2. 大量の酒を飲むこと
3. イッキ飲みをすること
4. 飲酒運転をすること

(7) 青年用不快情動サポート

【教示文】

下のそれぞれの文について、今のあなたにどれくらいあてはまるかを、「1:まったくあてはまらない」～「5:とてもよくあてはまる」までの中から、選んでください。

【評定】

1. 全くあてはまらない
2. あまりあてはまらない
3. どちらともいえない
4. だいたいあてはまる
5. とてもよくあてはまる

【項目】

受容的サポート

1. なぐさめてもらう
2. はげましてもらう
3. 「大丈夫」と言ってもらう
4. 共感してもらう
5. 気持ちを理解してもらう

気分転換的サポート

6. 気分転換をさせてもらう
7. スポーツや遊びなどでストレスの発散に付き合ってもらう
8. 嫌なことを忘れさせてもらう
9. 冗談などで笑わせてもらう

(8) 情緒的サポート

【教示文】

あなたの家族や友人は、ふだん、あなたに対してどのように接してくれていますか。「家族」の場合と「友人」の場合で、「全くあてはまらない(1)」～「とてもよくあてはまる(5)」までの中から、選んでください。

【評定】

1. 全くあてはまらない
2. あまりあてはまらない
3. どちらともいえない
4. だいたいあてはまる
5. とてもよくあてはまる

【項目】

1. 落ち込んでいるとき、元気づけてくれる
2. ふだんからあなたの気持ちをよく理解してくれる
3. 日ごろからあなたを理解し、評価してくれる
4. 精神的にあなたを支えてくれる
5. あなたになにか、うれしいことが起きたとき、心からよろこんでくれる

(9) 援助の欲求と態度

【教示文】

下のそれぞれの文について、今のあなたにどれくらいあてはまるかを、「1:まったくあてはまらない」～「5:とてもよくあてはまる」までの中から、選んでください。

【評定】

1. 全くあてはまらない
2. あまりあてはまらない
3. どちらともいえない
4. だいたいあてはまる
5. とてもよくあてはまる

【項目】

1. 困っていることを解決するために、他者からの助言や援助がほしい
2. 自分が困っているときには、話を聞いてくれる人がほしい
3. 困っていることを解決するために、自分と一緒に対処してくれる人がほしい
4. 自分は、よほどのことがない限り、人に相談することがない
5. 何事にも他人に頼らず、自分で解決したい
6. 他人の援助や助言は、あまり役立たないと思っている
7. 今後も、自分の周りの人に助けられながら、上手くやっていきたい

(10) 獲得的レジリエンス

【教示文】

下のそれぞれの文について、今のあなたにどれくらいあてはまるかを、「1:まったくあてはまらない」～「5:とてもよくあてはまる」までの中から、選んでください。

【評定】

1. 全くあてはまらない
2. あまりあてはまらない
3. どちらともいえない
4. だいたいあてはまる
5. とてもよくあてはまる

【項目】

問題解決志向

1. 人と誤解が生じたときには積極的に話をしようとする
2. 嫌な出来事があったとき、その問題を解決するために情報を集める
3. 嫌な出来事があったとき、今の経験から得られるものを探す

自己理解

4. 自分の性格についてよく理解している
5. 嫌な出来事が、どんな風に自分の気持ちに影響するか理解している
6. 自分の考えや気持ちがよくわからないことが多い

他者心理の理解

7. 人の気持ちや、微妙な表情の変化を読み取るのが得意だ
8. 他人の考え方を理解するのが比較的得意だ
9. 思いやりを持って人と接している

(11) 学校ストレス

【教示文】

以下の出来事を半年くらいの間で、「①どれだけ経験したか」と、その出来事が「②どれだけいやだったか」を、それぞれ0～3(①は「0:全然なかった」～「3:よくあった」、②は「0:全然いやではなかった」～「3:とてもいやだった」)までの中から、選んでください。

【評定】

- ①「0:全然なかった」「1:たまにあった」「2:ときどきあった」「3:よくあった」
- ②「0:全然いやではなかった」「1:すこしいやだった」「2:かなりいやだった」「3:とてもいやだった」

【項目】

学業ストレス

1. 一生けんめい勉強しているのに、成績がのびなかった
2. 勉強で新しい内容(新しく教わったこと)をおぼえるのが大変だった
3. テストや通知表の成績が悪かった

友人ストレス

4. 友だちから嫌なことを言われた
5. 友だちとけんかした

部活ストレス

6. 部活動の練習がきびしかった
7. 部活動で、練習しても上達しなかった

(12) 養育態度の認知

【教示文】

あなたを育ててくれている人は、ふだん、あなたにどのようにかかわっていますか。下のそれぞれの文について、「1:全くない」～「5:いつもそうだ」までの中から、選んでください。

【評定】

1. 全くない
2. あまりない
3. どちらでもない
4. だいたいそうだ
5. いつもそうだ

【項目】

温かさ

1. よろこんであなたといろいろな話を話す
2. あたたかく優しい声で話しかけてくれる
3. あなたの好きなことをさせてくれる

過干渉

4. あなたがしようとすることに、いちいちこうしなさい、とうるさく言う
5. 勉強について「もうやったの?」「早くやりなさい」と声をかける
6. あなたのことを心配しすぎる

(13) エフォートフル・コントロール

【教示文】

下のそれぞれの文について、今のあなたにどれくらいあてはまるかを、「1:まったくあてはまらない」～「5:とてもよくあてはまる」までの中から、選んでください。

【評定】

1. 全くあてはまらない
2. あまりあてはまらない
3. どちらともいえない
4. だいたいあてはまる
5. とてもよくあてはまる

【項目】

行動始発の制御

1. 物事を時間通りになかなか終わらせることができない
2. 宿題をしなくてはならないときでも、宿題をはじめの前にしばらくの間遊んでしまう
3. 宿題は提出期限前に終わらせる
4. むずかしい課題をしなければならないときは、あとまわしにしないで、すぐに始める
5. しめ切りぎりぎりまで課題をやらない

注意の制御

6. 宿題に集中するのは簡単だ
7. 学校で、次の時間の授業に向けて気持ちを切り替えるのは難しい
8. 勉強をしようとするとき、まわりがうるさいと、集中するのが大変だ
9. まわりでおこるさまざまな出来事が変わっていくようすを、しっかりと理解することができる
10. ひとつのことをしている最中に、その場をはなれて、別のことをしがちである
11. 人に何かのやり方を教わるとき、しっかり集中して聞く

行動抑制の制御

12. やめろと言われたら、していることをすぐにやめることができる
13. 待ちきれずについプレゼントを開けてしまう
14. やめようとするほど、してはいけないことをしてしまう
15. 秘密を守ることができる
16. 計画したことや、立てた目標を、最後までやりとげることができる

(14) 問題行動経験頻度

【教示文】

以下の質問について、あなたは半年くらいの間で、じっさいにしたことがどれくらいありましたか。「0: まったくなかった」～「4: なんともあった」までの中から、選んでください。

【評定】

0. まったくなかった
1. あまりなかった
2. どちらともいえない
3. けっこうあった
4. なんともあった

【項目】

1. 学校で禁止されている持ち物をもってくる
2. 学校の規則にあわない服装や髪型をする
3. 大人に対して反抗的な口調で話す
4. 大人の指示にしたがわない
5. 親や先生に見つかったら怒られそうなことを、こっそりする
6. 大人から注意されたことに反抗する
7. 夜遅い時間に外で遊びまわる

(15) 攻撃行動経験頻度

【教示文】

以下の質問について、あなたは半年くらいの間で、じっさいにしたことがどれくらいありましたか。「0: まったくなかった」～「4: なんともあった」までの中から、選んでください。

【評定】

0. まったくなかった
1. あまりなかった
2. どちらともいえない
3. けっこうあった
4. なんともあった

【項目】

身体的攻撃行動

1. 物を使ってほかの人をたたく
2. ほかの人を、たたいたりけったりする
3. だれかに暴力をふるう

言語的攻撃行動

1. だれかにいやみなことを言う
2. 相手が嫌がるようなことを言う
3. 相手をけなすようなことを言う

付録 2. 博士論文執筆に関わる業績一覧

1. 論文

松木 太郎 (2013). 青年の居場所感が攻撃行動に及ぼす影響 神戸大学発達・臨床心理学研究, 12, 13-17.

松木 太郎・齊藤 誠一 (2014). 思春期における問題行動に関する衝動的行動特性の概観と展望 神戸大学発達・臨床心理学研究, 13, 21-26.

松木 太郎・齊藤 誠一 (2016). ネガティブな情動を経験した際に重要な他者からのサポートが青年の獲得的レジリエンスに与える影響の検討 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 9(2), 125-128.

松木 太郎・齊藤 誠一 (投稿中 (修正採択)). ネガティブな切迫性および刺激欲求が青年の自己破壊的行動欲求に及ぼす影響 青年心理学研究

松木 太郎 (投稿中). 中学生の獲得的レジリエンスがネガティブな切迫性に及ぼす影響——身体発育のタイミングに焦点を当てて——神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要

2. 学会発表

松木 太郎・齊藤 誠一 (2014). ネガティブな情動を経験した青年が重要な他者に求めるサポートについての検討 日本教育心理学会第 56 回総会発表論文集, 320.

松木 太郎 (2015). 思春期における衝動的行動傾向の促進要因および抑制要因についての検討 日本青年心理学会第 23 回大会発表論文集, 20-21.

松木 太郎・齊藤 誠一 (2015). 青年期におけるネガティブな情動を緩和するサポートが獲得的レジリエンスおよびストレス反応に与える影響について 日本発達心理学会第 26 回大会発表論文集, 419.

松木 太郎・齊藤 誠一 (2016). 思春期におけるエフォートフル・コントロールの形成要因についての検討 ——思春期の青年を取り巻く人間関係に焦点を当てて—— 日本発達心理学会第 27 回大会発表論文集

齊藤 誠一・吉田 圭吾・佐藤 有耕・松木 太郎 (2016). 思春期の発達の意義を多様な観点から検討する 日本発達心理学会第 27 回大会発表論文集

Matsuki, T. (2016). Relationships between negative urgency and problem behaviors in

early adolescence: the moderator effect of effortful control. *In Poster presented at the 24th Biennial Meeting of the International Society for the Study of Behavioural Development, Vilnius, Lithuania.*

Matsuki, T., & Saito, S (2016). The impact of family and peer involvement on effortful control and externalizing behaviors in early adolescents. *In Poster presented at the 31th International Congress of Psychology, Yokohama, Japan.*